

---

# いざたて戦人よ

藤沢みや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いざたて戦人よ

### 【Nコード】

N4525N

### 【作者名】

藤沢みや

### 【あらすじ】

光の国と呼ばれるトラガには三人の代行者がいる。光の女神、地の大臣、青の魔師。その三人の代行者は今までと違っていた。光の女神代行者のファールに見出され、地底国トラガに降りたジャックは、終末の近い国の現状を知る。

## 登場人物紹介

フアーラ、もしくはミリアフアーラ

：フアーラ・ミリアフアーラ・セントレル・グレースタ・トラガ

トラガ  
光の国の巫女姫

ソレテ  
光の女神代行者 金の髪を持つが、元は灰色の髪をしている。十六歳。

ジャック

：ジャクソン・ドウリー・ブレースタ

シャルダ帝国ブレースタ領嫡男

ヌーサ  
地の大臣代行者 茶色の髪を持つが、元は蜂蜜色のまっすぐな髪。十九歳。

ティアラ

：ティアラ・キャンティアラ・セントレル・グレースタ・トラガ

トラガ  
光の国の第一皇女

サイア  
青の魔師の代行者 青の髪を持つが、元は灰色の髪をしている。十五歳。

## 01：序章

戦うとは  どういふことだろう？

胸元で交差するような袷あわせの上衣。その下の長い袖の衣は襟元がひらひらと揺れ、袖元も幅広で彼女が腕を動かす度にたゆたう。

布をゆったりと使った腰を覆う布は巻いて身に着けるもので、金糸銀糸で見事な刺繍が施されている。上衣と同じで布の下には同じ形の長さで薄さの違う布があり、そちらは歩く彼女の足下を隠し地面を擦る度にさらさらと純白の煌めきを見せる。

長く伸びた朝陽のような金の髪。それは束ねられることもなく風に踊っている。

首筋と手首に煌めく、純銀と深い翠あざの玉。

足下の布から歩を進める度にわずかに見える靴は、先端の尖った踵の細い華奢なもの。

緑と闇が深く、天上にあるはずの太陽の陽射しも届かないような森の奥。

人間が管理していたわけではなく、動物たちだけが生活するような場所を突き進むには、彼女の服装は限りなく場違いだった。

(っひ　　)

その、彼女の体が強張った。

低い枝を掻き分け、感覚だけを頼りに歩を進めるが、出会うのは戦で散った哀れな兵士と彼らを支えた馬の抜け殻だけ。

地面には血が染み付き、幹には剣戟の跡、折れた矢、突き刺さったままの槍、転がっている盾。

濁った目を見開いて崩れ落ちた兵士を懸命に見ないようにして、彼女　　ファースは袖で口元を押さえて自分を呼ぶ場所に行く。

わたくしは呼ばれている。

そう、この先には捜し求めていた『彼』がいる。

早く見つけなくては。

戦争を体験したことのない十六歳の少女にとって、この森の惨劇はまるで酷い結末の物語の中に放り込まれたような、どこか実感を伴わない景色であった。

歩くのをやめてしまいたい。

早く戻りたい。

捜し当てて、彼がわたくしたちの役に立つとは限らない。

彼など、いなくても大丈夫。

本当は大丈夫なわけなどまったくないのに、この場所から早く立ち去りたいがために意味のわからない言い訳が、心の奥の暗いところからどんどん沸き出してくる。

(　　！)

太い幹に凭れるようにして兵士が死んでいる。

眉間に突き刺さった矢が致命傷だったのだろう。目の玉が零れ落ちそうな程に見開き、拳を強く握って命尽きている。

もう、数えることも放棄してしまうくらいに人間が死んでいる。

戦うとは、誰かが死ぬことなのだ。

むせ返るような血の匂い。

生臭いような、なにかがゆっくりとした速度で腐っていくような、  
絶え難い異臭。

細い獣道を進んでいるファアラの前に、また緑の通せんぼ。

近い。

彼女の中の神と呼ばれる何かが、言葉ではない短い感情で教えてくれる。

薄い唇を軽く噛み、細い枝を掴む。

一瞬の逡巡<sup>しゆんしゆん</sup>。

覚悟を決めて、枝を掻き分けて一歩、また覚悟を決めて一歩。頼るものがない自分は、自分にしか頼れない。

『地の大臣<sup>ヌーサ</sup>』がどんな人だって大丈夫。

大丈夫。

後、十歩進んで誰にも出会わなかったら中洲<sup>なかす</sup>の国へ帰ろう。

ファアラ・ミリアファアラ・セントレル・グレースタ・トラガという長い名を持つ、光の女神<sup>ソレア</sup>代行者の役目を背負った彼女。

膝裏にまで届く程に長い、浅い陽の光の髪をした少女が五歩進んだ先に、彼女が長い間捜し求めていた一人の青年がいた。

十九歳の自分にとって、五小隊を率いて中隊長として搦手の陣に組み込まれるのは名誉なことなのか、それとも戦力として当てにされていけないのか判断に困る状態だった。

ジャクソン・ドウリー・ブレースタ。蜂蜜色の真っ直ぐな髪を短く切り揃え、まだ新しい鎧を身に纏っている。

格好だけなら一人前の兵士のようなのだが、造船業が生業なりわいの一族の棟梁りょう息子として産まれた自分はまだ技師としては卵から孵ひらくこともできず、部下として率いている職人達に毎日しごかれている存在だ。

上官としても中途半端。

職人としてもまだまだ。

こんな自分が、技も気概も根性もある職人達を率いて戦うことなど、考えたこともなかった。

ブレースタ領は一方を海に面し、三方を山に囲まれた緑豊かな天然の要塞だった。彼が成長するまで大きな戦争など起きたことがなかったのに、三ヶ月前に国家を二分する事件が起きた。

ブレースタ領も含め、十三の領を支配するシャルダ帝国の皇帝が早世したのだ。

二十二歳になる双子の皇子のどちらが国を継ぐかでそれぞれの領主たちの思惑は交差して、領内も分裂し、終ついには戦が始まった。

同等の容姿、同等の才覚、同等の野心、そして同等の自尊心。

政治に明るい兄。

戦略に長けた弟。

一触即発の双子を煽ったのは、宮廷内の愚かな老害たち。

いつまでも権力者という甘い椅子に座ることを望み、豊かな大地を犠牲に、まるで領民たちの命を駒のように考えて戦を起こした。

ひと度戦争になれば、宮廷に献上する船を造ることと、漁で生き抜いてきた穏やかなブレースタ領の人たちも無理矢理に駆り出される。大切な命を、帝国すべてを巻き込む大掛かりな見たこともない皇子二人の兄弟喧嘩に、捧げることとなったのだ。

「ジャック坊、これからどうするつもりだ？」

射抜かれた右腕を強い酒で洗い清め、手際よく包帯を巻く壮年の男、デンホルムに聞かれ、青年は痛まない程度に肩を竦めた。

五小隊を集めた中隊長。ブレースタ領では小隊は五名。内一人が小隊長で、五小隊を中隊長が束ねる。

だが、ジャックが率いる小隊の中で彼より若い者がいる隊はない。一番ひよつ子の自分が『坊』と呼ばれても仕方がないのはわかっていても、眉が寄せられるのはどうしようもない。

「棟梁の首が獲られたのは確かだ」

「そうなつたら、一人息子のお前がこの国を治めなければならぬ」「親父の首を獲ったのが、姉さんの嬪殿でも？」

ジャックは蜂蜜色の頭を掻き回して、疲れたように呟いた。

五小隊なら自分をいれて二十六名。だが、今ここには八名しか残っていない。たった八人の領民。一人は偵察のため、離れているので、この場にいるのは自分をいれて七名。

昔気質の親父と、宮廷に長くいた義兄あにアダルバートとは随分前から確執があった。積極的に宮廷と縁を結び、ブレースタ領の力を強めようとした義兄。

物心つく前から優れた義兄と比べられ、溜め息ばかり吐かれていた自分が、今さら新しい領主だと言い出して、戦争で疲弊した領民たちのどれくらいが支持をしてくれるのだろう。

自分が率いている兵士たちはすべて親父と苦楽を共にした男たちで、義兄の元で上手く立ち回れるような人たちではない。

彼らにとつては、義兄は恩知らずの裏切り者。

義兄から見れば、自分の部下たちは昔ばかりを振り返る愚かな男たち。

ならば、義兄とそりの合わない者たちを束ね、避難させるのが自分の役目なのかもしれない。

「大変だ!!!」

がさりと大きな音を立てて男が飛び出してきた。偵察に行っていたブノワだ。

「今、城が落ちた。ブレースタ城にギュンダー兄皇子の旗が掲げられた!」

「嘘だっ」

アデルが叫ぶ。

「先程から、馬に乗ったジュリアンナ姫が生き残った兵に投降の呼びかけを行っていらっしやる」

「姉上が」

勝ち気な姉は、ずっと自分の夫と父親が決裂しようとする度に押さえてきた。力もなく、幼い自分には姉の苦労は露とも見えず、なんであんな、父親と喧嘩ばかりするような夫を選んだのだろうか

日々、不思議に思っていたものだ。

造船以外は自然の恵みに任せようとしていた親父。

造船技術を生かして、もっと宮廷との結びつきを強くして国力を上げようとした義兄。

そんな、強かな雄々しさに惚れた姉。

誰が悪い訳でもなく、ただ、そう 時機が悪かったのだ。

「みんなは嫌だろうが、投降しよう」

ジャックは見渡して穏やかに言う。

「坊、それだけは駄目だ」

「戦争が終わった今、名誉の戦死は即ち自殺でしかない。俺はみんなを殺したくない」

「だが !!!」

七名の男が、必死の形相で義兄の元では生きることすら苦痛であることを説く。

名誉。

自尊心。

誇り。

そんなもの『生きていく』という現実の前では無意味なものではないのに、そんな形にならないものに縋っている男のなんと多いことなのだろう。ジャックは溜息を飲み込む。

その時

「ああ、ここでしたのね」

ただならぬ雰囲気とは正反対の息を切らした少女の眩きが、その場にいた八人の男たちの怒鳴り合いを一瞬で凍らせた。

金と白、ふわふわとした戦場に不釣り合いの衣装。森の木々で引っ掻いたのだろう、小さな蚯蚓みみずがのたうち回っているかのように、少女の顔や腕を赤くしていた。だが、そんなことすらも突如現れた光の化身のような存在を、遜色させることはなかった。

鈴のような音。

まるで、伝説にある神が持つ鈴の音が鳴ったかのような清らかな音が響き、彼女が一步踏み出した瞬間、その音は高らかに鳴り続ける。

ゆったりと鳴っていた鈴の音は、次第に嵐の夜に打ち寄せる波のように激しさを増し、清らかだからこそ人間を脳髓から苦しめる。

鈴の音の激しさが増すと共に、ファアラとジャックの周囲から青白い光が立ち上る。青は空色へ、そして白に、徐々に金色が混じり始め、頭を抱え立っていられない程の鈴の音が鳴り響く頃には、純粹な金だけが周囲を覆っていた。

清らかで濃く、そして何者の穢れをも弾き飛ばすような、力強い金の波。

そして、静寂。

「あれ？」

膝き、頭を抱え込むようにして音と光に堪えていたジャックは、気がつくと周囲が変わっていることに戸惑う。

今まで見えなかったもの、聞こえなかった音、知ることのなかつ

た木々の声、動物たちの悲しみの歌、そして地に染められた大地の嘆きが言葉としてではなく、言語にできない感情として流れ込んでくるのだ。

「坊」

いつも自分を怒鳴りつけるフェイブ爺が、顔面を蒼白にして自分を指差す。人間を指差すなど行儀の悪いことをするなといった爺が、と怪訝に思っているのと白と金の少女以外の男たちが自分を見て目を零しそうな程に見開いている。

「髪が」

「髪？」

瞳をゆっくりと瞬かせてジャックは頭に手をやるが、自分を映す鏡や水溜まりがあるわけでもないのに、なにがどうなっているかなどわからない。

「やつぱりあなたが『地の大臣』<sup>ヌーサ</sup>なのですね」

嬉しそうに白と金の少女が近付いてきて、自分の傍に膝をつき、細い重労働をしたことのないような真っ白な肌と色の手で土と煙と血で汚れた手を取った。

また、微かに鈴が鳴った。

「え？」

目にかかる髪の毛の色が違う。

自分の髪の毛は金髪だったはずだ。

城を訪れた吟遊詩人に蜂蜜で染めたような甘い金の髪と評せられた髪の毛。そんなふうに言われるのは心底腹立たしかったのだが、いざ髪の毛の色が濃い茶色に変わっていると目を閉じるのも忘れて見開くしかない。

「あ、あの娘さん。いまいち俺たちには状況が掴めないんだが」

フェイブ爺が場違いな装束の少女に声をかけると、少女は剣の束つかに手をかけ周囲を取り囲むようにして居並ぶ男たちを見て微笑した。やさしい微笑。

「ご挨拶が遅れて申し訳ありません。わたくしは光の国『トラガ』の女神代行者のミリアファールと申します。ファールとお呼び下さい」

たゆたう布を両の手で摘んで、彼女は優雅な仕草でお辞儀をした。まるで、この戦場が王宮の一室だと勘違いしてしまうような高雅な仕草。

「わたくしは、この方を捜し求めて我が国を暫離れて参りました。みなさまがよろしければ、トラガにいらして頂きたいのです」

「はあ」

「いまいち彼女の説明は要領を得ない。」

「わたくしの国はもうじき滅亡します」

「は!?!?」

### 03：第一章 光の国と呼ばれる地底の国へ - 2 -

さらりと零された言葉は驚くべき発言のはずだ。  
国が滅亡する。

だが、目の前の少女の表情からは悲しみも痛みも嘆きも、感じられない。

彼女はその場に転がっている木の枝を手にして、地面に図を描き出した。ファアラは絵心がないらしい。とても拙い。

「トラガはグレメンディアと呼ばれる大河の中洲なかすに存在する国です。今までは中洲の女神が懸命に守ってきたのですが、すでに力が尽きております。国民の大半は、国王や大臣たちと共に東の友好国マシアに赴きましたが、残された五十名程の国民たちの脱出方法がない状況なのです」

「そこへ、来いと?」

ジャック以外の男たちの顔がしかめられる。

「古代に使われた船が一隻、城の下に眠っております。これに民を乗せ、わたくしと女神の力をすべて用いて対岸へ運びます。ですが、力が足りないのです。我が国では女神代行者の他に『地の大臣』ヌーサー、『青の魔師』サイアの二人が揃わなければ、『光の女神』ソレアは完全な力を発揮することが出来ません」

ファアラは顔を上げてジャックの顔を覗き込む。

「あなたには、我が国に来て頂くだけで結構です。事が終わりましたら、必ず無事にこちらまでお送りします。ほんの少し 十日程で構いませんので、あなたのお時間をわたくしに頂けませんか?」  
「いるだけ?」

「はい。いて頂くだけで、わたくしの力は戻ります」  
「俺が必要?」

少しおどけて言うと、彼女は真剣な表情のまま頷き「はい。あなたが必要です」と真っ直ぐ射抜くような瞳で自分を見上げてきた。

彼女の瞳は真摯だった。

心の底からジャックのことを必要としている。

ジャックはひとつ頷く。

「行くよ」

「坊？」

「待ってくれ！」

周囲の男たちがざわめきたつ。

ジャックはここが自分たちの分岐点だと決めて、自分を取り巻く男たちを見回した。

「この子は、俺のことを必要だと言ってくれる。でも、このブレースタ領にとって、俺は必要どころか、はっきり言ってしまえば不要だ。卑下して言うわけじゃないぜ。姉さんは今度は俺と義兄さんの間で胸を痛めることになるだろう」

「ジャック坊」

「俺たちは負けたんだ。正義感溢れる義兄さんなら敗残兵の俺たちも生かしておいてくれるかもしれない。でも、これからどうする？」

言葉を切って周囲をまた見渡した。

「親父とは考えの違う義兄に、お前たちは忠誠を誓えるか？ 漁をするためでなく、自国を守るためでもなく、周辺国を攻撃するための船を、お前たちは造ることができるのか？」

茶色になった前髪を掴んでジャックは笑った。

「俺はさ、ここで死んじゃったことにした方が、姉さんにとっても義兄さんにとつてもいいと思うんだ。領土っていうのは治めたくて、そして能力のある人が治めればいい。俺にとつての限界はここにいる人数分ぐらい。親父と比べたら俺は至らないところばかりだけど、お前たちが真っ直ぐな気持ちで船を造れる環境を捜し求めて行きたい。で、思うんだけど、もうこのブレースタ領にはそういう環境は求めようがないんじゃないかな」

ファアラが会話がわからずにきょとんとしている。

「ジャック殿？」

長い金の髪が風にそよいで煌く。

「なあ」

ジャックはフアーラに声をかける。

「はい、なんでしよう？」

少女はにっこりと笑って首を傾げた。

「東の友好国つてのは海の近く？」

「残念ながら　でも、海はございませんが、それはそれは大きな湖と、大河に挟まれた水の王国です」

「じゃあ、造船技術は売れるな」

「わたくしは造船業には詳しくはございませんが、マーシアでは造船業に携わる者は技術と心意気が立派であれば、貴族待遇も夢ではないそうです」

「ふうん」

顎に手を当てて考え込むジャックを、少女は少しばかり心配そうに見つめている。

ジャックは顔を上げると破顔した。

「やっぱりさ、この国では敗残兵として一生を過ごすより、この可愛いお姫さまを助けて、水の国へ行って新天地を捜し求めた方が楽しいと思うんだ」

おおらかに笑って言う青年を見つめて、周囲の男たちは力なくその場に崩れ落ちた。

ガシヤガシヤと鎧のぶつかる音が響く。

「みんなの中には、この国に家族がいる者も多い。だから無理強いはしないけど、俺と一緒にでも楽しそうだって思うんだっつらついて来いよ」

崩れ落ちた男たちはその場で力なく笑い出した。

この青年はなんと屈託なく自分たちのことを『敗残兵』と言うのだろう。

「わしはついて行きますぞ。直す船があり、そしてジャック坊がいる地ならば。家族には申し訳ないが　じゃが、わし以外はみな

婿殿の味方じゃったから構うまい」

フェイブ爺が涙を袖で拭いながら言う。

「私も」

「俺もついて行きます」

その場にいた一人を残して、全員がついていく旨を告げた。

「すみませんが」

偵察に行っていたブノワが、申し訳なさそうに頂垂れる。

「いいよ。新婚だろう？ お前を連れていったら奥さんに怒られる。悪いけど、俺たちのことは谷に落ちたとか、適当にごまかしておいてくれるかな？」

「姉君に伝えなくてもよろしいのですか？」

「そうだな」

ジャックは首を傾げて唇を尖らせた。

「姉上はあれで意外と気の強いお人だから、大丈夫だよ。お前が黙っているのが辛くなったら、そうだな、一年は黙っておいてくれるか？ それくらい後だったら、さすがに義兄さんも捜索隊を出したりしないだろうし」

「若君」

ブノワは顔を真っ赤にして目尻に涙を湛えていた。

「泣くなよ　俺たちは生きるためにこの領土を離れるんだ。笑って見送ってくれ」

「わかりました」

「では、参りましょうか？」

少女の声に、男たちは残る青年に背を向けて歩き出した。

彼女が歩いた分だけ戻る必要はなく、茂みを掻き分けたすぐそこに大きな穴が存在していた。この穴は女神の力で一時的に開いたものだ。だからのファアラの呼びかけに答えて移動もしてくる。

「恐れ入りますが、みなさまお手を繋いで頂けますか？　そうしな  
いと力が行き渡らないので」

まるでダンスを請うかのような優雅な仕草で、ファアラがジャック

クに右手を差し出した。その小さな手を取ってジャックは隣にいた  
フェイブ爺に手を差し出す。

「トラガは地底にあります。あなたたちが暮らしていた世界の真下  
に　　今から下へ降りますので、その間恐ろしいでしょうが我慢  
して下さいませ。わたくしの力でみなさまをお守りします。絶対に。  
光と大地、水にかけて誓います」

ゆったりと笑って彼女は七人の男を見渡した。男は誰一人文句を  
言うことなく黙って頷いた。

急激な落下。

されたことはないが、きっと城壁から投げ出されるよりも、もっともつと長い間、下へ落ちる。

呼吸もままならず、空気が下から上へ突き抜けていく。このまま地面に叩き付けられるのではないか　　という不安に陥ってしまう。

すると閃光。

金の波が踊る。

今までの暗く長い穴を落下していたようだが、それが急に視界が開け、金の雲のようなものが広がっていた。

同時に落下速度が遅くなる。

顔を撫でる風がやわらかくなった。

「あの金色の波は『空虫』です」

虫という言葉にぎよっとしてキョロキョロしてしまう。

「この地底国の天上にはみっしりと『空虫』が停まっているのです。彼らの背中に色が弾け、地上と変わらない空模様が生まれます。ですので、民の中でも自分たちが暮らす国が地底にあるということを知らない者も多いのです」

ジャックが吃驚して瞳を見開いていると、ファアラが小さく息を吹き出すように笑って説明してくれた。

「虫と便宜上は呼びますが、本当は細かい粒のような意思があるかもわからない生命いのちです」

地上と地下ではだいぶ違うらしい。

ジャックが改めて空を見上げる。

空を見上げていて、空があるはずなのに、それは空じゃない。

自分たちが知っている空じゃない。

変な気持ちだ。

「下に見える小さな島、あれがトラガです。もう、命短いわたくしたちの故郷」

足下を見ると、大河に小さなダイヤモンド型の島が浮かんでいる。さらに速度が緩くなり、島の様子がつぶさにわかるようになる。白目を剥いていた他の男たちもはしゃぐように喋っていた。

船を造る男たちだ。少しぐらいの高さには適応能力がある。

「お姉さま〜！」

島の中心部にある古びた城の塔から、青い髪の少女が手を振っている。

「第一皇女のティアラ・キャンティアラ・セントレル・グレースタ・トラガです。ティアラと呼んであげて下さい。長い名前で呼ぶと怒るんです」

穏やかに笑いながらファアラは言うが、その笑みはどこか淋しそうに感じられた。

「青い髪の毛」

ジャックが呟くとファアラが小さく頷く。

「ええ。彼女が『青い魔師』です」

地表からもの珍しげに上を眺めている人たちの髪の毛は揃って黒。不思議に思っただけで周囲を見ると、ジャックと一緒に来た仲間の髪の毛がみんな黒髪になっていた。

男たちも仲間を見て驚いている。

「大丈夫です。この国を離れば、元の色に戻ります。少しの間だけご辛抱下さい」

朗らかに笑う少女の言葉に、男たちはただ苦笑を零すだけでなにも言わなかった。

城の前の広場に降り立つ。すると弾けるように元気な声が少女を呼ぶ。

「お姉さま!!!」

青い髪の少女が駆け付け、「お帰りなさい！」とファアラに飛びついた。

満面の笑みの青い少女の体を、おずおずと抱き返してファアラが「ただいま」と答える。

青い、腰まである髪の毛。

耳元で一部が切り揃えられている。深い海の青。晴れた空の元で銀の波を照り返す、故郷の海の色に似ている。

少し吊り上がった大きな青い瞳。

くりくりと元気に動く瞳は、じとりとジャックを見上げて細められる。

お姉さん大好きっ子なんだな」とその視線でわかる。

「ティアラ。こちらが『地の大臣<sup>ヌーサ</sup>』のジャック。他の方は彼のお仲間です」

ファアラの短い紹介にジャックは苦笑を零す。

「初めまして。ジャクソン・ドウリー・ブレースタと申します。彼らは私の部下という名目ですが、ファアラ姫が仰ったように、実質は私の仲間になります。しばらくの間ご厄介になりますが、よろしくお願いします、ティアラ姫」

小さな頃から厳しくつけられていたことが、こんなところで役に立つとは　　と思いつつ優雅な仕草を心がけて頭を垂れる。

膝は折らない。

彼女は主君ではないし、今のところ守るべき姫君ではないから。

立場は対等。

なら軽々しく膝は折るべきじゃない。

「こちらこそ、わたしはこの国の皇女ティアラと申します。そして『青い魔師<sup>サイア</sup>』でもあります。あなたのような方が『地の大臣<sup>ヌーサ</sup>』ということは信じ難いのですが、お姉さまが連れていらしたのですし、髪の毛がそれということは真実なのでしょう。短い間ですが、よろしく願います」

目を見開く。

あまりの不調法さに声も出ない。

初めて会う相手に対して、その言い種はないんじゃないだろうか

そう思うが、いきなり自分の大切な姉がこんな得体の知れない男たちを連れて帰れば、攻撃的になるのかもしれない。

自分がそういう立場に立ったとしたら、どう思おうが感情を膜に包んで一応の礼儀を尽くすだろうが、まあ、まだティアラ姫は精神的にも子供なんだろう。

自分も子供と大差ないことは、遠くの棚に置いておいて。

ジャックはそうのんびりと考えて、彼女の切つて捨てるような挨拶をいくばくか楽しく見つめる。

棘々とした妹姫の態度に、恐縮したかのようにファアラが微笑を浮かべる。

「城へご案内致します」

金の少女は、なんとというか最初から態度が遜へりくだっているような気がする。

妹に対しても妙によそよそしい。

(いや、さつき第一皇女つてティアラ姫のことを呼んだな。つていうことは 本当の姉妹じゃない?)

疑問は今、問い質すことではないだろう。

また時間があるうちにファアラに聞けばいい。

「娘さん、船を 船を先に見せてくれんか？」

フェイブ爺の言葉にファアラは破顔する。

「かまいませんが、本当に古い船ですよ」

「じゃが、その船をあんたは短期間だが動かすと言う。あんたは魔法を使えるようだが、わしらが可能な限り船を直せば、制御や川の流れに集中できるんじゃないか？」

フェイブ爺は彼女のことを『あんた』と呼ぶ。ブレースタ領での独特の言い回しのようなもののだが、ジャックは少しばかり冷や冷やしてしまふ。

どうか、青の姫が怒りませんように。

しかし、それはファアラの嬉しそうな声に杞憂に終わった。

「ええ。船底に大きな穴が開いていて、そこを直していただけるだけでもわたくしは助かります」

「よし！ じゃあその船を、わしらの持てる力のすべてを使って直してみせよう！！」

男たちはジャックの意見など聞こうともせず、勝手に盛り上がっている。

「 よろしいんですの？」

ファアラが小首を傾げる。

不思議そうに瞬きをしてジャックを見上げるが、ジャックは肩を竦めることしかできない。

「ファアラ姫」

呼びかけると、彼女が綺麗な眉をひそめる。

「恐れ入りますが、わたくしは姫ではありません。ファアラと呼び捨てで結構です」

ファアラの抗議に、ティアラから抗議の声が上がる。

「お姉さまは、この国の『光の女神』の代行者ですよ。呼び捨てなど許されません」

どうやらティアラは、ジャックに対してはことさら非難をしたいらしい。

そんなティアラを見やってファアラは微笑む。

「それを言うなら、彼は『地の大臣』<sup>ヌーサ</sup>の代行者。わたくしたちは対等の存在。あなたがたは、形の上ではわたくしに従っていますが、本当のところは違う。わかっているでしょう？」

自分の右腕にすぎるようにしている妹の腕を、ファアラは優しくぽんぽんと叩いて微笑する。

ティアラは唇を噛み締めて、ファアラの腕をさらに強く抱き締める。

よくわからない姉妹だ。

ジャックは頭を掻く。

「えーと　俺としてはどう呼ばれても、呼んでもかまわないんですが、ティアラ姫を敵に回すつもりもないんで、ファアラ姫にご辛抱頂けないでしょうか？それに、俺もあなたのことを呼び捨てにするのは、ちょっと困る」

「困るんですか？」

「困ります。親に、女の子の名前を呼び捨てにするなど教育を受けましたので」

少しおどけて言うと、ファアラは目を細めて笑った。

「それより船へ案内して頂けませんか。じっさまたちは短気ですか

」

「はい」

いったん城に入り、大階段の裏にある絨緞を退けると木の扉が現れた。

ドレスを着ている姫君たちが開けようとするのを男たちが止め、長い間、開かれたことのないと思わせる扉を押しあげる。

狭い階段を下りていくと、工場のような広い場所があり、中央に大きな木造の船が置かれていた。

城の半地下で造船をして、城の下に流れている川に浮かべて運び出す仕組みになっている。城の前には溜め池もあるから、地下に降ろしていく荷物は城前で積むこともできるようだ。

フアーラが船を手のひらで指し示す。

「今から、約百五十年程前に建造された『ルシア・シャリア月光の雫』号です」

「出発までに何日かかるんだい？」

フエイブ爺がフアーラに聞く。

「力を貯めるまでに、七日程は必要となります。予定としては十日後までには必ず出発しますが、準備が整い次第出発したいのが本音です。ジャックさまがいらっしゃるので、もう少し早く力が貯まるのではないかと思うのですが」

「俺　？」

自分がいるだけで？

そんなことは今までなかったことなので、怪訝に思っただけを傾けてしまう。

「あなたがここに着いた瞬間から、大地が力を僅かですが取り戻しました。大地に回さなくてもいい力ができましたので」

また微笑。

フアーラはいつも笑みを湛えている。

なんというか、返って不自然だ。

だが、とりあえずそれは横に置いておいてジャックは口元に手を当てる。

「荷物や人を搬入するのに一日はかかるだろうから、作業に使える時間は六日というところか。ギリギリに出発というのは危ないんじゃないのか？」

ジャックの問い掛けに、ファアラは硬い顔で頷いた。

「フェイブ爺。作業期間は最大五日半。六日後の早朝にはすべての作業を完璧に終わらせてくれ。それから、城の前の溜め池に船を出して荷と人を積み込む。そんな感じでいいか、お姫さま方？」

もう一度、確認のために隣を見る。

「はい。よろしくお願いします」

深々と金の頭を下げてファアラが言う。男たちはすぐさまどこを誰が見るかを決めて、散り散りに船に乗り込んだ。

「あなたは行かないの？」

棘々な青い姫がむつすりと聞いてくる。

なんとというか、こうあからさまなのはちょっと笑えてくる。

ぼりと頭を搔いて肩を竦めた。

「俺はまだ、ヒヨコにもなっていない卵なんだ。残念ながら」

ジャックの呟きと同時にファアラがティアラに手を差し出した。

「ティアラ。手を貸して」

「」

ファアラの腕に抱きついていた少女が、渋々と手を差し出した。

その手を取って、ファアラはジャックにも手を出すように瞳で呼びかける。

小さな二つの手を挟むように両手で持つと、その瞬間に記憶が一気に頭の中に注がれた。

それは凄じい勢いで脳の中を駆け上り、霧散する。

頭の中で巨大な鐘が、最大音量でゴンゴンと鳴り響いているようだ。

正直、辛い。

「これで、あなたの中に『地の大臣』の記憶が甦りました。後は思い出したい時にそう思えば、記憶を辿り寄せることができるはずです」

ファアラの言葉が終わると同時に、ティアアラが硬い声を発する。

「わたし、みんなに『地の大臣』が現れたことを知らせて来るわ」  
ティアアラは汚いものに触れたかのようにジャックの手を振り払い、振り返りもせずに階段を駆け上がって行ってしまった。

あつという間に消える青い少女。

「俺って、女の子に嫌われるような容姿をしてるのかな？」

冗談めかしてそう言うと、ファアラはがくりとその場に崩れ落ちそうになる。

「つと!!」

慌てて崩れ落ちそうになるファアラの腕を取った。

「姫？」

心配で顔を覗き込むと毅然とした声が返って来た。

「ですから、わたくしは姫ではありません。あなたがそう呼ぶのなら、わたくしもあなたのことをジャック王子と呼びますよ」

声は弱々しいが瞳の力は強い。

「それは遠慮して欲しいな、それよりも、さっきの降下で力を使い果たしたのか？」

「いいえ、大丈夫です。あなたも船を見に行ってください」

取った腕を外したいのか動かされるが、身動きをしたぐらいにしか感じない。

「ここで、座り込みそうな君を残して？」

疑問をぶつけければファアラは唇を噛む。

「ええ。ご迷惑をおかけするわけには、参りませんから」

ファアラはそう言うゆっくりと姿勢を正し、一歩ふらりと足を出す。

だが、彼女の体はまた崩れそうになる。

「ほら、迷惑かけたくないって言うんだったら、抱き上げる許

可をくれないかな？」

「は？」

ジャックの提案にファアラは瞳を真ん丸にする。

「寝室まで運ぶから、そこでさっさと横になって体調を戻す。これが一番俺には迷惑じゃないんだけど。ここで、はい、そうですかと引いても、絶つ対に後で無事に部屋に着いたかな？ とか、倒れてないかな？ って気になるから。君だって、もし同じようなことをされたら、そう思うだろう？」

「そう言われれば　　そうですね」

ファアラは弱々しげに笑うと、おどおどとジャックに手を差し出した。

「申し訳ありませんが、わたくしの部屋は二階の一番奥にあります。運んで頂けますか？」

「かしこまりました」

ジャックは少しおどけてそう答えると、金と白の少女の体を掬い上げた。

(軽い　　)

これだけ髪が長く、金と白のドレスで着飾っているのだ。それだけ重量が重くなるはずなのに、少女の体は予想以上に軽い。よく見れば、骨までは浮き出ていないが手も痩せている。首筋も骨張っている。

「城に残っているのは、あの青いお姫さんだけ？」

「　　いいえ。台所頭のジュリアと執務官長のユージェスが」

「

「執務官長って男だろ？　看病してもらうのに執務官長はまずいよな。じゃあ、部屋に運んだら、その台所頭を呼んで来るから」

「お願いします　　」

少女はジャックの肩に頭を預けると、小さく息を吐いた。

くたりと今にも気を失ってしまいそうな様子に心配になる。

消耗が激し過ぎる。

「ごめんなさい。ご迷惑をおかけして」

「これくらいはちつとも迷惑じゃないから、安心しろ」

「　　丁寧な口調で相手をされるより、そういうふうになぐさくばらんに話して頂けた方が落ち着きます」

「青いお姫さんはそう思わない人種みたいだから、あの子がいる時はなるべく丁寧に話すぜ」

「ティアラは、悪い子じゃないんですよ　　」

「うん、わかるよ。君のことが大切でたまらないって感じで可愛いずっとファアラの腕から離れようとしなかった青い髪の少女。

ファアラのために、きつと彼女は棘々とし続けてきたのだろう。

あの様子は年季が入っている。

「ええ、あの子はとても可愛いです」

「もちろん、君だって可愛いよ」

まるで取って付けたかのような言い方になってしまったが、ジャックはあまり気にしなかった。

腕の中の少女の呼吸がどんどん荒くなっている　　そのことに意識を取られてしまっていたために。

階段を足早に上り、二階の一番奥の部屋を目指す。片手で軽い少女の体を支えて扉を開くと、中にいた中年の女性が声を上げた。

「あなたが、ファアラの言っていた台所頭のジュリアさん？　俺は

『地の大臣<sup>ヌーサ</sup>』で、地上から彼女に連れて来られたんだ。悪いんだけど、この子体調が悪いみたいだから着替えさせて寝させてもらえるかな？」

一応、さらりだけでも自分のことを説明してファアラのことを頼む。

「ええ、はい！」

呆然としていたジュリアだが、現状を把握するときびきびと動き出す。

ジュリアがベッドの上掛けを外したところに、ファアラの体を横たえる。

「水かなにか持つて来た方がいいかな？」

男である自分がこの部屋にいることはできない。そのためにもう問い掛けてみたのだが、ジュリアは首を左右に振ってジャックの腕を掴んで離さない。

「力を 力を分けてあげて下さいませ」

「力を、分ける？」

確か、ファーラは『地の大臣<sup>ヌーサ</sup>』とやらの記憶は甦ったと言っていた。

できるかわからないが目を閉じて「力の分け方」を検索する。

頭の中でゆっくりと「力の分け方」「力の分け方」と何度も唱えていると、細い自分の指が、金系の女性の頬に触れていた。近づく顔。

（まさか くちづけるのか？）

ドキドキしながら記憶を手繰っていると、茶色の髪が視界に現れ、こつんと音がする。

おでことおでこを当てて、力を注ぎ込む過去の『地の大臣<sup>ヌーサ</sup>』。

少しばかり残念に思いながら、ファーラの枕元に近付いて、彼女の頬に触れる。

冷たい。

荒い息で細い体が揺れている。

いたたまれなくなつて、彼女のおでこに自分のおでこをくっつけて祈る。

自分の元気を、彼女が受け取りますように

ついでに多少の筋肉や肉だつて彼女に行つてもいい。

そんなことを思っていると、体の中から力が吸い取られて行くかのような奇妙な感覚に襲われる。

自分の いや、『地の大臣<sup>ヌーサ</sup>』の力が、彼女に注がれていると

いうことなのだろう。彼女の荒かった息が徐々に穏やかになり、剣の稽古を終えた頃ぐらゐの疲労感を感じる頃には、ファアラの呼吸は落ち着いていた。

「はーっ」と大きな溜め息が背後からする。

彼女から離れるのはなんだか抗いたかかったが、このままおでこをくっつけているわけにもいかないで、ジャックはファアラから離れて後ろを振り向いた。

大きな溜息を吐いたのはジュリアだった。

「ありがとうございます」

ジュリアが涙ぐんで礼を言う。

「今までは　ティアラさまがどれだけ力を注いでも、こんなふうにすぐに落ち着かれなくて」

「」

「大きな力を使われた後は、いつもこうなんです」

「　いつも?」

ジュリアの言葉にジャックは眉をひそめる。

「三人揃わなければ、『光の女神』の御力は万全とは言えないのです。『地の大臣』<sup>ヌーサ</sup>がいないのも、最後の代行者の定めと諦めていらつしたのですが、皇太子殿下がこの国を見限つて最後の船で逃げ出されてから　ファアラさまは必死であなたの行方を探していらつしたのです」

三人揃う　皇太子殿下

いろいろと頭の中を検索しないといけないこともあるが、ジュリアが言っているのは検索しても決して出てこない、今のこの国の話。

「皇太子殿下とは、ティアラ姫の弟君?」

「いいえ　ティアラ姫の兄君です。本来なら『青い魔師』<sup>サイア</sup>はギヤリガンさまが受け継がれるはずだったのですが」

ジュリアはしばらくの間、窓の外に目をやっていたが、ジャックが痺れを切らして問い掛ける前に話し出してくれた。

古いにしえから『光ソレアの女神』の代行者は、先代の年齢が四十路に達した時に交代する習わしで、選ぶのは女神。

村のどの赤子に転移するのか誰もわかりはしない。

『光ソレアの女神』の代行者として生まれた娘は、先代の指導のもと代行者として立派に勤められるように教育を施される。

『青い魔師サイア』は代々から王族の皇太子の立場として生まれる。

女神代行者が結婚できるのは『青い魔師サイア』か『地ヌーサの大臣』のどちらかだけで、光の国『トラガ』の歴史が始まって以来、女性の『青い魔師サイア』も、男性の『地ヌーサの大臣』も存在をしなかった

国が減ぶと決まって以降、この国は異変ばかりで、性別が違うのも、その異変の象徴なのではないかと宮廷占術師たちは言っていたという。

ジャックはその話を聞いて、顎に手を当てた。

（性別が違うだけじゃなくて、遙か彼方の上空の違う国に現れたのだから 占術師たちからしたら、異常もいいところだろうな）  
自分が『地ヌーサの大臣』だとかいう、童話めいた話は正直に言っただけでジャックにはどうでもよかった。必要とされない国にいるよりも、目の前の必要としてくれる少女の役に立ちたいと思ったただけなのに

想像以上に重く押し掛かる立場と責任に、ジャックは軽い眩暈を起こしそうになる。

面倒くさい。

だが、自分の長所は切替が早いことだ。

悩んでも、どうにもしようがないことを考え込んでいたって仕方がない。

ファアラの容態がもう少し落ち着いたら、自分の挿入された記憶を検索すればいい。

そういえば挨拶をしていないな　　と、思つてジャックは自分の母親よりも年長であるうと思われるジュリアに優雅な仕草でお辞儀をした。

「ジュリアさん　　あなたの名前、俺の姉の名前と似ています。俺の名前はジャクソン・ドウリー・ブレースタ。ジャックと呼んで下さい」

「まあ、ご丁寧に。私は台所頭のジュリアです。お見知り置きを」  
彼女も丁寧な仕草で、腰で結ぶふわふわとした巻き布を持ちあげた。

「ところで、青の姫に金の姫が倒れたことを伝えた方がいいんじゃないかと思うんだ」

「　　あ。それもそうですわね。ティアラ姫はファアラさまのことをととても慕つていらっしやいますから、お知らせしないと怒られてしまいます」

「冗談めかした口調でジュリアがくすりと笑う。

「街の人に俺のことを知らせてくるって言うて飛び出したんだけど、探しに行つてわかるかな？」

「なにしろ自分は街のことなど全然わからない。

「でしたら、私が姫君を探して参ります。それに、街の者たちはあなたのことを最後の命綱として縋つてしまつてでしょう　　住民に姿を見せることはよくても、街に出かけられるのはお止めになつた方が賢明です」

「　　」

ジュリアの言葉には息を飲むしかない。

最後の、命綱。

「うわー、本当に重い立場だな。と、ジャックはまるで自分のことなのに、他人から見たように考えてしまつ。」

「ファアラさまについてあげて下さい。最近、夢見が悪いよう  
で毎夜うなされていらっしやるのです　　この方を、助けてあげて下さいまし」

ジュリアのやさしい言葉に潜む懸命な気持ちに、いくら女性のことに關しては鈍感だと姉に散々からかわれた自分でも気付くことが出来た。

でも、自分にできるのか？

この細い、金の少女を救うことなど　　だいいち、救うだなんでおこがまし過ぎる。自分の手にはすでに六人の部下がいる。六人と自分　　七人で手一杯なのに、それに彼女まで数に入れるなど。ジャックは穏やかな呼吸で眠るファースラを見つめた。よく見れば、彼女の目元にはうっすらと隈ができている。

この、最後の時を迎えた国を　　王族に見放された小国を、たったひとりで救おうと賢明だったのだろう。

「　　ええ。俺でよければ」

静かに決意する。

俺の、できる限りで彼女を助けよう。

これは、ジュリアに言われたからじゃない。

自分が、彼女を見て、彼女に触れて決意したこと。

「お願いします。では、でかけて参ります」

ジュリアは一礼をすると室内から静かに出ていった。扉が閉まる小さな音がやけに大きく耳に届いた。

ジャックは小さく息を吐き出して、周囲を見渡した。

まずは心の中で（ごめんな。寝ている時に触って）と謝りながらファアラの靴を脱がし、彼女に上掛けをかける。本当なら服も緩めた方がいいのだろうが、初対面の女性が苦しんでいるからといきなり服に手をかけるのは男としてあまりにも情けない。

一応、これでも騎士なのだ。

棟梁息子とか、造船業の下っ端とかの意識のが強いが、それでも騎士。

騎士というのは、いろいろ異論があるかもしれないが、唯一の女主人に生命を捧げる戦士だとジャックは思っている。女主人というのは、身分的なことではなく、忠誠心の対象という意味なので奥さんだったり恋人だったり、上役の奥さんだったりと幅は広い。

今まででいうなら、その対象は母であり、母が亡くなった後は姉となった。時が過ぎればいつしか好きな女性になり、恋人になり妻になるのだろうとのほほんと思っている。

だから、女性にはやさしく。

これがジャックの中の基本。

女性という性は護る対象で傷つける対象ではないのだ。

ファアラが寝入っているのを確認して扉に向かい、一度開いて廊下を見渡す。そして半開きにしたまま、今度は窓に近づく。こちらも鍵を外して開く。

髪の毛が舞う。

強く吹き込んだ風がジャックの髪とカーテンを揺らし、部屋の中を通り抜ける。

身を乗り出して周囲を見渡して状況を確認する。この部屋は二階左前方にある木に飛び移れば脱出は可能だということがわかった。

目の前には森。

果てまで民家もなく、ただ色とりどりの緑が塗られた豊かに見える森と、その森を縦断して川が流れている。

（あの川が、この城の下を通り抜けて反対側に抜けているのか？）  
まだ街側を目にしていけないジャックは、上空から見た景色と目の前の景色を踏まえて考えることしかできない。

とにかく脱出経路は確認した。

ジャックは綺麗に磨かれた硝子の嵌め込まれた窓を閉めて、鍵をかける。

ファアラの枕元ではなく、やや離れた暖炉寄りの場所に椅子を置いて、腰に提げていた剣を手にして座った。

この状況で敵が来るとは限らない。

いや、むしろ敵が来る状態ではない。

だが、ここ数ヶ月の間に磨かれてしまった嫌な習慣は、のんびりとした性格のジャックの中に暗い影を残していた。

戦うのって 剣や弓を使ってだけじゃないんだよな。

白い顔をして、まるで呼吸をしていないかのように静かに眠る『  
光の女神』代行者。

彼女はこの国を『中洲の国』とも言った。

だが、ジュリアは『光の国』と言った。

そこが、彼女の目の下の隈の原因ではないのだろうか。

ジャックは ゆっくりとおでこに指をあてて注ぎ込まれた記憶を探る。

中洲、光 と思いついた言葉を浮かべていくと、該当する記憶が頭の中で再演される。

ジャックは痛む頭を堪えて、長い間そんなふうに思いついたこと  
思いついたことを捌くつていたが 痛む頭を堪え切れなくなり  
そんな直前で、記憶を探ることを放棄した。

欲しい情報はすでに手の中。というか頭の中。

この国に住む者たちは、王族以外は中洲だということを知らない。広い世界の中で、自分たちの国が一番広くて、一番文明が発達していると　　そう思っている。

本来　　フアーラの中にいる女神は『光』の女神じゃない。

この大地、『中洲』の女神だ。

中州の女神がこの国を作りあげた時に凄じい光を発したため、人間が勝手に光の女神だと　　中洲の女神を勘違いしてしまったのだ。女神は人間の少女の中を転々としている間に、決定的な間違いがされていることに気がついたが、すでに定着してしまった呼称を撤回させることもできずに、時が流れてしまったのだ。

今も、そうなのだろうか？

街の人たちはこの国が中洲だと知らない？

（最後の命綱　　か）

そういう言い方をするとということは、たぶん街の人たちはすべてを知っているのだろう。

終わったらちゃんと元の世界にお連れします　　と、何度も

言っていたフアーラ。

その妙に生真面目な少女が、危機迫った状態の街の人たちに真実を隠しておくことができるのか？

無理だろうな。

真実を隠せば、この国に残ると言い出す国民が出るだろう。

そういう人たちを説得するには、結局は真実を口にするしかないのではないか？

だが、そんな真実を知りたい人はまずいないだろう。

（損な、役回りに当たったものだよな）

大きく息を吐き出す。

自分だったらそんな役目はしんどくて堪らない。

どうして自分なんだと、荒れてしまいかもしれない。

しかも、国を治めるべきが者たちが逃げ出した状況。国王も皇太子も不在。唯一の皇族の皇女はファーストに頼り切っている。

（くたびれるだろうな　　）

ジャックは寝台をなんとはなしに見つめる。

女性が寝ているのを見るのは礼儀にそぐわないだろうが、つい見  
てしまう。

彼女の呼吸はあまりにも静かだ。

「　んっ」

浅い呼吸で眠っていたファアラの瞼が、ピクリと動く。

目が覚めたのか？ と、そのまま様子をうかがっていると、ゆっくりと長い睫毛に彩られた金の瞳が開かれた。

全身、金色なのかな？

じゃあ、血も金色なのだろうか。だったら、俺も目が茶色になって、血も茶色に変わっているかもしれない？

ジャックが自分の想像にげんなりとしていると、ファアラがゆっくりと起き上がった。

「おはよう。起きてても大丈夫か？」

なるべく驚かせないようにと思ったのだが、女性にとって目が覚めたら男が室内にいるということは恐ろしいことではないだろうか？ 驚くなという方が無理だろう。

「ジャック、さま」

だが、彼女は意外と冷静だった。

むしろ、俺のことを男と思っていないのかもしれない。『地の大<sup>サ</sup>臣』は代々女性が継承していた。その記憶があるから、自分のことも、ひよんなことで狼になる男とは把握していないのではないだろうか。

それはちよつと情けない。

「さまはいらないよ。ジャックだけでいい。そうしてくれないと、俺は君のことをずっと金の姫とかファアラ姫と呼ぶことになる」

「わたくしは、姫ではありません」

「まあまあ」

体調がまだ悪いだろうに、ファアラはしっかりと受け答えをしている。

「わたくし みんなに、あなたがいらしたことを報告して参ります」

「それは青の姫君が言いに行っただろう？」

「あ」

ジャックの指摘にファーラは口元に指をやる。

「じゃあ、船に載せる荷物の書き出しをしなくては」

「そういうことこそ、台所頭とか、執務官長とかにお願いすることじゃないのか？ 対岸に着いて、それから陸路を使ってお隣に逃げ込んだ王族と合流にするには何日かかるだろう？ 子供や老人がいるなら、なおさら時間がかかる。君に、どれくらいの食糧が必要なのか判断を下せるのかい？」

「ですが」

彼女も譲らない。

なんとというか、ファーラは頑なだ。

ジャックは微笑を浮かべてわざとらしく小首を傾げて見せた。少しでも陽気に写るように。

「落ち着かない？」

「はい」

ファーラは前掛けのフリルを強く握り締めて、俯いた。だが、すぐに顔をあげると、「でも、工場には行かなくては！」と声を上げた。「みなさまが船を見て下さっているのに、わたくしだけが休むわけには参りません」

今にも起き上がって、部屋を出ていこうとする彼女の肩を掴む。

細い。

あまりの細さに驚愕する。

女性特有の細さではなく、一種病的な細さのような気がする。

とはいえ、ジャックは今まで姉以外の女性の肩になどほとんど触れたことがない。だからその細さが異常だという断定はできなかった。

「上が倒れたら、困るのは下っ端なんだよ！」

ジャックは少し声を荒げて、正面からファーラを見据えた。

彼女は大きな瞳を丸め、そしてゆっくりと瞬きを二度してジャック

クを見返した。

それはあまりにも真つ直ぐな瞳。

「いいか　あの、巨大な船を動かして残った住民を対岸に送る。それはわかる。だけど、あんな大きな船を動かすなんて過去の『光の女神』<sup>ソレア</sup> 代行者でもしたことがないだろう。どれぐらい君が力を使うのかなんて想像もできない」

ジャックは一度、言葉を切る。

「さっき、倒れたのわかっているのか？」

彼女は自分が倒れたことをあまり気にしていないようだが、それでは駄目だ。

「ええ」

口籠りつつもファースは答える。

「だったら、今は力を貯めることに集中しろ」

あえて、冷たい口調で言うと、ファースは目線を泳がせた。

ジャックは続けて言う。

「たった八人を地上から、この地底まで運んでその疲労具合だ。俺がどれだけ力になるかもわからないのに、ここで無理をして君が倒れてしまえば、残っている住人全部がこの大地と共倒れになる」

ファースはしっかりとジャックを見据えて「わかっています」と答えた。

「ですが、わたくしは大丈夫です」

「うう」

まったくわかっていない。

これでは押し問答だ。

なにを言おうと彼女は動いていないと気が済まないのだ。とにかくしていないと落ち着かない。結局のところ、そういうことなのだろう。

まるで、なにかに追い駆けられているかのように。

「わかった」

ジャックの言葉にファースが顔を上げる。

「とりあえず、今日は俺にこの国の現状を教えてくれ。『地の大臣』<sup>ヌーサ</sup>の記憶しか蘇っていないから、いろいろと齟齬が出ている。その間に君は体を休める。一石二鳥だろう?」

「ですが」

彼女がジャックの言葉を打ち消そうとするのを、手で制する。

「明日から、工場で爺たちの手伝いをしよう」

ファースラが目を見開く。

「手伝いといっても、工場には工場の決まりがある。素人がうるうるするのは危険極まりない。だから、俺のが先輩だから、金の姫には俺の言うことを聞いてもらう。いいか?」

真面目に言えば、彼女も「わたくしは姫ではありませんが、わかりました」と頑なな態度のまま頷く。

頑固だ。

なんだか笑えるくらい頑固だ。

ジャックはくすりと笑うと、とりあえず寝台の側にある脇棚の上の水差しを手にして硝子の高杯に注ぐ。そしてファースラに手渡した。「じゃあ、この水を飲んで、とりあえずどうして君が姫じゃないかから始めようか」

受け取って、小さな口でこくりと水を飲む。

たったそれだけにことに、ここまで安堵するのは不思議だ。

ジュリアさんに頼んで夕食はたっぷり用意させよう。そして、食べ終わるまで見張っていよう。それに、食べなさそうだったら明日から、果物の絞り汁などを強制的に飲ませよう。

そう心の中で誓って、ジャックは暖炉の側に置いた椅子を寝台の近くに引き寄せた。

体の中にいるらしい『地の大臣<sup>ヌーサ</sup>』という存在。

ジャックは、自分の中に住人が増えたというのに奇妙さを感じてはいたが、元々がおおらかというか無頓着な彼にとってはそれほど問題とは思っていなかった。

通常であるなら、それは大問題であり、自分の中を見知らぬ何か日頃から覗いているというのは、喻え神であろうと気持ちは良くないはずだ。

しかし、ジャックはまったく気にしない。  
こういう気性を、ジャックは前向きに捉えていた。

他人から見れば、短所と映るかもしれない部分もひっくり返せば長所ともなりえる。完璧過ぎる姉、完全無欠な義兄の傍にいたせいか、そのあたり臨機応変ができる。

くよくよ悩んでいても仕方がない。

ブレースタ領ではよく『悪いことをするとお天道様が見ているよ』と言われる。それが個人的になったのだと思えばいいことだ。

自分の内の中に入った『地の大臣<sup>ヌーサ</sup>』。

なんとというか、その名前に違和感がある。

『光の女神<sup>ソレア</sup>』

『青い魔師<sup>サイア</sup>』

『地の大臣<sup>ヌーサ</sup>』

三柱の神々。

たぶん。

(神、ではないんだと思うんだよな)

『地の大臣』<sup>ヌーサ</sup>の存在はジャックの中ではとても淡い。本当に見られているという感覚もないくらいに存在感だ。滅びが近付いているから、薄くなっているせいかとも思ったのだが 違う。

もしかして、彼らは“精霊”ではないだろうか。

(やめ)

ジャックは考えても仕方がないのだからと、思考自体を放棄した。ファアラに話を聞いた方が早いだろう。

彼女が水を飲み終わるのを待ち、椅子をベッドに近付けた。

「早速なんだけど

」

ジャックはファアラに手を差し出した。

硝子の高杯を受け取り、脇棚に置く。

「青の姫が第一皇女ってことは、金の姫はあの子とは血が繋がっていない？」

ジャックの質問にファアラはこくりと頷く。

「代々、『光の女神』<sup>ソレア</sup>は中洲国に産まれた子供に憑依します」

「憑依」

神という言葉にそぐわない言い回しにジャックは息を呑む。

「『光の女神』<sup>ソレア</sup>を身に宿した子供は、すぐに王宮に召し上げられます。父母はトラガを出て行くのが慣例です」

ジャックは瞳を見開いた。

慣例？

「じゃあ、君は実の両親のことを

」

痛ましい表情を浮かべるジャックを見て、ファアラは小首を傾げた。

まるで、幼い子供が泣きそうになるのを見た大人のような瞳。仕

方がないという顔。

「はい。覚えておりません。我が子の『光の女神』の代が終わった後は戻るそうですが、今まで戻ってきた『光の女神』代行者の両親はおりません」

確か、四十路で代替わりをすると言っていた。

「代替わりをした後の元代行者は 半年も経たずして衰弱死を  
してしまいます。そのため、戻ってきても子供は死んでいるので  
から」

唇を噛む。

「ですが、『地の大臣』や『青い魔師』の代行者は代替わりがあつてもちゃんと生き延びておりますから、ご安心下さい!」

慌てて顔を上げてフアラが言う。

そのことに声を荒げそうになるが、ジャックは必死に自分を抑える。

「今まで、王族出の『青い魔師』と『光の女神』は婚姻をし、だいたい二、三人の子を設けております。『青い魔師』が国王として立つこともあれば、王族出の重臣として国政を取り仕切ったりと、時代によって違います」

「その仕組みで、この国はずっと続いていたというわけなんだな」

なんとか呼吸を大きくして、心を宥める。

「悪い。金の姫に怒ってるわけじゃないんだ。なんていうか、あま  
りにも『光の女神』代行者にばかり負担のかかる仕組みだから、ち  
よっと苛ついた」

ジャックは自分の膝に肘をついて頭を抱える。

「少し、時間をもらっていいかな」

きつく目を閉じる。

どうして、俺が選ばれたのか そんなのはまったくわからな  
いけれど、なんというか、この国の『形』はおかしいことが多い。

正直、腹が立つ。

ジャックは瞳をさらにきつく閉じると「はー！ー！つー！」と大きく息を吐き出して、勢いよく顔を上げた。

その動きにフアラが瞳を大きく瞬かせた。

口がぼかんと開いている。

「お待たせ。ちよつと落ち着いた」

「いえ。大丈夫ですか？」

不安げに見上げてくる仕種に、微笑を返す。

「ああ、大丈夫。で、王族出の『青い魔師』と、国のどこかから選ばれる『光の女神』ってことは、残りの『地の大臣』は？」

「『地の大臣』は神官か占術師の子供の中から現れることが多いです」

「確か、『地の大臣』は今まで女の子だったんだよな」

「ええ。『地の大臣』も『青い魔師』も父母はこの国から出て行かなくても大丈夫です。ただ、慣例では子供と関わることができないのは元代行者だけです」

フアラは、金糸銀糸で見事な刺繍が施されている腰を覆う布を握り締める。それでは皺になってしまう。

「近親婚を嫌った三柱の苦肉の策とも言われていますが、真実かはわかりません。ただ、三柱は代行者を厳しく選ぶそうで、今回の異例は 今代の王族に『青い魔師』足りえる男性がいなかったため、と言う者もおります」

「うーわー。そう言われた王族、立つ瀬がないなあ」

思わずジャックが呟いた言葉に、フアラが微笑を漏らす。

「ええ。そのためギャリガン皇太子殿下は大層お怒りで、残しておいた最後の二艘とも使われてしまいました」

困ったような苦笑にジャックは思わず椅子からずり下がり、行儀悪く腕を組んだ。

「なんだ、その男。器が小さい」

とりあえず、自分のことは遠い遠い棚の上に置く。

「実の妹と、代行者に選ばれて頑張ってる女の子を置いて、自分た

ちだけ逃げ出したのか？ 最低だ」

胃の奥がムカムカしてくる。

たぶん、この場にギャリガンという男がいたら、ジャックは思いつきり拳を振り上げただろう。真っ先に人目に立つ顔を目掛けて。

「じゃあ、金の姫は赤ちゃんの人に城に来て、代行者として育てられ、青の姫は王族として生まれた。血は繋がっていない」と。

だったら、なんで青の姫は君のことを『お姉さま』って呼ぶんだい？」

そこが混乱の元だ。

「『光ソレアの女神』は女性がずっと続けていたのと、王族の『青サイアい魔師』と婚姻するのが慣例だったため、一部の者には『巫女姫』とも呼ばれているんです。ですので、ティアラは同じ姫がつかなら自分と同じで わたくしはあの子にとっての姉なのだ」と

ふわりと微笑む。

この微笑みは本物だ。

諦めたり、仕方がないと思ったりとか、そんな後ろ向きな微笑じゃない。そのことにジャックはなぜか嬉しくなる。

「そっか。いい妹ができてよかったな」

心の底からそう思っ言え言え、フアーラはにこやかに、そして嬉しそうに頷いた。

「こういうことって、本当は小さい頃から習うんだろっ?」

「はい。だいたい赤子の時から代行者は専用の教育を受けます」

「じゃあ、俺の知識が足りないのは金の姫が補ってくれよ」

にかつと笑って言えば、フアーラは神妙な顔をして頷いた。

ううむ。硬い。

「俺の中にも赤ちゃんの頃から『地ヌーサの大臣』がいただろうに、なんでも出てこなかったんだろっな」と

「 わたくしにもよくわかりませんが、たぶんトラガと遠く離れていたため、力が及ばなかったのかもしれないね」

「ふーん。後、ギャリガン皇太子ってどんなヤツ?」

たぶん、これが重要だ。

ジャックはこれからのことを考えて、今、生きているトラガの住人で、マーシアに赴いた際に、会う確率の高い『最低男』のことを尋ねる。

「年はわたくしよりも三つ上で十九歳になります。背はジャックさまくらいでしょうか。筋骨逞しいというよりも、管弦などを愛され

る雅やかな方です」

「うーわー。思いつきり表面上のいいところだけ、なぞっただろう。情報として役に立たないので、もっと客観的な感想を求めます」

思い切り額を叩いて、よいしょと椅子に座り直す。

正面からファアラの顔を見て笑う。

どうせなら、笑って欲しい。

だから、口調は冗談めかせて。

「七日後にはマールシアに向かうだろうか？ その後、再会する可能性は高い。だから、対策を練るためにもきちんとした情報が欲しい」

「え　でも、悪い方では　」

ファアラは言葉を切る。

そしてしばらくの間の後、「　ありませんよ？」と小さな声で言う。

その、あまりの自信のない言い方に思わず吹き出す。

ついつい声を上げて笑ってしまう。

「金の姫は　面白いな」

真面目で頑固で、人を傷つける言葉を回避しようとする。たった半日も一緒にいないのに、だいぶ彼女の芯がわかってきたようで面白い。

「そのような感想は、初めて頂きました」

ぱちぱちと瞬きをしてくすりと笑う。

「だいたい、つまらないと言われることが多かったですから　」

「それ、ギャリガン・最低・皇太子のこと？」

にやりと笑って聞けば、ファアラは困ったように笑って頷く。

「ま、このミドルネームは本人に会うまでは撤回しないけど

とりあえず、思いやりがなくて遊んでばかりだったってことだな

面倒になって纏めてしまえば、ファアラは否定するでもなく肯定をするでもなく微笑んだ。

その時。

「ちよっと!!!　お姉さまの私室に入り込むなんて、なにをしてい

るのよ!!」

と、盛大に扉が開かれて青の姫、ティアラが飛び込んできた。

「お姉さま、大丈夫？ 変なこと、されてない!？」

あまりの心配具合に、呆れや怒りよりも笑いが込み上げる。

どうにも我慢ができなくなつて、ジャックはとうとう口元を押さえ込んで椅子の上で屈み込んだ。

懸命に堪えようとするのだが、なんだか可笑しくて仕方がない。

なんというか、二人とも突き抜けるくらいに真面目なのだ。

「失礼な!!」

ティアラがファアラの頬を撫でながら、腹を立てる。

その姿もなんだか可らしい。

くつくつと笑いながら、ジャックは「ごめん」と謝罪の手振りをする。額で手を小指から握り、押し当てる。それがブレースタ領での謝罪の手振りだった。

その仕種がわからないのか、二人とも揃って小首を傾げる。

角度も仕種もまるで瓜二つで、さらにジャックは腹筋を苦しめることとなった。

ジャックが笑いを一所懸命に抑えている間にファアラが説明をしたのだらう。ティアラは眉をひそめて、しかも顔までしかめた。

「あんな、莫迦兄のなにか知りたいのよ」

ぷいっつと顔を逸らす。

その仕種は端で見ている分には愛らしい。

「中洲から脱出したら、マーシアに行くんだらう？ その時に再会する可能性があるだらうからギャリガン・最低・皇太子の情報が欲しいんだ」

ぶっ！ という音がして、見ると今度はティアラが笑いを堪えていた。

おお、いい感じに笑いのツボを突いたようだ。

ファアラが笑い転げる義理の妹の背中をやさしく撫でる。その様子から、本当に義妹のことを慕っているのが伺える。

「ファアラ姫は『筋骨逞しいというよりも、管弦などを愛される雅やかな方』と言っていたぞ。実の妹の感想は？」

笑いながら聞けば、ティアラは笑いを堪えながらも義理の姉を見上げて眉をひそめた。

その顔はファアラの評を全面否定している。

「実の兄ながら、こういうことを言いたくないんですが、でも言わないと鬱憤うつぶんが溜まるので言いますが、最低男です。その二つ名はあの兄の本質を突いています」

どうやら、相当思うところがあるらしい。

「侍女や行儀見習いの貴族令嬢にまで手を出す、子供ができても暴力で墮胎させる、酒を飲まない日はない、体ごと差し出す歌姫を数人侍らしている。他にも、他人を貶して自分の評を上げるのだけはお上手、悪辣なことには思考回転がよろしい、美しい言葉で疑心を湧き起こす　　まだまだ、いろいろありますが、表面をなぞっただけでもこれだけは出てくるわ」

吐き出すような勢いの言葉に、ジャックは眉間を押さえる。

最低男。これでも可愛い評だったかもしれない。

「あーらら。ギャリガン・最低悪辣男・皇太子は近付かない方が無難なことだな」

これ以上は聞いても無駄だろう。

とりあえず、これから先のことは臨機応変、行き当たりばったりで行くしかないのだが、方針としては王族には関わらない　　と　　というのは優先事項になりそうだ。

それにしても　　ジャックは仲の良い二人を見て瞳を瞬かせる。

「なあ、二人はマーシアに行ったらどうするつもりなんだ？」

ファアラとティアラは二人して顔を見合わせて、そして俯く。

「お父様が、先にマーシアに赴いて、友好国からの移民として受け入れてもらえるように話し合いを進めているわ」

「今のところ、芳しい情報は届いておりません」

ジャックは顔をしかめた。亡国の移民を、良い条件で受け入れて

もらえるとは到底思えない。

「国民たちは、トラガに一番近い国境警備兵のいる城外で待機しており、国王陛下と重臣方たちで先に王都に向かわれたそうです」

「お父様たちの待遇は、難民扱いですって。お勞いたわしい」

フアーラは国民たちを、テイアラは家族を思つての言葉。その違いにジャックは気がついていたが、口を挟むのはやめた。

「俺と、俺と一緒に来た男たちはマーシアに入ったら造船工場をいろいろとあたってみるつもりだ。日雇いでもいいからとにかく食ってかないとな。その後、ブレースタの造船技術が売れないか調べてみるつもりでいる」

ここで言葉を切って、ファアラを見つめる。

「金の姫、俺たちと一緒に来ないか？」

「え？」

ファアラの動きが止まる。

ティアラは大きな瞳をさらに大きくさせて呼吸を忘れている。

「金の姫は、王族じゃないんだろう？ マーシアに行ってまでトラガ王室に縛られる必要はない。俺たちと来ることを面白そうって思うなら、いつだって歓迎する」

にっこりと笑って言えば、ようやく二人が身動きした。

その後にティアラを見て言う。

「青の姫は、王族だ。今まで自分が贅沢できたのはなんでかくらはわかってるだろう？ 王族の義務を果たして、家族と相談して、それで憂いなく金の姫と一緒にいたいと思うなら、そして、金の姫が俺たちと一緒に行くって決めたのなら、歓迎するよ」

ジャックにとって、助けたいと思ったのも、面白そうだと思ったのもファアラを見てだ。

ファアラと一緒に来ないと判断をしたのなら、刺々しい少女だけを迎え入れる義理はない。

きついようだが、七人だけでも食べていくのは苦しいだろう。マーシアの現状がわからないから想像するしかないが、そうそう仕事が見つかるとも思えない。

だから、余分な扶養者を受け入れることはできない。

「ただ、金の姫も青の姫もしっかりと認識して欲しいんだけど

裏方としての覚悟はしてくれよ。炊事、洗濯、俺たちの体調管理。そういうのが裏方とか後方担当の仕事だからさ」

働かないなら来るな。

そう言外に込めて告げる。

すると二人とも小さく頷いた。

「それから、俺はトラガが消滅するまで二人のことは姫って呼ぶよ。金の姫、ファアラ姫、青の姫、ティアアラ姫　まあ、適当に呼ぶから」

ジャックはそう言うのと立ち上がる。

「返事はマーシアの国境沿いに着くくらいまででいいから。二人でしっかりと相談してくれ」

剣を手にして微笑する。

「とりあえず、青の姫。金の姫は倒れたばかりだから、君からも力を注いであげてくれ。あと、夕食の時間まできちんと寝ているように見張っていて欲しいんだ。その間に俺はジュリアさんに夕食のことを話して、ユージェスさんに挨拶して、じっさまたちに明日からの手伝いのことを伝えてくる」

漏れはないかな？　指折り数えながら今からやることを考えていると、ティアアラが「ジャックさま」と呼びかけてきた。

「ん？」

振り向くと、立ち上がった彼女は硬い顔をしてジャックを見上げている。

「お会いしてからの数々の無礼な発言　今更とお思いかもしれませんが、どうかお許し下さい」

拳を握り、右手と左手の両方を顔の前で並べて頭を下げるティアアラを見て、ジャックは微笑する。

「わかった。俺も君たちに大雑把な口調でごめんな」  
笑って首肯すればティアアラが顔を上げる。

「別に気にしてないよ。金の姫が大切に堪らないんだなって思うくらいだし　聞くのもあれかもしれないけど、ギャリガン・最低

悪辣男・皇太子は金の姫にも手を出そうとした？」

「ファアラが顔を逸らしたのがわかる。」

「未遂です。ですが、あと一歩遅ければお姉さまは」  
「わかった」

「言い辛いことを聞いてしまったが、吐き出しておいた方がすつきりともするだろう。」

「とりあえず、最低悪辣男に会ったら俺が代わりにぶん殴ってやるよ。後、どんな決断を二人が下そうとも出来る限りで護るから」

「ジャックさま」

「ファアラが今にも泣きそうな顔をしている。」

「そう、出会って半日も経っていない。」

「だけど、その間にファアラは真摯にジャックたちに接していた。必ず守る。必ずお帰しする。それが真実だと思う。」

「だから、自分たちに与えられた真摯さは真摯さで返す。鏡のようにとというのがブレースタ領の男の生き方だ。」

「扉を開けて出て行く前に、ジャックは寝台を振り返った。」

「そうだ。金の姫。『悪い人じゃない』って言うのは、裏返せば『良い人じゃない』ってことだからさ。そういう枕詞が付くなら、そいつは悪い人ってことだよ」

「満面の笑顔で言ってる。」

「たまには負の感情を抱えるのだって悪いことじゃない。それを吐き出すことなんて、ちっとも悪いことじゃない。代行者といっても聖人ではないのだから。」

「じゃ！ しつかり良い子で寝てるよ」

「ジャックはそう告げて、扉を静かに閉めた。」

「その瞬間、室内からティアラの笑い声が聞こえて来たのを心地よく感じながら、彼は台所を目指して足取り軽く駆け下りた。」

「ファアラの夕食をしっかりとジュリアに用意してもらったために。」

ジャックが豪華な階段を下りていると、目の前に白髪交じりの凛々しい男性がいた。一瞬だけ、本当にちょっとだけ目を見開いて、そして微笑を浮かべる。

「こつこつ爺さんは喰えない。

勘でわかる。」

「階段上からでは失礼なので、少しお待ちいただけますか？」

ジャックも微笑を浮かべて挨拶を始めようとした相手を制する。

ガシャガシャと鎧の音をさせながら階段を下りきる。すると、相手の男性の身長がものすごく高いことがわかる。ブレースタ領の成人男性のだいたいの身長よりも自分は高いはずだが、相手はさらに頭半分は高いだろう。細いせいか余計に高く見える。

「初めまして。『地の大臣』<sup>ヌーサ</sup> 代行者殿でいらっしやいますね。わたしはトラガ王国執務官長を務めております、ユージェス・アディ・バートウィツスルと申します」

恭しく頭を下げられる。

礼儀に則った、礼儀の指南書などに載せられそうな完璧な礼だ。

ジャックも微笑を深めて礼を返す。相手と比較してしまえば、たどたどしい印象は否めないが、彼にとつての最上級の礼を持って。

「初めまして。わたくしは、地上にあるシャルダ帝国ブレースタ領の領主の嫡男、ジャクソン・ドウリー・ブレースタと申します。先に申し上げますが、ブレースタ領はすでに義理の兄が治めております。わたくしは国を捨てた身。ファアラ姫に見出されてこちらに仲間と共に参りました。よろしくお願い致します」

なるべく短い言葉の中に必要な情報は入れたつもりだが、相手からしたら見知らぬ男。不信を持たれて当たり前だ。ジャックは相手

からの質問を待つ。

だが、ユージェスは微笑を零し、「丁寧な挨拶、痛み入ります」と答えただけだった。

二人して無言の時間が流れる。

ジャックは瞬きをしてユージェスを見上げる。

「もしかして、わたくしからの質問をお待ちくださっていますか？」

素直に問えば、ユージェスは首肯する。

「貴方さまから見れば、ここは他国。いろいろとご不明なこともおありでしょう。わたくしで答えられることがあれば、なんなりと」

その表情に偽りはなさそうだ。

ジャックは破顔すると「ありがとうございます」と深く礼をする。それに相手は瞳を瞬かせた。そのことにジャックは首を傾げた。

「国が違えば文化も変わるといふことですね。トラガではこのように拳を握った右手を顔の前に持つてきて、わずかに腰を曲げるだけです。そのように深く頭を下げることはしません」

「へえ、そうなんですか。俺はこちらに来たばかりで、そういう文化の差とか、いろいろ知らないことが多いので、そういう部分は

特にマールシア国のことは聞きたいことばかりなのですが、今の場で、立ち話ですることではありませんね　　そうだ、まずは台所の場所を教えてくださいませんか？」

にっと笑えば、ユージェスはまた瞳を瞬かせる。

「お互い、ややこしい儀礼上だけの敬語は抜きにしましょう。考えるのが面倒です」

「『地の大臣』<sup>スーサ</sup> 代行者殿　　」

ぼそりと呟かれた言葉は啞然とした色を映していた。ジャックは正面の扉の前に開かれた地下への階段を見やって肩を竦めた。

「それ、俺を見ていないみたいで、なんだか嫌ですね。出来たら名前前で呼んでください。ジャックでかまいません。下にいる俺の仲間  
は『坊』<sup>ほん</sup>とか『ジャック』と呼びます。礼儀の必要な場以外では、  
楽にしてもらった方が俺も助かります」

笑顔を抑えたユージェスは怖いほどに真剣な瞳でジャックを見つめてくる。整えられた口髭があるからわかりにくいだが、きつと口元もきつく結ばれているのだろう。

しばらくの間、ジャックはユージェスが口を開くのを待つ。

彼の中で、今自分の評価が下されているのだろう。この国が滅びるまで時間がない。だったらさっさと評価を下された方がいいと地を出したのだが

ふっとユージェスの目元が和らぐ。

彼は拳を握り、右手と左手の両方を顔の前で並べて礼をする。先程よりもやや深く。

その様子に瞳を瞬かせていると「これが我が国の最敬礼になります。ジャック殿」とユージェスが先程よりも口調を緩やかにして微笑を浮かべた。

どうやら、合格点はもらえたようだ。

「貴方が『地ヌーサの大臣』に選ばれた理由がわかるような気がします」「理由？」

「この国に未練がない。だから、貴方が選ばれたのでしょうか、こちらこそよろしくお願ひします」

ユージェスの言葉にジャックは「なぜ自分が選ばれたのか」という疑問の答えをもらった気がした。この国に未練がない。だからこそ、ある意味、建設的過ぎる意見が出せる。それが、今現在わかる一番の自分の売りだ。

「そう、仰つて頂けると助かります。こちらこそ、あなたのご助言を頼みにしております」

トラガ式で挨拶をする。

するとユージェスは「畏まりました」と短く答え踵を返す。

「台所へご案内します」

「急に男が七人も増えましたが、大丈夫でしょうか？ お恥ずかしい話、俺たちはまったく食料を持っていないのです」

ジャックは自分の体を見下ろす。鎧に包まれた埃塗れ血塗れの自

分。腰の袋には簡易食のホシエ・ルが二食分。ホシエという穀類を水で炊いた後に乾燥をさせたものだ。食べ方は器に入れて水を差し入れるだけ。ホシエ・イと呼ぶと水を多めにしてやわらかく炊いたものになる。通常、ブレースタ領ではこれが主食だ。

「それでしたらご安心を。食料だけでしたら心配はありません」

「そうですか　正直な話、俺たちがマーシアに着いたとしても、扱いは難民が良いところではありませんか？」

「　　つく。本当に率直過ぎる方ですね」

ユージェスは肩を竦めるようにして笑い、そして目元を緩める。

「ええ。ご推察の通りです。我々の先行きは難しいでしょう」

「でしたら、船の準備が出来るまでの間、残っている方たちに出来る限り食料を用意して欲しい。潰せる動物がいるのであれば塩漬け肉を作りましょう。あまり時間がないので燻製まで作れないのが残念ですね」

「それは言えています」

ユージェスは小さく嘆息をする。

「情けないとお思になるでしょうが、我が国には現在この地に残っている王族はティアラさまのみ　　人数が少ないとはいえ主軸が欠いており、上手に纏まっておりません」

「大体の状況は聞きました。国王が脱出した後に、皇太子殿下が船を使ってお逃げになったとのこと」

ジャックの言葉にユージェスは微苦笑を零す。

「逃げただけなら、まだ可愛いものですが　　皇太子殿下は、先にマーシアに入り、マーシアの代行者になることを狙っているのです」

ジャックは目を見開く。

「マーシアにも代行者がいるのですか？」

あまり喜ばしいとは思えない制度が、他の国にも浸透しているというのは奇妙な気分だ。

「ギルディア大陸　　グレメンディア大河を渡った大陸のことを

そう呼ぶのですが、そこでは各地域ごとに神が宿っており、通常は二柱で治めております。代行者は二人の場合もあれば、あらがみなぎがみ荒神和神をお一人で代行する場合があります」

「では、この国が三柱なのは」「  
「とても珍しい現象です。ですから、この国は歪んでいるのかもしれないですね」

遠い目をしてユージェスが呟く。  
歪み。

まだここに着いて半刻も経っていないジャックには、真偽はわからない。

第一、神とか、女神とかそういう幻想的な話は、自分が代行者として選ばれた今でさえ信じ切れないくらいだ。

「まあ、この国の歪みとかそういうのは置いておいて、ほいほいと他国の王子が乗り込んでいって代行者になれたりするんですか？  
ちよつとあり得ない気がするんですが」

「なんといいますが　皇太子殿下はかなり特徴的な方で、ご自分のお思いになったとおりに事が進むと思ひ込まれるご性格なので  
す」

「ああ。大莫迦だつて話は聞いていますよ！」  
明るく笑つて言えば、ユージェスは微かに肩を竦めた。

「否定は致しません。マーシアの代行者が恋に落ち、悲観して自ら命を捨てたのです　そのため、現在マーシアでは二柱の代行者  
がない状態なのです」

「代行者がいない と、なにかあるんですか？」

正直に言つて、その辺りがよくわからない。

「代行者がいない国は、ギルディア大陸ではありません。不在期間  
は長くても半年。それ以上の間が開くと秩序が乱れます」

「秩序？」

「過去の事例では、植物が枯れる、突然変異で産まれる動物たち、  
水が味を変えるなど、何もかもがおかしくなつていくのです」

「うはー」

思わず変な溜息が漏れる。

「代行者がいないつて、それだけの被害が出るんですか 俺た  
ちが暮していた国では巫女とか神官とかいました。それははつき  
り言つてしまえば建前のようなもので、国の仕組みにそこまで影響  
を及ぼすことはありません。こちらではそうなんですか」

うーむ、頭が痛い。

ジャックはファアラの今までの苦労を思つと、なんだかいたたま  
れなくなる。

きつと、そんな状況では いろいろと言われたのではない  
のだろうか。

三柱必要なのに二柱しかいなかった国。

ファアラの力不足だとか、理不尽なことを言われたらどうことは  
想像に難くない。なんとというか申し訳ない気がする。自分がどうに  
かできた問題ではないが、あの丁寧過ぎて、頑なで、動いていない  
と落ち着かない、妙な謙り感へりくだはここから来ているのかもしれない。

「神、女神などと様々な名で呼ばれています。実情は精霊に近  
いのではないかと、昨今の研究では言われています」

ふと思つたことをあっさりと肯定されてジャックは瞳を瞬かせた。  
「精霊、地霊、いろいろと呼び名はありましようが、我々『人』と

呼ばれる種族にとつては位の高い存在ではありません。わからないものを、とりあえず神と呼んでいるのかもしれない。まあ、わたくしの考えも書物からの受け売りですが」

その言い回しにジャックは笑う。

きつと、普段ならこの人はこんな物言いをしたりはしないのだろう。表情だつてこんなふうには動かないはずだ。その人が、自分を信用して、さらけ出そうとしてくれている。ありがたいことだ。

「そういう捉え方もあるんですね。とりあえずは『人』の我々はもつと現実的なことを今、しましょうか。トラガには正確には何名が残っているんですか？」

「五十二名、十七世帯になります。本当に、あなたは神とかにご興味がないのですね。なんとというか 話をしていて不思議な気分になります」

憂いを秘めたような笑みを見せるユージェスを見て、ジャックは困惑する。

「過ぎてしまったこととか、大昔のこととか、あまり気にしていると、髪の毛が抜けますよ」

だから、こんな力ない冗談しか言えない。

「ところで、ジャック殿。台所にはなにか御用が？」

名前を呼ばれた。

そのことにほつとする。

国によつては、名前を決して呼ばない国、上下の身分に合わせて役職でのみ呼び合う国などもある。実際、名前で呼び合うことが少ないくらいだ。トラガでどうかまではわからないが、礼儀などを気にしそうなこの男性が敢えて名前を呼んでくれるということにジャックは嬉しくなる。

「あ、はい。ジュリアさんに、ファアラ姫用の食事のことで話しがあつて 彼女、あまり食べないんじゃないですか？ ユージェスさん」

ジャックは、今までファアラのことを金の姫、ティアアラのことを

青の姫と呼んでいたりもしたが、自分が感じた安堵感から少し反省する。

やはり、名前はきちんと呼ばれた方が嬉しいものだ。

名前を呼ばれたユージェスも一瞬、足を止めた後にまた歩き出す。そして、溜め息。

「 ええ。ほとんど召し上がりません」

「 でしょうね。だからといって、このままでは、七日後が大いに心配なので、汁物から増やしていこうかと思って、ジュリアさんにご相談をするつもりだったんです。見張ってでも食べさせないと。後はこの国の食糧事情というか 携帯食をどれだけ作れるか、用意できるかの確認をしたいと思います」

「 携帯食ですか 」

「 保存食、軍用食、呼び名はいろいろあると思いますが、船に載せるものはほぼ食物。荷駄には食料を、力のある男性や若い者にもできる限りの食料を持たせる必要があります」

「 ジャック殿は 飢えた経験がありますか？ 」

あまりにも自分にご飯、ご飯と言っているせいだろう。ユージェスが微笑を浮かべる。

「 まあ、近い経験はあります。その時の経験則から言えば、食料の減り具合と共に人心が捉えれなくなっていくます」

「 確かに 」

「 ジャックさま、執務官長 」

台所に向かっていると、ジュリアが木の籠を持って歩いているのに出くわす。中には美味しそうな赤い果実がたっぷりと入っている。

「 ジュリアさん それは？ 」

「 ユフと呼ばれる果実です。これをジュースにしてファアラさまに強制的に飲ませようと思いましたが 」

力強く、そしてにっこりと言われて、ジャックは自分が心配する必要はないと感じる。

「 実は、俺もそのことを頼みに来たんです 」

「そうなのですか」

ジュリアが感極まったかのように頬を染める。

どうして、こんな当たり前の心配や気遣いをするだけで、こんなにも感動されるのかわからない。

実際、ジュリアは涙ぐんでいる。

「彼女には、しっかりと体力を回復してもらわないといけません。

あの子、意外と人の話を聞かないようなので、見張つても食べさせる必要がありますよね」

笑つて言えば、ユージェスもジュリアも微笑んでいる。

なんとというか、子供を見て微笑む、そんな大人の笑み。

気恥ずかしい。

「『<sup>スーサ</sup>地の大臣』に選ばれた方が、ファーラさまのお味方になってくださる方でよかった」

ユージェスの染み染みとした物言いに、ジャックは今までのファーラの立場に思いを馳せる。こんなふう<sup>に</sup>周囲の大人に見られているということは、余程あからさまに、傍目にわかるくらいに、味方がいなかったのだろう。だから、ティアラはあれほど神経質になり、彼女を守ろうとする。

「俺は そんな良い人じゃありませんよ。俺の祖国では男は鏡であれと言われています。相手が親切なら、親切に。裏切るならそれ相応に。だから、俺が彼女の味方に見えるなら、それはファーラや他の人たちが望んで俺に利益をもたらししてくれるからです」

本当にいたたまれない。

自分はそんな聖人君子ではない。滅びる国に無償で付き合うようなお人好しでもない。

「では、利益がこれからも貴方の元に行くように、我々も頑張りましょう」

ユージェスが、微笑をしたままジュリアに言う。ジュリアも微笑んだまま頷く。

やっぱり、大人だ。

ジャックは微妙に頬を染めながら頭を掻いた。

「とりあえず、後は下で働いているじっさまたちと引き合わせさせてください。それと他にもご相談したいことがあるんです」

十九歳にもなつて『この人、良い人』みたいな反応は本当に恥ずかしい。

誤魔化すように、照れながら喋るジャックを見て二人はさらに微笑を深めた。

それから、まるで時が駆け足をしているかのように進んでしま  
う。

途中で聞いた話だが、ユージエスとジュリアは自らの意思で残つ  
たのだという。ギャリガンに着いて行くという選択肢以前の問題で、  
自分に追従をしようとしなかった二人は、彼から疎まれていたとい  
う。そのため、皇太子とその側近たちが逃亡を図ろうとしているの  
に気が付いてはいたが、敢えて阻止をするのはやめていたのだとい  
う。船は二隻あるから、逃亡されても後一隻あれば大丈夫だろうと、  
甘く思っていたのが悔やまれるとユージエスがぼつりともらした。

いくらなんでも、残りの民のために一隻は残すはずだという思い  
込みがあったのだと　だが、このことでユージエスを責める事  
は難しいだろう。下手に逃亡を阻止しようとしても多勢に無勢。返  
って怪我人や死者が出たかもしれない。

二人とも、皇太子を快く思っていないという以前に、ファアラと  
ティアアラの二人がとても気がかりなのだと言気度でわかる。

彼女たちの様子、体調をとても気遣っている。

こんなふうに大事に思ってくれる人がいるというのは、なんだか  
嬉しくなる。

二人は率先してファアラとティアアラの気苦労が減るように動いて  
くれる。

ユージエスが船に積み込む荷物について、ジュリアが食糧問題を  
担当して十七世帯に伝達を行っている。きっと、積む時になって『  
自分だけはいいだろう』と特別扱いを望む者は出てくるので、当日  
の複数での確認も必要になるはずだ。

特別扱いというのは、意外と難しい。

子供だから。

老人だから。

体が不自由だから。

貴族だから。

商人だから。

女性だから。

妊婦だから。

だからを使う言葉はたくさんある。全部を一律で扱うわけにはいかないし、中途半端な、しかも均一性のない扱いを行えば当然不満は出る。

それを考えると頭が痛いが、まだ数が少ないのが救いだらう。

翌日のお昼時。陽が中天に差し掛かった頃。

陽、といつても本当はお天道様ではないのだが ジャックは空を見上げて首を傾げる。どう見ても陽に見える。虫の反射だとかには見えない。

不思議だ。

「ジャックさま」

名前を呼ばれて振り返れば、そこには昨日とは随分と服装の違うファアラがいた。

汚れてもいい服装。髪は束ねる。爪は短く切る。化粧はしない。

そして、しっかりと食事をして睡眠を取る。

昨日、ジュリアと夕食を届けに行った際に突きつけた条件がこれ。爪や髪型はなにか言われるかと思っただが、ファアラは神妙に頷いただけで、真面目な顔で一所懸命にほとんど液体の夕食を飲み込んでいた。

その、必死に夕食を食べていた彼女は、今は昨日よりも多少は血色良く感じる。

「ファアラ姫、ちょっとこっち来て」

ちよいちよい、と手招きをする。右手で指をそろえて掻き込むようにする仕種なのだが、ファアラは小首を傾げる。

仕種の違いは、どうにも困る。

「トラガでは人を手招きする時にはどうするんだ？」

尋ねれば、ファアラは手首を立てて火を扇ぐようなような仕種をした。

「こう、します」

「へえ。本当に　言葉はほとんど同じなのに仕種が違っていて言うのは面白いな」

もしかして、トラガの人と喋れるのは『地の大臣』<sup>ヌーサ</sup>の力ではないかと思っていた。だが、昨夜、与えられた客間で眠る前に検索を続けていたら、言語はトラガ国もシャルダ帝国もほぼ変わらないということがわかった。違うのは多少の語尾と仕種。そして食文化。

故郷のミュシという、ミュという穀物を発酵させた調味料がないのだから辛い。

ミュシに似た植物があるそうだから、また落ち着いたらフェイブ爺などに聞いて一度作ってみたいと思っている。

どうやら俺は、さうとう意地汚いらしい。

「わたくしも、あなたと喋ることができるのはありがたく思っています」

確かに言葉を訳すのに力を使うのは好ましくないだろう。

言葉を訳すことができるのかはよくわからないが、ファアラの言い回しからすればできるに違いない。

「俺も助かるよ。もしかしたら、ギルディア大陸の人がひよつとしたことで地上に出て、シャルダ帝国を作ったのかもしれない」

「そうかもしれないね。それで、わたくしのするお手伝いとは？  
早速本題ですか、姫。

そう思ったが、ファアラの顔は真剣だ。

「じゃあ、まずは準備運動をしようか」

「え？」

ファアラが瞳を見開いて口をぽかんと開く。

早速、掃除に入るなら別に地下で待ち合わせをすればいい。

だが、この手伝いはファアラの気持ちを落ち着かせるためと、彼女の体力増強の意味合いもある。

「地下で主にやるのは木屑の除去とその木屑を分類すること。木屑と言っても、場所によっては結構重い。だから、準備運動もしないで、日頃剣とか握ったことのない女性がするのは辛いと思うし、筋とか痛められても困る。だから、準備運動」

ファアラの正面で真似をするように言うと、彼女は腕を真上に上げたり、横に伸ばしたりという動作を一所懸命に真似してくる。本当に真面目だ。

思わず変な仕種を冗談で入れてみようかと思ってしまふ。が、こんなに真剣な女性をからかうのは騎士として劣るので、頭の中で想像するだけにする。

運動の後は、荒いハシエと呼ばれる植物で編んだ目の細かい袋と、箒と塵取りを渡す。

「じっさまたちはもちろん周囲も見てるし、可能な限りは気を遣ってってくれる。だが、船の 特に修復っていうのは難しい作業だ。ぶつかったり、引つ張ったりされたら、ファアラ姫くらいの娘さんだと吹っ飛ばされちまう」

「吹っ飛ばされる？」

「そ。ぽーんって飛ばされる。だから、俺たち補い役はささっと掃除してさーっと粉払ってぱぱっとその場所から離れる必要があるから」

身振り手振りで擬音を説明すると、ファアラが「ぷっ」と吹き出して微笑を零す。

やっぱり笑っている方がいい。

「俺たちにとって、工場では身分は関係ない。まずはそのことを頭にしっかりと叩き込んでくれ」

「はい」

袋と箒と塵取りを手にして、真剣な顔をして頷くファアラ。

真面目なことはいいことだけれど、彼女はちよつと真面目過ぎる。

「それから、自分の力は正確に把握して欲しい」

ジャックの言葉にファアラは瞳を瞬かせる。

「正確に、ですか？」

「そう。特に持てる重さは重要だ。『これくらい持てるだろう』と楽観視されても困るし、自分でできることで呼ばれても困る。腰を痛めても、持ち上げたものを落として壊されても大変だ。仕事を増やすような手伝いなら要らないし、工場の緊張感を壊す手伝いなら更に要らない。俺の言いたいこと、わかるか？」

ファアラは少し眉根を寄せて小さく頷く。

「わかる、つもりですけどね」

「つもりじゃ困る」

ジャックは用意しておいた木材を指差す。

「ちよつと、これを持ち上げてもらえるか？」

「はい」

ファアラは手にしていた道具を下に置く。

「待った」

「え？」

ファアラは中腰のまま見上げてくる。

「どうして、そこに置こうとした？」

ジャックは真面目な顔で見返す。

戸惑うファアラに斟酌くちやくすることは今はできない。

「そこって、今まで運動してた場所だろう？ そんなところに置い

たら、誰かけつまずくかもしれない。木材を運ぼうとする人がいたら困るじゃないか」

「あ」

フアーラは慌てて道具を持ち上げた。

そしてきよるきよると周囲を見渡し、柱の側に道具を置くところ。箒を柱に立てかけるようにして。

「待った」

「あ」

彼女の声が窄まったのがわかる。なんだかいじめてるみたいだけど、仕方がない。

「今のはわかるか？」

「いいえ」

フアーラは困ったように首を振る。

否定の場合を首を左右に振るのは同じらしい。

「箒を立てかけただろう。それで、ひよんなことで倒れたらどうする？ 倒れそうだったら最初から倒して置いた方がいい。本来なら使った道具は、すぐに元の場所に戻するのが基本。わかった？」

「はい」

しよげたように俯く姿に申し訳ない気分になるが、これはもう仕方がない。工場でこんな注意を繰り返すわけにはいけないのだ。

「姫が知らないことが多いのは仕方がない。誰だって初めての世界はわからないことばかりなんだから」

ジャックがそう言うと、フアーラは勢い良く顔を上げる。

「あの、あなたが仰りたいことはわかるつもりです！ わたくしは無知なのだから、他の人にしっかりと聞きなさいということでしょう！？」

「ああ」

あまりの勢いにジャックは及び腰になりそうになる。

「でしたら、あなたもわたくしの話聞いて下さい！！ 何度も申し上げますが、わたくしは『姫』ではありません！！」

まるで今にも泣き出しそうな顔で叫ぶ少女。

ジャックはそのファアラの表情に瞳を瞬かせる。

「わたくしは、この国の『姫』ではありません。災厄をもたらす存在なのだそうです。それなのに、姫などと呼ばれるのは不相応です。俯いてぼそりと呟かれるように吐き出される苦痛。」

ジャックはその俯いた頭にやわらかく、ぽんつと手を置く。そしてやさしく撫でる。

「ごめん。姫って呼ばれるの、辛かったんだな」

ファアラは黙りこくる。

ぎゅつと前掛けを握り締めて俯き続ける。

「大変だったな、一人で。ファアラが悪いわけじゃないのに責められて、詰られて。そんなこと知るもんか！ って飛び出せちゃうような、ちゃらんぽらんの性格だったらよかったのにな」

なでなでと触り心地のいい頭を撫でる。

「辛い、わけでは」

ありませんと、続けようとした言葉を強引に切る。

「辛かったんだよ」

その、ジャックの言葉にファアラは顔を上げる。

見上げてくる瞳は潤んでいた。

「辛かったんだよ」

もう一度繰り返す。

「とりあえず、人目がない時と、聞いても害のなさそうな人しかいない場では姫をつけるのをやめるよ。悪かった」

素直に謝罪をすれば、ファアラは力なく首を左右に振る。

「いえ。わたくしこそ、きちんと理由をお話すればよかったです。そんなふうにするファアラを見つめて思う。」

きつと、ずっとこんなふうになにかを言われれば自分

が悪かったのだと繰り返し返してきたのだろう。

『<sup>ヌーサ</sup>地の大臣』が現れないのも。

『<sup>サイア</sup>青い魔師』が女性だったのも。

トラガが消滅するのモ

全部、自分が悪いのだと。

なんだかやり切れない。

そんなことはフアーラになにかがあつたわけではないだろうに。たまたま、本当にたまたま最後の代がフアーラだっただけなのだ。「それを言うんだつたら、俺こそ、きちんと君の話を聞けば良かったってことになるだろう。どちらが悪いって訳じゃないし、今はきちんと話を聞いた。だから、このことに関してはこれで終わりにしよう」

笑って、やさしく言えば、フアーラは呆然とした顔をしている。

そんなに驚くようなことを言ったのだろうか。

「ありがとうございます」

少し間があつて、泣きそうな笑顔が返ってくる。

彼女の笑顔はよく見るけれど、満面の笑顔って見たことがない気がする。

困つたような笑顔。

戸惑うような笑顔。

すまなさそうな笑顔。

そんな、付随する感情のある笑顔が多い。

(笑ってくれたらいいのに)

ジャックはそんなふうに思う。

なにか別の感情を秘めた笑みではなく、ただ嬉しいだけ、楽しいだけの笑顔を見てみたい。素直な気持ちを書えはこうだ。

まだ出会って二日も経っていないけれど、なんとというか直感でこの子の味方をしてあげたいと思う。

あげたいというのは上から見た感じもするが、味方でいようと思える程は、まだよく知らない。

「とりあえず、ちょっと今の意地悪だったけど　　なにかする時は、もしもをいつも考えてみて欲しいんだ」

「はい」

フアーラはまた素直に頷く。

こういう態度を見てみると、なぜかまた頭を撫でたくなる。

「無知だと自分のことを思うのは、悪いことじゃないって俺は思っている。無知であることを知らない。もしくは自分は詳しいと思いついでいるほうが怖い。悩んだら、聞いてくれ。絶対にそんなことも知らないのなんて言わないからさ」

なんとというか、無意識で自分の声がやさしくなっている気がする。ジャックは心の中で微笑をしながら柱に置かれた袋と箒と塵取りを手にする。

「行こう」

「はい」

フアーラはおとなしく後ろについてくる。

「あと、俺、この掃除が終わったら一緒に街に行くよ」  
後ろを振り向かずに言えば、フアーラは足を止める。

気配でそれを感じて、ジャックは振り返る。

これはずっと考えていたこと。

『地の大臣』<sup>ヌーサ</sup>が現れたということに住民に見せる必要がある。女の子二人で頑張っていたのだ。俺も頑張らなければ男が廃る。

男だ、女だと性差別をすることはあんまり好きではないが、年下の女の子が頑張っているのに。自分が頑張らないのはなんだか嫌だ。ケチな自尊心だと笑われても仕方ないかもしれないが、力の弱いもの、小さいもの、女の子は俺にとっては護る存在なのだから、自分の姿勢だけは明確にしておきたい。

「ジャックさま」

ファアラが呆然と見上げてくる。

その不思議そうな顔に片目を瞑ってみせる。少しでもおどけて見ればいい。

「それ、その『さま』っていうのもやめようぜ。俺も君のことをファアラって呼ぶんだから、君も俺の事を名前で呼ぶように。これ、命令」

笑顔で告げる。

命令って言うてるけど冗談だよ。そんな思いを込めて笑う。

「命令、ですか？」

「ああ」

笑ったまま肯定する。

するとファアラはゆるりと首を傾げて微笑んだ。まるで雪解けの後に、花がほころぶようなぎこちないけれど暖かい笑顔で。

なぜか、その笑顔を見た瞬間、心の中で『よっしゃあ！』と叫んでしまう。

「はい。ジャック　　なんだか照れますね」

はにかむような笑みに微笑を返す。

やっぱり、女の子は笑っている方がいい。

そう思いながら、階下を目指す。

「じゃ、ファアラ。早く下に行こうか」

地下での掃除は、ほとんどたいしたことがない。

職人と呼んでも過言ではない仲間たちは日頃から自分たちでほんどのことをしてしまふ。ジャックが幼い頃から手伝っているが、彼らの中でジャックの立ち位置は現場に出てくる管理者という程度で、あまり労力として当てにはされていない。その代わりに管理に関わることでボロを出せば、容赦がないのだが。

ファアラと二人で、隅に纏められていた木屑を集めて捨てる。

道具を研ぐ。ただし、この作業はファアラにはできないので、彼女にはボロ布を集めてもらって鋏で適当に切ってもらった。後は作業する時に便利な掃除道具類の手入れなどをしてもらふ。

なにを指示しても、ファアラは嫌がることなく黙々と作業をする。しかも手際もいい。

小さな頃から城に召し上げられて、姫と変わらない生活をしていたはずなのに、この生活適応力はなんだろう。

ジャックは自分の姉と比べて首を傾げる。

領主の娘として育てられた姉は、本当に何もできない人だった。

刺繍針よりも重いものを持ったことがない。そう言われても不思議じゃないくらいに浮世離れをした人だった。

だが、ファアラは見た目は金の長い髪、まるで初雪のような白い肌、春に真っ先に咲く花のような薄紅色の唇をしているのに、掃除も鋏捌きもてきぱきとしている。

「ファアラって、自分で生活したことあるのか？」

気になって尋ねれば、ファアラは不思議そうに瞳を瞬かせて頷く。「はい。『光の女神<sup>ソレア</sup>』代行者は別に王族ではありませんから、侍女なども付きませんし、生活に必要なことは自分で行うのが通常です」  
どんな制度だ、代行者。

心の中で額に手を当てる。

だが、顔には笑顔。

「へえ、自分のことを自分でするのはいいことだしね。俺も助かるよ。これから仲間になる子がなんにもできない子じゃ、すつごく困る」

思わず『すつごく』に力が入る。

姉のように高飛車で、なにもできない、しようもしない人では困る。

もちろん、言い換えれば気位が高く、治める人間の風格を身に纏った人とも言える。だが、落とした布飾りぐらい自分で拾え、とか小さな頃から思ったものだ。

命令するのが当たり前。

人が従うのが当たり前。

そういう生活を送っていた人は弱い。

自分で考える力を失っていることもある。

全員が全員、そうだとは思わないけれど自分で立つ力があるからこそ、人は付いてきてくれたりもするのだろうとも思う。

「はい」

ファアラの返事は小さい。

ジャックは、そのことに気が付いていなかった。

掃除を終えて、ファアラが着替えるのを待つて街へ向かう。

身に着けてきた鎧は血生臭いし、正直重くて面倒なので、ユージエスに頼んで歩兵が身につける軽装防具にする。帯剣をし、服装もギヤリガン皇太子が置いていった服の中から、外にも着れそうな内

着を拝借する。

ギャリガンの服は煌びやかだった。

無駄な宝飾が付いている衣装もあった。後でユージェスとジュリアに頼んで金目のものも城から持ち出す必要があるだろう。

ファアラは真っ白な生地に、金の刺繍が施されたゆったりとした衣装だった。

トラガの衣装は故郷と違って女性の体型を露にしない。

「お待たせしました」

ぱたぱたとファアラが駆け寄ってくる。

通常から敬語の彼女に、ざつくばらんな口調でいいよと伝えても、反対に敬語のが楽だと断られてしまった。

「いえいえ」

ジャックは口の中でもごもごと答える。

今、ファアラが自分を見つけた時にはっと顔を明るくした。そのことになりにかなり動揺をってしまったのだ。

自分を見て浮かべられた明るい表情。

たった、それだけのことなのに鼓動が煩いほどだ。

「本当に、街に出られるんですか？」

不安そうにファアラが見上げてくる。

「『地の大臣』が来たところでこの国が救われないってことはみんな知っているんだろう？」

残酷であるう質問をファアラにする。すると彼女は硬い顔になって頷いた。

「事実確認だから、気にしなくていい。だからさ、俺が街に出ることとで『もしかしたら』ってのを打ち砕こうと思ってさ」

「打ち砕くんですか？」

ジャックはファアラの質問に答えずにしゃがみ込んだ。

そして地面に手を置く。

目を閉じる。

『地の大臣』が中に入った時から聞こえる声。

トラガは大地が悲鳴を上げてる。

今にも壊れてしまいそうなのを気力で持たせているような、そんな不安定な気配がする。なにがあっても、この土地は形状を留めてはおけないだろう。

そのことを再確認をしてファアラを見上げる。

「やっぱり駄目だ。大地が泣いてる」

「大地が　泣いている」

ファアラもしゃがみ込んで大地に手を当てる。

そして瞳を閉じる。

睫毛が長い。

なんとはなしにそれを見たのだが、不思議なことに目が離せない。睫毛の影が顔に落ちている。

「胸が苦しいような、この　感覚のことですか？」

ファアラが顔を上げて呟く。

真正面にある顔にジャックは思わず体勢を崩し、手を地面についてしまう。

「あ、ああ」

「大丈夫ですか？　お体に影響があります？」

心配そうに覗き込まれてジャックは笑って誤魔化す。

「だ、大丈夫。単に平衡感覚が崩れただけだから」

「　本当ですか？」

疑うようにファアラが覗き込んでくる。

あまり近付かないで欲しい。

「ほ、本当。慣れない服だからさ」

と、適当に誤魔化す。

素直なファアラは、ジャックの適当な誤魔化しを信じて安堵の吐息を零す。

「よかったです。あなたになにかがあったら、お仲間の方に本当に申し訳がありませんから」

ファアラはそう言っ、そして申し訳なさそうに微笑んだ。

浮かんでいるのは負の感情が付随している笑顔。

そんな笑顔をさせたかったわけじゃないのに。

ジャックは立ち上がるとファアラの手を引いて立ち上がらせる。

そして、そのまま彼女の左手を自分の右腕に絡ませた。

「んじゃ、行きますか」

「はい」

彼女は頬を染めることも戸惑うこともなく、街の方向を見つめて硬い表情を、さらに固まらせた。かちんこちんだ。

ジャックはファアラの左手をぽんと叩く。

「街に着いたら、君はあんまり喋らなくていいから。適当に合わせてもらえると助かる。まだ会ったばかりで信用してくれって言われなくても困るかもしれないけどさ。ちよっとの間、俺に任せてみて欲しいんだ。了解？」

冗談口調で確認をすれば、ファアラは見上げて微笑んだ。

「はい。信じます」

その、真っ直ぐな返事が胸に染み込んだ。

17：第三章 たとえば、だからという言葉 - 4 -

「坊<sup>ほん</sup>」

呼ばれて振り返れば、そこにはブレースタ領から一緒に来た仲間たちが鎧を身に纏って集まっていた。

吃驚して口をぽかんと開けているジャックを見てフェイブ爺たちはにやりと笑う。

「街へ行くんでしょう。数は少ないが牽制くらいにはなるでしょう」  
「別に戦いに行くわけじゃないぞ」

肩を竦めて言うが、彼らはなにがあっても着いてくるつもりのもうだ。

フェイブ爺、アデル、チャド、デンホルム、イーノック、ギャレスの六人。

全員、年も体格も性格も違うが、ジャックを主として認めている。「そういえば、お前ら血生臭くないな」

「ああ、とあるお金持ちの家に残ってる衣装をかつぱらってきた。どうせ河に流されるんなら有効活用しないとね」

さらりとデンホルムが言う。壮年の美丈夫だけに言っていることとの相違に吹き出しそうになる。

「それは正解だ。俺も、城とか富裕層の家にある金目のものは、総ざらいしないといけないって思ってたんだ」

「そうですね。難民と同じでしょうから金目のものも食料もあるだけあればいい」

「だからと言って、量が多くて船に詰め込めないんじゃないから、ちゃんとユージエスさんに相談しろよ」

「了解」

チャドが笑う。

ジャックたちの会話を聞いていたファアラが小首を傾げる。

「お嬢、今のは俺たちの分の金目のものを、ユージエスさんの了承

を得てかつぱらって来いっていう命令なんですよ」

小首を傾げたファアラに対して、アデルがにゅと笑う。

「わざわざ説明するなよ」

呆れたジャックの声に、アデルが歯を見せてさらに笑う。

「綺麗なお嬢さんの前だからって、格好つけるのはよしてくださいよ、坊」

「へいへい。じゃあ、ファアラ、行こうか」

「あの、船は？」

修理はいいのだろうか？ ファアラが表情にその思いを載せて見上げてくる。

「坊の戦のが重要ですから。ぬーさだかなんだかつてことを認められないと困るでしょ？ こんな強面の部下を従えているって思われた方が、ぼんやりした坊ちゃんが出来たって思われるよりも話が進みやすい」

デンホルムがファアラに説明をする。

一人の青年が街に行くよりも、部下を引き連れた青年が街に行つた方が位は上に見える。そういうことなのだろう。

「そうかも、しれません」

「いまいち納得がいかない表情のファアラだが、先程ジャックに『信じる』と言った手前、口を嚙む。そんなファアラの手のひらをぼんぼんと叩いて、ジャックは悪戯っ子のような微笑を浮かべて見せた。

街に下りると、黒髪の人たちからざわめきが聞こえる。遠巻きにジャックとファアラを見つめ、ぼそぼそと話し合う人たち。

いっそ、勢いよく寄って来られた方が対処がしやすいのに。そう思いながら、歩いていると、ティアラが一軒の家の扉を懸命に叩いている。

「ティアラ？」

ファアラの義妹を気遣う声にティアラが気が付くと、彼女は身を翻してファアラに「お姉さま！」と叫んで抱きついた。

泣いている義妹を抱き返して、ファアラがやさしく背を撫でる。

「どうしたの、ティアラ？」

「アルジーさんが、どうしてもこの国に残るって」

「え？」

「この国と、共に死ぬって 何度声を掛けても出てきてくれないの。どうしよう、お姉さま」

ティアラが声を震わす。

ジャックはその話を聞いて、やはりとしか思わない。

生まれた土地、家、思い出。そういうものに縋って離れないと言い出す人がいることは予測がついた。

戦争がおきていても生まれ故郷から離れないと頑なになり、命を落とす人たちも大勢いる。

たぶん、こういう人がいるだろう。

そう思っていたから、街まで来たのだが、着いた早々出くわしたことにジャックは苦笑する。

「じゃ、俺が代わりに行って来るよ」

軽く拳手をして、そして周囲を見渡す。

ジャックの目線に気が着いた仲間は「せーの！」「という言葉と共に、アルジーの家の扉を蹴破った。

呆然。

その言葉通りの顔をファアラとティアラがしている。

「君たちはそのままここにいて。じゃ」

歩き出したジャックをティアラが甲高い声でやめさせようとするが、それをデンホルムが止める。

「坊に任せておけばいい」

「でも!!」

「坊の邪魔をするつもりなら、力づくで止めさせてもらう。女だからって容赦はしないぜ」

デンホルム、それじゃやくざ者だ。

心の中でそう思ったが、とりあえず突っ込みをするのはやめておく。

蹴破つたために壊れた扉をよけて中に入り込む。粗末な寝台に膝を抱えて座っていた老女は瞳を真ん丸にしてジャックを見た。

「『地スイサの大臣』殿 ？」

呆然とした声にジャックは微笑を返す。

「ええ。『地スイサの大臣』代行者のジャックと申します。お初にお目にかかります」

静かに近付いて、寝台の側に膝をつく。

別にこの老女に忠誠を誓うわけじゃない。上から見下げていては話がしにくいからだ。

「あ、の」

「はい」

彼女の言葉を待つ。

「あ あたしや、ここから離れるつもりはないよ！ 亭主も死んだ。息子も死んだ。なにも残っちゃいない。トラガが滅びるなら、あたしもここで一緒に滅びるよ!!」  
声を荒げて、泣くように叫ぶ。

一人だと、そう思っているから自分の命も軽く感じるのだろう。命が重いか、軽いかそんなことはジャックにはわからない。

ただ、この老女が残れば、少女二人は一生後悔をし続けるだろう。

「なあ、ばーさん」

最初とは打って変わった言い方に老女が目を眇めた。

「どうして、俺がこの国に生まれなかったのかわかるか？」

返事はない。

ジャックには返事を聞くつもりもない。

今からやるのは脅しだ。しかも性質たぐの悪い。

「この国の人たちが、大地をなくしても他の土地に無事に移れるように『地ヌーサの大臣』が気遣ってくれたんだ」

そんなことは知らない。口からでまかせだ。

「だから、この国を離れても生きていける。やっていける。大丈夫だ」

落ち着いた口調でそう断言して老女を見る。

「俺は、あんたがここで死のうが生きようが、正直言ってどうでもいい」

その冷たい言葉に老女が瞳を揺らす。

そう、彼女はなんやかんや言って、気にかけて欲しいのだ。本当に残って死ぬ気なら、当日まで平静を装って、最後にこの家にとっそりと戻ってくればいい。その方が確実だ。なのに、それをしないで騒いで立て籠もる。

かまって欲しくて泣き叫ぶ子供と同じだ。

「だけど、あんたがここに残って死ねば、金の姫と青の姫は一生、後悔をし続けるだろう。どうしてあんたを救えなかったのかって」

老女が俯く。

「どうして守れなかったのだろって、思い続けるような傷をあんたが残すって言うなら」

ジャックは声を潜める。

老女に近付いて、耳元に囁く。

「だったら、俺があんたを殺す」

体を離してにっこりと微笑めば、相手は瞳を見開いたまま愕然としている。

老女の手が震えだす。

笑っているがジャックは本気だ。

殺気を敢えて向ける。

「本当は、新しい土地で生きていくのが面倒なだけじゃないのか？  
そんな理由で彼女たちに傷を残されるのは困る。俺は戦をして、  
人を幾人も殺してる。一人や二人増えたところで大差がない。だか  
ら、苦しまないようにしてやるよ」

どうする？ という問いを込めて見つめる。

老女は震えるだけ。

「だからさ、殺されるのが怖いなら生きてくれないか。あんたの人  
生で得た知識は、これからきつと必要になる。城で暮してた姫さん  
たちが国を離れて長旅をするんだ。煮炊きもできないだろうし繕い  
物も難しい。どこかに定住することになるなら作物も育てないとい  
けないし、なによりも残りの日数でできるだけ食料を整えなくちゃ  
いけない。台所頭のジュリアさんだけじゃ手が足りないんだよ」  
死を考えさせて、そして生きて行くことに目を向けさせる。

口で言うほど簡単なことじゃないけれど、でも

「なあ、姫さんたちのこと、好きか？」

こくりと頷く。

「たとえば、あんたの大好きな人が生きていて、同じことをするっ  
て言ったら どう思う？」

ジャックは肩を竦める。

「悪いけど、二者択一だから。俺に殺されるか、それとも姫さんた  
ちのために生きるか。ここで選んでくれ」

見下ろして、今度は冷たく言い放つ。

老女は震える手を合わせて、そして静かに顔を上げた。

「『光ソレアの女神』さまはいらっしゃるのですか？」

「外で俺の部下と一緒にいる。あんたのこと、心配してるよ」

幾分、声を和らげて言えば、老女は小さく「会わせて頂けませんか？」と言う。

「わかった」

短く答えて彼女に背を向けた。

家の外で心配そうに待っているファアラを見て手を振る。

「ファアラ、アルジーさんが呼んでる」

ファアラは走って中に入ってきた。眩い金の髪が、反射して輝く。

「アルジーさん！！」

ベッドに駆け寄り、合わせられた老女のしわくちやの両手を取る。

その様子を入り口付近で見守る。

「わたしらは、この国を出てどうするんだい？」

「マーシアに向かい庇護を受ける予定です。ですが先に向かっている国王陛下からはなにも届いていないのが現状です」

ファアラは正直に答える。

そのことに苦笑を心の中で漏らす。いつでも正直でいるというのは美点ではあるけれど、不器用でもある。とりあえず嘘でもいいから、老女が安心するようなことを言えばいいのにと思ってしまう。

（だが、それではアルジーさんにはきつと通じない）

ファアラは不器用な程に真っ直ぐだ。

生真面目で素直で正直で。

そんな彼女だから、ティアラもユージェスもジュリアも共にいるのだらう。

「塩は城に余ってますか？」

突然の言葉にファアラが瞳を瞬かせる。

「お塩、ですか？ たぶん、あると思いますが」

「塩漬け肉の作り方、わかりますか？」

「え？ いいえ。ごめんなさい。わかりません」

しゅんと答えるファアラを見て、老女は微笑を浮かべた。

「残るとか言つて、困らせてしまつて申し訳ありません。出発までもう少し、時間があるとお聞きしています。ギリギリまで食料の確保を致しましょう。微力ながら、わたしもお手伝いします」

「アルジーさん」

ファアラが感極まつたのか、老女の手をきつく握つて額にその手を当てる。声が出ないらしい。

「ありがとうございます」

ファアラが搾り出すかのように感謝の言葉を紡ぐ。

ありがとうと言つるのはファアラではないはずだ。

なのに、彼女はありがとうと言つ。

老女は涙ぐむファアラをやさしい瞳で見つめた後、顔を上げてジャックを見つめる。そしてふつと笑つ。

その笑みは吹っ切れたかのように、すっきりとしていた。

生きていれば必ずいいことがあるなんて言えないし、言いたくもない。

嬉しいことも楽しいことも、悲しいことも腹立たしいこともたくさんある。そんなふうにいるいろいろな感情が波立から面白いんじゃないか　そう、思うけど、それを誰かに押し付けることもできない。

たとえば、自分が死んだら。

だから、生きていよう。

ちっぽけな理由すらなく生きている人なんて世の中にはごまんといる。

とりあえず、罪なき命を手に掛けることがなくなりジャックはほつとした。

今代の『地の大臣<sup>スイサ</sup>』が異国の民だという話は五十名ほどの残った住人にあつという間に伝わった。

アルジーという名の老女以外には土地に残ると言い張るものもなく、準備は粛々と進んでいく。

城の前の船を置く場所に石秤を置き、各世帯でこの秤と同等まで船に詰めることにした。

住民たちにはユージェスから、とにかく食料を積み込むことを伝えてもらい、家財に関してはなるべく諦めてもらうように伝えた。

その代わりと言ってはなんだが、城内や富裕層の家に残されていた宝飾品や高価な布などを均等に渡しておく。

売り捌けるかという疑問もあるが、金目のものを河に流すのももつたいない。

アルジーが残っていた女性たちに声をかけ、城では塩漬け肉や、野菜の漬け物、瓶詰め、乾物を作っていく。炊いた穀類を乾燥させて幾種類か混ぜて挽いた簡易食。挽いた穀類を酒種で発酵させて固く焼いた餅。穀類はなるべく量を持てるように挽く。消毒にも使える酒と油を壺に小分けし油紙で蓋をする。

他にも糸と針、布を掻き集める。トラガの郷土品と言われている織の反物。これは着るためではなく売るためだ。ただ、売れなければ縫い仕立てるため、裁縫道具は重いものではないので予備も積んでおくつもりだという。

街の男たちには薪を集めてもらう。

他にも果物やしなやかな植物も集めておく。蔦や蔓なども集め、後は織糸綱と貴重品の鋼索<sup>ユウソク</sup>も集める。

天幕も必要になるので、とりあえず集めるだけ集めて取捨択一する必要はあるだろう。

それと同時に船の修復も続ける。

大穴はまず埋まったが、少しでも補強をしていく。

後は、ファアラの体調が心配だが、こればかりはティアラとジュリアの監視に任せるしかない。

「坊<sup>ほん</sup>」

地下に降りていくとチャドが苦笑を零していた。

「どうした？」

フェイブ爺の荒げた声が聞こえてきた。

「どうして道具に手をつけたんだ!!」

これだけ声を荒げる爺も珍しい。そう思って先を見ると、そこには小さくなっているファアラがいた。

慌てて駆け寄る。

「爺、どうしたんだ？」

声をかけると、ファアラはさらに俯き、フェイブ爺は呆れた表情で見つめてきた。

彼の手にあるのは、家宝だと自慢していた<sup>かな</sup>鉈だ。

「どうしたも、こうしたも」

フェイブは口を濁す。

ファアラを見ると、彼女は身を小さくしたまま黙っている。唇をきつく噛み締めて、後悔に苛まれているようだ。

長い間、黙っていた両者だが、先にフェイブが口を開いた。

「そのお嬢さんがこの鉈を水拭きして下さったんですよ」

呆れた口調で吐き出した。

「　　そうか」

その言葉で事情はわかった。

「いや、善意だったろうとは思いますが。随分汚れてましたからね。だが、その悪意のない善意のせいで、わしが長年使い続けた愛用の道具が駄目になった」

言外に含まれているのは、ジャックに対する非難。

「フェイブ爺。俺がしっかりと指導しなかったせいだ。すまない」  
ブレイスタ領での謝罪の仕方です。

彼女にはもしもを考えると伝えてはいたが、現場の人間の道具に手を出すなという、もつとも重要なことを伝え忘れていたのはジャックだ。

「坊の失策ですよ。おかげで勘が狂う」

水拭きされた木材は目を荒くする場合がある。フェイブは戦場以来、油紙に包んだ愛用の鉋を持っていくくらいだった。職人にとって長年使い続けた道具は手足と一緒に。手足を切り捨てることはできないとは彼の言だ。

「本当にすまなかった」

しっかりと謝罪をする。

「あ、あの、ジャックは悪くありません。わたくしがきちんと聞かなかったのですから　　」

フアラがおずおずと声をかけてくる。

「下の者が失敗をしたら上の者が謝罪するのは当然のことですよ、お嬢」

フェイブのぴしりとした物言いにフアラは眉根を寄せる。

「それはおかしいですわ。失敗したのはわたくしです。でしたら、責められるのはわたくしであるべきです」

「お嬢が理不尽を感じようと、下がへマしたら上が怒られる。これがわしらの中では正しい構造なんです」

「そんな　　」

フアーラが前掛けをぎゅっと握り締める。

「善意だろうが、誠意だろうが、結果が伴わなければそれは失敗であり、悪意に転ずる」

フェイブの言葉にフアーラはなにか反論しようとするが、言葉が見つからなかったのか口を開いたまま言葉は発せられなかった。

「フェイブ、あんまりフアーラを苛めるな」

「苛めとりやせんですよ！ わしはこのお嬢の真面目さを気に入るとる。だからこそ、言うんですよ」

フェイブの言葉にフアーラは開いていた口を閉じた。

「お嬢は、人を頼ることを知らなさ過ぎる」

フアーラは目を見開く。

まるで瞬きを忘れたかのように。

「わかんないことがあれば聞けばいい。お嬢も聞かれたら答えればいい。そんな簡単なことを難しく考え過ぎとりやせんですか？」

「簡単なこと、ですか」

語尾が小さくなる。

ジャックは二人の間に入る。

「言い過ぎだ」

短く遮れば、フェイブは肩を竦めてジャックを見上げる。

「過保護はお嬢のためになりませんよ」

「誰にだって段階は必要だろう。フアーラは頼ることを許されなかったんだ。そんな人間に急に頼れと言ったところで方法を知らないんだから、上手にできるわけない」

ジャックの言葉を聞いて、フェイブはフアーラを見てそして溜息を吐いた。

「それは、なんというか、大変でしたな　この鉋はブレースタ領の未練だったのかも知れませんが。目に見えぬ存在が未練を捨てるとわしに言っていたのだと、思うことにします」

そう言うとフェイブは鉋を作業机の上に置いて背を向けた。

そして船に戻っていく。

ファアラはそれを見送ると、へなへなとその場に膝を着いた。愕然とした様子にジャックは心配になって彼女の手を取る。

「ファアラ。大丈夫か？」

とても大丈夫そうには見えないが声をかける。

だが、ファアラは答えない。

瞳を大きく見開いたまま、細かく震えている。

まずい。

「ファアラ！！」

目の前で大きな音を立てて手を叩く。室内にパン！！と大きな音が響き、そしてファアラがはっと顔を上げた。

「あ」

「しっかりしろ」

ようやく瞬きを思い出したファアラは両腕で自分の体を抱き締めた。

まるで寒いのを我慢するかのよう。

「ファアラ、抱き上げるぞ」

ジャックは了承を得ずにファアラの体を抱き上げた。

相変わらず軽い。

抱き上げてそう思う。

しつかりと見張って食事をさせているのだが、彼女の体重は一向に増える気配がない。二、三日程度で明らかに太るわけがないのだが、細過ぎて心配だ。

(肉とか食べさせないと駄目かな)

そう思いながら歩いていると、ファアラがこてんと左肩に頭を乗せた。そして腕の中の存在がずしりと重さを増す。

気を失ったのだ。

ジャックは心の中で溜息を吐く。

出会ってまだ数日。明日が、出発だ。

その間、呼び名はお互い呼び捨てになったが、ファアラの態度は初日からほとんど変わらない。礼儀正しく、生真面目で丁寧で親切で、そして頑な。

多少の馴れ馴れしさが出てきてもおかしくない頃だというのに

けれど、彼女のこれまでを耳にすれば、馴れ馴れしくすること自体を知らないのかもしれない。

それを可哀想と思うことは簡単だ。

だが、そんなことを思えば、彼女を侮辱するような気もする。

二階に向かつて歩いていくと、デンホルムとティアラが口論をしながら歩いて来る。最初、ティアラを止めて以来、二人は出会ったびに言い合いになっているようだ。

なんとというか、言い合いというよりも小さな猫が優雅な猛獣に噛み付いているのだが相手にもされていない、というような感じもするが。

その小さな猫、いや、お姉さま至上主義のティアラは、ジャック

の腕の中のファアラに気がつくで大慌てで駆け寄ってきた。

心配そうに覗き込む。

気を失っているファアラを慮ってか、声をかけることはしてこない。

ジャックは不安げなティアラに声をかける。

「ティアラ姫。ファアラ姫の看病をして頂けますか？」

改まって頼めばティアラは硬い顔で頷いた。

その日、夜遅くまでファアラは目覚めることはなかったと次の日に聞いた。

「陽に夜に、我らを受け給いし母なる祖国。その御力を我が身に宿いし力として、振るうことをお許し願ひ奉ります」

ファアラは祭壇で、手にして小刀を使って長い髪の毛を肩の辺りで切り取った。ざくり、ざくりと鈍い音をさせて切った髪の毛を祭壇の上にある火桶にくべる。

くべられた金の髪は大きな炎に巻き上げられ、そして煌きながら炎の中に消えていった。

そして、その生まれた輝きは天井にまで羽ばたき、そして小さく煌きながら消えていく。

ジャックは見上げて瞬きをする。

綺麗だけれど、なんとというか切ない瞬間だった。

（切ない？）

どうして自分がそう思うのかわからないけれど、心の中に浮かんだ気持ちは切なさだった。

早朝から積み込みは完了し、十七世帯五十二名とジャックの仲間の六名は船に乗り込んでいた。この祭壇にいるのはフアーラとジャック、そしてティアラの三人だけだった。

儀式を終えたフアーラは、ジャックとティアラを壇上から見下ろして微笑んだ。

「後は、可能な限りわたくしがここに残りますから、二人は『月光ルシアの雫』号に乗船してください」

穏やかな、静かな笑みだった。

「船からじゃ、駄目なのか？」

ジャックは奇妙な不安を覚えて見上げる。するとフアーラは駄々っ子を見つめる母親のような慈愛に満ちた瞳で見下ろしてきた。

「この土地に体がないと駄目なんです」  
トフガ

困ったような笑み。

「お姉さま、わたしも残るわ」

ティアラが泣きそうな顔で祭壇上に駆け上がる。そして義姉の体を抱き締めて言う。そんな義妹の体を抱き返して、フアーラは淡々と告げる。

「あなたまでがいなかったら、船の中が纏まらないわ。それにティアラが『月光の雫』号にすることで飛び移るまこ的にもなるの。だから先に待っていて。すぐに、いくから」  
「ふわりと微笑む。」

その笑みは、なにか別の感情が付随しているが、その感情がなにかまではジャックにはわからない。

「フアーラ」

「ジャック、ティアラをお願いします」

小首を傾げて穏やかな口調で言う。

なんとというか妙な違和感を感じるが、船上からフェイブたちが声をかけてきたため、その違和感の原因を捉え切れなかった。

「早く来いよ」

それだけ言って、後ろ髪を引かれて何度も振り返るティアラを伴って船に向かう。

ティアラとジャックが船に乗り込むと同時に、ゆっくりと船が動き出した。

驚いて、船尾に走り出す。

それはティアラも同じだったようで、ジャックについて走っていく。

濁流に身を任せた船は固い音をさせて大きく上下する。そのたびに住民たちが叫んでいるが、ジャックもティアラもそちらに気を遣う余裕はない。

「お姉さま!？」

ティアラが悲痛な叫びを上げる。

尖塔の上部に、煌く金の光。

船が動き出すと同時に大地が崩れ始めた。まるで動き出した船を追い駆けるように、大地が崩れ、建物が崩れ、流れ出す。

「フアーラ!」

ジャックは声を張り上げる。

船の上から崩れ落ちる城の尖塔を見上げる。尖塔のさらに上、塔の頂点に違和感。

そこは通常は立つこともできないはずなのに、白い衣装を翻す金の髪の少女がいた。

「フアーラ!」

ガタガタと動く船上で見上げて、ジャックは声を再び張り上げた。

「なにをやっている! 下りて来い!」

「姉さま!!! 早く来て!!!」

ティアラも叫ぶ。青い髪をなびかせて、空色の上空で光を浴びる

かのように両の手を広げたファアラを見上げる。

木が石に削れる鈍い音がして、残りの住民全てを乗せた船が急流に押し出され、船体を大きく右に、左に、と揺らめかせながら、進む。

「ファアラ、戻れ！！」

川の轟音、船の揺れに戸惑う住民たちの声　そして、今まで

彼らを守り続けてきた島の最後の雄叫び　崩れる城、崩れる森

崩れる館、家、神教会、光の大地。

「ファアラ！！」

ただ叫ぶことしかできない。

「ファアラっ！！」

彼女の名前を。

「ファアラッ！！」

声の限りで呼ぶと、瞳を閉じ祈るようにして船を動かしているファアラがゆっくりと瞳を開けた。金の瞳が微かに細められる。口元には笑み。

よく見かける、なにか別の感情が付随する笑顔。

続いて、口が微かに動く。

生きて。

まるで空虫の中に溶けてしまうような臃げな笑顔。涙を堪えているかのような、見ているこちらが悲しくなる笑み。そんな笑みを浮かべて彼女は俺たちに望むのだ。生きて、と。

「どうしてっ、一人で戦うんだ、お前は！」

ジャックは苛立たしさに船尾の縁を拳で殴りつける。

痛い。

でも、それ以上の痛みを、彼女はずっとずっと一人で抱え続けていたのだ。

誰にも言えない、重く苦しい痛みを、神と呼ばれる見えない存在を身に留める少女は、涙を思い出すこともなく笑って抱え続けてきた。

ぐらりと船体が大きく動いて、激しい振動と、凄まじい音と共に、ぴたりと動きを止めた。

船が、一人の死者を出すこともなく、対岸についたのだ。

尖塔の上で、船が無事に対岸に着いたのを見たのだろう。ファアラの周囲の光が消える。

そして、彼女の体はゆっくりと頭から落下する。

「いやあああ!!!」

隣のティアラが両耳を手で押さえ、持てる限りの力を出して叫ぶ。その、空をも切り裂かんとするような絶叫に振り返ることもなく、ジャックは船尾の縁を蹴った。

濁った川の流れに躊躇することなく飛び込む。

「まだだ、まだ残っているはずだ。自分の中にあるという『地ヌーの大臣サ』とかいう大げさな名前の感覚は。」

（最期の仕事だ、あなたの同僚が入ってる体に俺を導いてくれ!!!）  
あまりの水の汚さに、潜って目を開けることなどできない。それ以前に流れに逆らって、小さな少女一人を探し出すことなんてできるはずもない。自分一人の命だって、どうなるかわからないくらいだ。

でも、ジャックは変な信頼を寄せていた。

（だって、言っただろう、ファアラ！ お前は必ず俺たちを元いる世界に帰すと!!! だったら俺の命も助かるはずだ）

ちらりと視界に入る白い布。

手を伸ばす。

蛇のようにつねる金の髪。

届け!!!

思いの丈と共に、手をさらに伸ばす。

右の中指の先になにかが引っ掛かる。それを瞬間、感じると同時に握り締める。引っ張り込む。

抱き締める。

腕の中には、頼ることを知らない、一人の少女。

(あ)

ジャックは濁流の中から顔を出して口角を上げる。

自分達二人を取り巻くこの波動。

光と大地と、水の波動。

その波動は岸边に二人をやさしく誘導すると、波の中に戻り、遙か遠い　彼らを送り出した根源へと向かって、旅立って行った。

最後の瞬間、白い　光の手のようなものがファアラの頬を撫でていったのは、気のせいじゃないだろう。

ジャックは水に濡れた少女の体を岸から抱き上げて、川辺の草地に降ろす。

頬に張り付いた髪の毛をよける。

「へえ、灰色　いや、シルバークレイなんだ」

ジャックは元に戻った己の金髪も引つ張って苦笑する。

さて、どうしよう

だいぶ川下に流された。

このまま濡れたままでいれば、みんなと合流する前に病気になってしまうかもしれない。だが、着替えなど持っていないし、なにも遮るものがない砂礫さわきの大地では火を熾すことも、枝に服を干すこともできない。

「　どっしって」

さて、次からどうしようとしてジャックが考えていると、岸边に身を横たえていたファアラが自分の顔を両手で覆って声を絞り出した。

「どうして　生きて、いるの　」

啜り泣く声が、濁流の音に混じってジャックの耳に届く。

「なんで　『光の女神』は、いないのに」

ひつくひつくと、しゃっくりをするような泣き声。

「どうして、って　その『光の女神』たちが、ファアラに生きていて欲しかったからみたいだぜ？」

胡坐をかいて、ジャックは横たわるファアラをやさしく見下ろした。

「俺が川に飛び込んだらまず『地の大臣』が周囲を守ってくれた。

君に手を伸ばしたら『青い魔師』が繋げてくれた。そして、君をずっと守っていたのは『光の女神』だった　最後に、まるで母親が子供の頬を撫でるみたいにしてたよ」

ジャックの言葉に、ファアラは手のひらを外して青年を見上げる。  
「母親？」

「ああ。名残惜しげに、慈しむような光がファアラに触れていた」  
ジャックは幼い子供のように自分を見上げてくる少女の頬を、あの光が撫でていったように、やさしく撫でた。

「　　こんなふうに、さ」  
頬を撫で、そしてその手のひらを頭に回してぼんぼんとやさしさを心がけてやわらかく叩く。

もちろん、こんな動きはしていない。

でも、彼女を見ていたら頭を撫でてあげたくなるのだ。

「よくやったよ　ファアラは。頑張った。今まで一人でよく戦ってきたな」

シルバーグレイの髪を梳くようにして撫でる。

「本当によくやった。お疲れ様」

「ジャック　」



ファアーラはジャックの言葉に困ったように微笑み、そして視線をグレメンディア河に移す。

光の国と呼ばれた『トラガ国』の姿は形もない。

ただ、対岸が見えるだけ。

その視線を追って、ジャックも対岸を見つめる。

何もない。

国があつたことも、その国で彼女たちが懸命に生きていたことも、なにもわからない。

「生きて、いるんですね」

小さく、ファアーラが呟く。

「生きて、いるな」

ジャックは胡坐をかいたまま起き上がるファアーラを黙って見つめた。

もう、彼女は『金の姫』じゃない『光の女神』<sup>ソレア</sup> 代行者でもない。

ただの、ミリアファアーラという名の少女。

「わたくし、あの塔の上で、思ったんです」

ファアーラは視線を大河に向けたまま、まるで独り言のように語り始める。

「意外とティアラとジャックの二人はお似合いなのかもしれない、つて。最期には相応しくないほんわかとした気持ちになりました」

ファアーラの場違いな発言にジャックは多少げんなりとする。

「ティアラのわがままを、あなたなら上手にとりなしながらうまく付き合うことが出来るだろう。王国に着くまでの間に、二人はきつと仲良くなれるつて」

そこまで言うと、視線をジャックに戻す。

「もう、自分の役目は終わったつて ティアラはあなたに任せて、民はティアラに任せて、わたくしは静かに亡くなることができ

ると、そう思ったんです」

きつと、ファーストは今まで誰にも語ることもできなかった弱音を吐き出している。

「そう思って、どう感じた？」

穏やかに尋ねる。

責めているように聞こえなければいい。無責任な発言かもしれないが、自分の命を自分で定めるのも悪いことではないと思う。ただ、もったいないと思うだけ。

「感じる？」

感じたことですか

「

ファーストはそう言うかと黙りこくる。

「満足感、充足感、安堵」

ぼつりぼつりと答える。

「後は

「

そこまで言つて、ファーストは言葉を切る。

ジャックの瞳を見つめて、そしてくしゃりと顔を歪めた。

今までずっと溜め込んでいただろう、涙が溢れ出す。啜り泣くのではなく、次から次へと涙がただ溢れ出していた。

「淋し かった」

そつと指を伸ばして、左頬に流れる涙を拭う。

親指に触れる温かな雫。

「わたくしは、なんだったんだらうって 淋しかった。『光の

女神』<sup>レナ</sup> 代行者じゃないわたくしは、本当にいらぬ子だったのだと

淋しかった」

まるで、迷子の子供が泣き出すように、ファーストは口元を両の手のひらで押さえて嗚咽を零す。そのまま、ジャックはファーストが落ち着くまで、静かに待った。

彼女の頬を撫でながら。

ぼろぼろと零れ落ちる、涙は陽の光に煌いて、彼女の白かった前掛けを濡らす。

拭うこともなく溢れ出る涙。

それを少し落ち着いたファアラが袖で拭った。顔が濁流で汚れた袖で拭われたため、薄茶色に染まる。

「ティアラは王族で、『青い魔師<sup>サイア</sup>』じゃなくなっても、必要としてくれる人がいる。でも、わたくしは？ そう思ったら怖かった。トラガがなくなった後、わたくしは不必要なのだ。そう言われるのが怖かった。だから！！」

ファアラはそこまで言うと言顔を両手で覆った。

ジャックは行き場を失った右手をファアラの左肩に置く。

「生きるって、戦うことだと俺は思うんだ」

ジャックの言葉にファアラは小首を傾げる。

「戦うって言うけれど、戦士や騎士だけが戦っているわけじゃないって思うんだ」

ファアラは黙ったまま、真っ直ぐな瞳でジャックの言葉の続きを待つ。

「日常の毎日が、その人にとっての戦場なんだと思う。旗を掲げて盾を手にして剣を振るうだけが戦いじゃない」

そこまで言って、ジャックは微笑する。

「俺は、ファアラに頼まれたからここへ来た。それなのに、君がいなくなったら、俺はどうしてここに来たのかわからなくなる」

これは、正直な気持ち。

ジャックはファアラの細い肩に置いた手を離して、彼女の肉の薄い小さな右手を取る。

「なあ、俺の戦友にならないか？」

真っ直ぐに見つめて告げる。

ファアラはジャックの言葉に目を丸くする。

「戦友？」

「そう、一緒に戦おう」

明るく告げる。

「俺は、騎士つて一人の女性に命を捧げる戦士だと思っている。なに夢見てるんだとか言うなよ？ その女性が恥ずかしくない戦士で

あること、それが騎士の生き方だと小さな頃に教わった」

ファースラは握られた右手を見つめて、そして顔を上げてジャックの瞳を見返す。

「今だけでも良い、お互いの居場所にならないか」

ジャックはファースラの右手を引き、そして手の甲にくちづける。

「俺は、ファースラの騎士になりたい。だから、ファースラは俺たちの女主人として生きて欲しい」

ファースラからの返事はない。

ジャックは唇を甲から離して見上げる。

すると、彼女は呆然と瞳を見開いたまま、口をぽかんと開けていた。

思わずその表情に、笑みが零れる。つつい「ぷっ」と吹き出してしまふ。

自分が笑われているのがわかっていいるだろうに、彼女の顔に浮かんでいる感情は混乱だけ。

ジャックは彼女の手を引いて、左頬にもくちづけた。

小さな音をわざとさせて離すと、ファースラはさらに瞳をまん丸にする。今にも顔から目玉が零れ落ちてしまいそうだ。

あまりにも驚いている、その顔を見てジャックはふっと息を吐き出した。

なんだか胸の中が温かくなる。

「はい。契約終了。契約破棄はできませんので悪しからずご了承ください」

そうにつこりと告げて立ち上がる。

振り返ると、そこには荷物を引いた住民たちとジャックの仲間が小さく見えた。中から一人飛び出してくる。

「お姉さま!!」

顔をくしゃくしゃにして泣き腫らしたティアラが駆け出してくる。

「とりあえず、俺とティアラは君のことを必要としてるみたいだぜ？」

そう言って、ファアラを見下ろせば、彼女は両手を口に当てて、  
眉根を寄せて　　そして今度は嬉しい涙をぼろぼろと零した。

服を着替えて、マーシアを目指すことにした。

ファアラだけでなくティアラにも着替えをしてもらう。二人ともドレスだったため、そのまま移動をすれば汚れてしまう。

本来なら皇女であるティアラには煌びやかな衣装で入国してもらった方がいいのかもしれない。けれど、トラガはすでに失われた国亡国の皇女が訪れたところで喜んで迎え入れてもらえるとは到底思えない。

先に入国しているという王と側近、そして問題児の皇太子はどうしているのだろうか

しなやかな木の枝に布を巻いたものを彼女たちの周囲に垂らして着替えてもらったのだが、ファアラもティアラもこんなところで着替えるのかという文句を言うこともなく、素直にこちらの指示に従ってくれる。

二人の少女は、城で暮らしていたわりに贅沢に興味がないようだ。そういえば、出発前に城や富裕層の家から宝玉類を持ち出す算段をしていても、これは価値があるとか傷があるとか質がいいなどのアドバイスをしてくれるのに、欲しそうな顔などは一切なかった。

普通がよくわからないが、年頃の少女が見たら瞳をキラキラさせるものだと思っていた、宝石とか装飾品というものは。

「終わりました。ありがとうございます」

上げていた腕を下げると、旅装を身に纏ったファアラが出てくる。泣き腫らしたため、瞳はまだ赤い。

だが、表情は少し晴れやかに見える。

そうであって欲しいという願望が、そう見せているのかもしれない

いが。

「じゃあ、今度はわたくしが代わりますわ」

ジャックが持っていた簡易着替え用の隠し布を持つとすると、彼女の身長では大変だろうに、その心意気がなんだか嬉しい。

「坊<sup>ほん</sup>なんて、そこらで着替えればいいんじゃないんですかあ？」

チャドがにしし、と笑いながらデンホルムと一緒に持っていたテイアラの布を下ろす。テイアラも旅装に着替え終わったらしい。

「猥褻物をさらすのは頂けませんなあ」

デンホルムがふるふる首を振る。

「さらすか！」

思わず反論すると、「そうそう、そういうもんはお嬢にだけ見せればいいですからな」と一緒にファアラの布を持っていたフェイブがうんうんと頷く。からかえるところを見られたら、とことんからかわれるのは経験則で知っている。

ジャックは溜め息を吐くと着替えを手にしてさっさと布の中に入る。

入ると、「お嬢、今手を離さない。面白いものが見れますよ」「男の裸なんて今のうちから見慣れておくものです」「まあ、坊の細っこい体を見たところで楽しくないでしょうが」などという不穏な会話が聞こえてくる。

そのたびにファアラが、表情は見えないが戸惑いながら「え？」

「あ、あの」「などと返答に困っているのは布の中にも面白かった。

ゆっくり着替えて全員を待たすわけにはいかないので、さっさと着替えて布を下ろしてもらう。

ジャックを見て、改めてファアラは瞳を瞬かせた。

「あなたの中に、まだ『光の女神<sup>ソレテ</sup>』がいらつしやるようですね」

自分以外の金の髪を見たのが初めてだったのだろう。

ファアラは微笑を浮かべる。

その微笑には一抹の淋しさが混じっているが、それは仕方がない

だろう。

周囲を見渡すと、それぞれ髪の色が黒から変わっているが砂色や灰色などの暗い色の者が多い。そういう種族なのかもしれない。

フアーラもティアアラも灰色の髪。やや青みのある銀が混じっているようにも見えるが、自分よりも落ち着いた色をしている。

ジャックは髪の毛を引つ張りながら肩を竦めた。

「とりあえず、名目上はティアアラが王族だから、ティアアラを主体とした運営にしたいんだけど、どうだ？」

フアーラとティアアラを見ると彼女たちは黙って頷いた。

「ティアアラは基本的にフアーラに相談するだろう？ だから、俺たちは君たち姉妹の騎士団という形で進んでいくのがいいだろう」

「はい。お願いします」

ティアアラが素直に言う。

なんとというか、気持ちが悪いくらいに従順だ。

そんな怪訝そうな表情を浮かべているだろう俺を見て、フアーラがふわつと微笑んだ。なんとというかちよつと悪戯っ子のような雰囲気がある。

「わたくしたちで決めたのよね。トラガを出たらジャックの指示に従おうって」

にこりと笑ってフアーラはティアアラを見る。

「そうよ。お姉さまと決めたの。お父さまたちと合流するまでは、私たちはあなたの指示に従うわ。王族に対して呼び捨てだろうと、お姉さまに対して口調が汚かろうと、背に腹は変えられないから我慢するわ!!」

言葉通りには我慢せずに叫びながら、ティアアラが顔を怒りで真っ赤にさせている。

その顔を見てデンホルムが「小猿みたいだ」とぼつりと呟いたのだが、本人に聞かせるつもりがあるのかわからないのかわからないが、すっかりとティアアラの耳に届いていた。

「主従揃って失礼ね!!」

と、ティアラがムキになっている。

そんな義妹の様子を見てファースは楽しそうに微笑んでいる。

「じゃ、出発するか。ファースは基本的にフェイブ爺の傍にいてくれ。本当なら俺の傍にいて欲しいんだけど、人数が足りないから俺は移動が激しくなると思うから」

ジャックの言葉にファースは瞳を瞬かせて、そしてこくりと頷いた。

「おお、坊ちゃん、言うね」

「俺の傍にいて欲しい、なんてクサっつー!!」

「あの、すぐにねしょんべん垂らしていたガキが　　よよよ」

周囲からからかいの言葉がわっと飛んでくる。

「うるさい!!」

ジャックは顔を真っ赤にさせて叫んだが、そんなジャックを見てファースはただ不思議そうに首を傾げるだけだった。

## 24：第五章 再びの出発、見知らぬ土地 - 2 -

住民たちと揃って進む必要はないのだが、ファアラとティアラのたつての希望で全員で進むことになった。

住民たちの五十二名は老人から子供までそれぞれだ。

なぜ、こういう形で残っているか聞いたら、脱出順はくじで決まったのだという。

『光の女神』、『青い魔師』のそれぞれの代行者がいる最終便のが返って安心だろうと、不安を押し隠して皆が残っていたのだという。歩き始めて二日目。

砂礫の大地を抜け、徐々に草や木が見え始める。

植物の気配が、なんだか心地良い。

ジャックは子供には歩きながら枯れ枝や枯葉を拾うように言う。表を作って一番多く集めたものに丸を書いていくぞ！と遊戯のようにしてしまう。すっかりその表の中にはジャックとチャドの名前もあった。

そのことを見たチャドは「負けないからな！」と子供に混じって一緒に歩きながら集めている。明るい彼の性格は子供達に好かれるらしく、あつという間に仲間混じっていた。

中心に老人、女性、幼い子供などを配し、基本的には速度は中心に合わせている。

男性にとつては遅過ぎる速度ではあるが、最初から無理をして歩を進めても続きはしないので、男性陣にはいくつかに組を分けて狩りしてもらうことにする。

鳥、獣、きのこ、野草。狩りといってもいろいろあるから、それぞれの組に工夫を凝らしてもらうことにした。あまり奥まで行かれないが、組長と見張りに笛を持たせ、見張りからの目が届くなったら笛を鳴らすことにする。

マーシアの端の砦までは徒歩で三日ほど。余裕を見て五日を取っ

ている。

日が暮れる前に陣を描いて炎を焚き、交代で見張りながら眠る。そんな行程の中、徐々に仲良くなる者たちもいれば、親睦をさらに深めている者たちもいる。ファアラは膝の上に小さな女の子がもたれているのを撫でながら、隣のティアラとお喋りをしていた。なんととはなしにその姿をジャックは見つめる。

「お姉さまが、ジャックの指示に従いましょうって言ったのは、もしご自分が死んでも私がそうするようにってことだったの？」

ティアラが頬を膨らませながら聞いている。

その言葉にファアラは泣きそうな笑みを浮かべる。

「ごめんなさい。あなたとジャックなら上手くいくんじゃないかと思っていたの」

ティアラが言いたいのは、そういうことじゃないだろうと思いいながら、ジャックは塩漬け肉が入った椀をすすする。

食事は、人数が多いこともあって複数回に分けている。

もしもがあつた時に対処ができるように。

「お姉さまは、ご自分が私に好かれているってこと、もっと自覚するべきだわ！」

きつぱりとした物言いにファアラは小さく口を開けて、義妹を見やる。

「ティアラ

「お姉さまが『光の女神』<sup>ソレト</sup>だろうと、なんだろうと私には関係がないの。覚えておいてね」

「ありがとう」

ファアラは気恥ずかしそうに微笑んで、そして義妹の頭を撫でる。二人の年の差は一歳しか変わらないはずなのに、ファアラのかなり年上に見える。

その後、ティアラは子供たちに連れられてその場から離れる。なんだか名残惜しそうに見えるのが微笑ましい。

ジャックは食事を終えて立ち上がると、子供を膝の上に寝させた

まま、髪の毛をやさしく撫でているファアラの隣に座る。

「ジャック」

「気持ち良さそうだな」

彼女の膝の上でぐっすりと眠っている女の子の頬にかかった髪の毛を除けてやる。

「ええ。このまま順調に皆まで着けるといいのですが」

「そうだな」

頷けば、彼女はじっと真剣な瞳で見上げてくる。

「どうした？」

怪訝に思つて問い返せば、ファアラは口元に指をあてて少し思案をした後、ゆつくりと綺麗な薄紅色の唇を開く。

「ジャックは、女主人とはどういふ人のことだと思つていらっしやるんですか？」

「女主人？」

「はい。女主人として生きて欲しいとジャックは仰いましたが、女主人とはどうあるべきかという問いに答えがいつこつに出ないのです」

真面目だ。

ジャックはファアラの生真面目さに微笑ましい気持ちになる。

そんなに肩肘張らなくなつていいのに。

「今のままでいいだろう？」

明るく言えば、目の前の少女は口をぽかーんと開けて動きを止めた。

「俺が守りたいって思っている、今のファアラのままで充分だよ」

笑顔で言えば、動きを止めたままの彼女はそのまま固まっている。

「もう、『光の女神』代行者じゃないんだからティアラになにもかも任せて放っておくつていう選択肢もあるのに、それに気がつきもしない。そういう性格のファアラだから、それでいいんだよ」

きつと、もう自分は関係ないと放り出すような人物なら、助けたいとも招きに応じようとも思いもしなかつただろう。

「きちんと感謝ができて、お礼が言える。そういう基本的なところが真つ直ぐだからさ、ファーストは」

少し姿勢を後ろに倒して天を見上げる。

天上には星が煌いているように見える。

あれも虫の反射なんだろうけど、そうとは見えない。

「今のままでいいのですか？」

戸惑ったような質問にジャックは微笑み返す。

「ああ」

短い肯定の返事に、ファーストは照れたように頬に手をあてて口元を緩める。

「そういえば、この辺り 大地から歌声みたいなものが聞こえないか？」

ジャックは気になっていたことをフアラに尋ねてみる。

彼女は困ったように微笑むと、小首を傾げ、周囲をゆったりと見渡して口を開いた。

「代行者とは、大地や風、水や森や林、そういう世界のいろいろな声を聞くことができるもののことを言うのです」

「いろいろなものの声？」

「ええ。我々は、巨大ななにかの上で暮している そのなにかが、我々に声を掛けています。と言った代行者も居たそうです」

「なにかの上で」

ジャックは声を詰まらせる。

「そのなにかは 己の体の上で暮らす我々に秩序を求める。その声を伝える役目がわたくしたち代行者だと」

「秩序 か。きつと、こういう感覚に近いものって、説明が難しいから『神』とか『大臣』とか『魔師』という言葉が出てきたのかな」

天上を見上げながら息を吐く。

「たぶん、そうかもしれません」

フアラが奇妙に淡々としているのは、声を聞くものとしての立場を幼い頃から熟知しているからだろうか？ 自分も幼い頃から、淡々としているとか、冷静だとか、なにを考えているのかわからないとか言われてきたが、彼女よりは感情表現は豊かだと思う。

八歳になると、帝都で過ごす風習が領主嫡男にはある。

子供の頃に皇族と過ごし、面識を得ると言うのが目的だというが、子供の頃に鼻っ柱を叩き折り、皇族との立場の違いを体に叩き込むのが目的だ。まあ、思い返せば結構酷い目に合った。

双子の皇子のギユンダーとレナード。ちょうど彼らはジャックのひとつ上に当たる。

そのため、二人とその近習には服従を強いられた。

ただただ黙って、付き従うお人形。そういう立場を。まあ、こっそりと仕返しはしたが、頭を下げるのが当たり前、服従するのが当たり前前、そういう生活は思考を磨耗させる。

「ファースは小さい頃から、そんなふうに 代行者のあるべき姿つてのを体現していたのか？」

ジャックの質問にファースは瞳を瞬かせる。

「仰っている意味がよくわかりません」

「もう、ファースは代行者じゃないんだぜ？」

ファースの手のひらが止まる。

彼女の膝の上の小さな寝息が妙に大きく聞こえる。

周囲の景色は木々が増え、草原があり、緑の色が濃くなっていた。その緑を渡る風がさわさわと音を立てる。

「何度も繰り返していただかなくても、わかっています。きっと、あなたには『つもり』でしかないと思われていても

ファースは小さく言った後、口元を押さえた。

「申し訳ありません。失礼でしたね」

しょんぼりと俯く姿がまるで小動物のようだ。

「別に、俺の言い方が腹が立ったなら、そう素直に言えばいいし、今くらいの嫌味なんて可愛いもんだ」

「 やっぱり、嫌味に聞こえたんですね」

ますますしょんぼりする。

その姿が可笑しい。

ジャックは右手を伸ばして、彼女の短くなった髪の毛に手を突っ込む。

緩く波を描く髪の毛は、乾いた風のせいか綺麗に梳ることはできず、途中で止まる。

そのことに濃い茶色の瞳を瞬かせてファースは動きを止めた。

驚きで動きが止まっている。

金の髪は灰色に、金の瞳は濃い茶色に変わっていた。

「本心だったら、なおさら可愛い。ファアラは、もっと考えなしに思ったことを口にする練習をしたほうがいいな」

止まった手をまた動かし、ゆっくりと彼女の頭を撫でる。

まるで大きな猫や犬の毛を撫でるように。

膝の上の少女に自分がしていたことをされている。そのことに気がついたのか、ファアラは目元を紅くしている。

「そのままでもいいし、思ったことは口にしていいんだ」  
繰り返す紡ぐ。

彼女の心の奥底にきちんと届くように。

二度と、あの塔から落ちた時のような感情は抱いて欲しくない。

「あ、あの わたくしの、生活は朝から楔をして、祈祷して、学問を学び、奉仕をし、医術を学ぶ という、感じでした」

止めることもなく、ファアラはぼそぼそと先程の質問に答えられる。

はにかんだ口元は頭を撫でられるのが嫌だとは欠片かけらも示していない。むしろ、喜んでるように見える。

「その ジャックは？」

ファアラの質問に手が止まる。

そしてひとつ瞬き。

「俺？」

「はい。ジャックは、小さい頃はどんなふうにごっこごっこに遊あそんでいたんですか？」

その質問にジャックは口元を緩める。

ファアラが自分に興味を持っている。

それが、とてもつもなく嬉しい。

好意の伴わない相手の素性など、誰しも興味などもなたないだろう。

相手の過去に興味を抱く。それは初步の好意の現われだと思う。

「小さい頃は、ずっと工場で育ったかな。木屑で遊んだり、掃除したり、道具磨いたり、必要な木材を森に行ったり、木に登ったり。まあ、勉強とかもあつたけど。大抵はじっさまたちにこき使われてた」

「そうなんですか　それでお掃除が上手なんですね」

そこはそこまで感心するところじゃない気がする。

「後は料理とか洗濯も得意だぜ！」

威張るところじゃない気もするが気にしない。

「まあ、じゃあ　わたくしの先生になつていただかなくてはいいけませんわね」

目をまん丸にして生真面目に言う。

「最初は、お役に立たないと思いますが、懸命に覚えますから」

両の拳を握り締めて、ファアラは気合を入れて言う。

「だからさ、そんな気を張り詰めなくてもいいからさ」

止まっていた手をぽんぽんとあたまを撫でるように叩く。やさしく。

「いえ、わたくしらしくていいと仰つていただきましたから。わたくし、やるべきことを懸命にやるのが特技なんです」

その気負った言葉に吹き出す。

「まあ、笑わないで下さい。ジュリアだってユージェスだって、わたくしが一所懸命なのをいつも褒めてくれますのよ」

小さな唇を尖らせて、不満そうなファアラの表情が可愛くて、ジヤックは瞳を細めた。

あまりにもじつと見つめるジャックに戸惑って、ファアラは膝の上の少女に瞳を移す。

「マーシアは『水の国』と呼ばれています。『水の夫神』<sup>ウオレス</sup>『水の妻神』<sup>ウイリ</sup>は夫婦神として、代々一人の代行者が身に宿していたそうです。ですが、時には二人の代行者が現れることもあったそうです」

「一柱一人じゃないのか？」

ジャックは撫でていた手を引つ込めて尋ねる。

「なんだか手が淋しい。」

「はい。『水の夫神』<sup>ウオレス</sup>『水の妻神』<sup>ウイリア</sup>は大変仲の良い夫婦神とも、表裏一体の水神とも言われているのです。ですので、一人の代行者で済む時代もあれば、『水の妻神』<sup>ウイリア</sup>が共住まいを許さない時代もあるそうです」

「それ、夫婦喧嘩してるんじゃないか？」

ジャックの呆れ声にファアラは苦笑を零す。

「そうかもしれないわね」

すべてのものから解放されたためか、ファアラの雰囲気はやわらかい。

微笑にも今までのような別の感情が混じることが減り、付随するとしても驚きとか戸惑いとかそういう感情が多い。それは彼女にとつて、とてもいい違いだと思う。

「マーシアが『水の国』と呼ばれるのは、トラガみたいに生まれる時に水が迸ったのか？」

尋ねれば、生真面目な彼女は視線を合わせてくる。

その真っ直ぐな視線に微笑み返してみれば、彼女は頬を朱に染めて視線をつと逸らす。が、またすぐに合わせてきた。

「マーシアは本当に水の国なのです。地表に現れているわけではありませんが、地下水脈が豊富で、地下水道の整備も整っています。」

首都の中央を流れる大河マシエリアは水質も綺麗で穏やかで、水に困るという言葉のない国です」

「確かに、それは『水の国』ってというのが相応しいな」

「沐浴の文化が発展していて、水蒸気風呂が主流だそうです」

「へー」

水蒸気風呂という言葉にジャックは関心を持つ。

ブレースタ領では水拭はしても、頻繁に湯で汚れを流したりはしなかった。

「公共で入れるところもあるそうですから、いつかご案内しますね」  
小首を傾げてファアラが笑う。

「ああ。楽しみにしてる」

先程から感じる気配に振り返って見れば、両の手にカップを持ったティアアラが立っていた。

「お姉さま。飲み物をいただいてきましたわ。あと」

彼女の後ろには若い夫婦がいた。ファアラの膝から娘を受け取る  
と恐縮したように礼を言っ去っていきこうとする。

その様子にファアラは「こちらこそ、遊んでもらえて楽しかったですわ。また遊んでくれるように頼んでもらえるかしら？」と微笑  
んでいた。その言葉にも若夫婦はさらに恐縮していた。

ファアラの立場は微妙だ。

王族でもなければ、すでに巫女姫でもない。

だが、他の住民たちの間に入ることもできない。

しかし、そのことは気にしなくてもいいだろう。ファアラはジャックと一緒に来るのだから。確とした返答をもらったわけではないが、彼女の中に他の選択肢は今のところ存在しない。

頼ることができるのはジャックだけだと思う。

(きつと、そう思いたいだけだよな、俺)

ジャックは自分の甘い蜂蜜色の髪の毛を掻き上げた。

「はい、お姉さま。ユフ酒を温めてもらったの」

「ありがとう」

受け取るファアラの隣にティアアラは座る。

湯気の立つ飲み物を二人は仲良く飲む。

夜になると冷える。ジャックは二人に挨拶をしてその場を立つ。

そろそろ宿直とのいを交代する時間だ。

ジャックは、去り際にファアラの頭をやさしく撫でた。

トラガから四日。予定よりも一日早い。が、国境沿いの砦が見えてきた。

住民たちは、思わず歓声をあげる。

その砦の出入り口付近には騎士の一団がいる。国境警備にでも赴くのだろうか。

ジャックはそれ程意識をせずに隣のファアラを見やると、彼女は両の手で口元を押さえて、顔面を蒼白にしていた。

ティアラも同じように、驚きの表情を浮かべ顔を青くしている。

「二人とも、どうした？」

「お兄さま」

ティアラの呟きに、ジャックは砦の前で陣を張るように待ち構えている一団を再び見る。先程は砦が目に入ったためあまり気にしてもしなかったが、その一団は白馬に乗った男を先頭に、ジャックたちの一行が進むのを遮るようにしていた。

ジャックは無言で彼女たちの前に進み出る。

「悪い、ティアラ。俺が守るのはファアラだから」

短く断りの言葉を言う。

「大丈夫。お姉さまを守るためなら、わたしのことは放っておいて王族としてやらなくてはいけないことがあるのもわかっているから」  
ティアラは硬い声で返し、ファアラの肩を落ち着かせるように抱く。

ジャックたちが止まっている間に、白馬の王子様の一団はゆっくりとした速度で近付いてきた。

出迎えかと歓声をあげていた住民たちも、重々しい雰囲気は黙りこくる。

奇妙な沈黙が周囲には満ちていた。

そんな中、白馬の男が進み出る。

「お待ちしていましたよ、元『光の女神』殿、そして元『青い魔師』殿」

見た目には爽やかな笑顔が胡散臭い。

「ギャリガン皇太子殿下ですね」

ジャックは胡散臭い笑顔に対抗するかのように、同じような胡散臭い笑顔を浮かべて彼に近付く。

皇太子殿下とは言ったが、彼だって『元』だ。これが嫌味だといふくらいは気がつくだろう。

「お前は、誰だ」

短い誰何の声に、彼が自分と喋りたくもないというのは伝わってくる。

「わたくしは、地上にあるシャルダ帝国ブレースタ領の領主の嫡男、ジャクソン・ドウリー・ブレースタと申します。ファアラ姫に見出されて『地の大臣』として仲間と共に参りました。よろしくお願い致します」

敢えて地位だけを誇張して言う。

すると、目の前の男は一瞬だけ目を見張って、そして口元を歪めた。罵るような笑みの形で。

比較的背の高いジャックよりも頭半分高い男は、妹と同じ灰色の髪をしていた。ただ、妹のような青味がかった銀の混じるような灰色ではなく、白に近い灰色だ。

白馬に合わせたのか、白を基調とした衣服。飾り帯などには金糸が使われている。

白なんて、汚れやすい。

思わず所帯染みたことを考えてしまう。

「ファアラ、ティアラ、お前たち二人はすぐにマーシア王城に赴くことになっている。準備をしろ」

ジャックを無視して、ギャリガンは話を進めようとする。

すっと、尊大な態度で命令を下す男の正面に回る。

「申し訳ありませんが、ファアラ姫はわたくしたちの主です。勝手に連れて行かれては困ります」

まるで駄々っ子を嗜めるような口調でそう言えば、ギヤリガンは鋭い眼光で睨みつけてきた。だが、工場で敵ついおっちゃん連中で慣れているジャックにはそんな視線など鈍なまらに映る。

「お前には関係がないだろう。これは王族の問題だ」

「それこそ、関係がないことです。すでにトラガは滅亡した。王族は存在しない」

きっぱりと断言して微笑めば、目の前の男は片眉を上げる。

「不遜な」

「貴方の代わりに、トラガ国が大河に流される姿をつぶさに見てきましたよ。神々は最後までファアラ姫を気に病んでくれ、彼女に奇跡を起こしてくれました」

奇跡だなんて、まったく信じていないが、あの高さから落ちたファアラが生きていたのは充分に奇跡の領域だ。

「トラガ国が」

「大河に」

ぼそぼそと、男の後ろの一団から声が漏れる。

「国が滅亡した以上、巫女姫としてのファアラの役目も終わりました。彼女の身は、今はわたくしとブレースタ領が預かっております。勝手を申されては困ります」

ギヤリガンは意図的にジャックを無視して、ファアラとティアラに話しかける。

「お前たちは、今度はマーシアの巫女姫になるのだ」

なるのだ。と言うがそんな簡単になれるものではないだろう。

「連れて行くぞ」

短い命令に、後ろの一団が動こうとしたが、いつの間にも移動したのか、ジャックと共に地底国に来た男たちがその動きを抑える。

「ただ、来いと仰られても事情がわかりませんわ。お兄さま、説明をして頂けないかしら？ 別にお兄さまじゃなくてもいいのよ。あ

なた方が動くということとは、お父さまからの命が下ったということでしょう？ シエニア伯爵」

ティアアラが進み出て、ギャリガンの左隣に立つ老齢の男性に話しかける。

シエニア伯爵と呼ばれた男は、ティアアラの真っ直ぐな瞳を見つめ返して、そして首を小さく左右に振った。

「我が国の住民の中に『水の夫神』<sup>ウォレス</sup> 『水の妻神』<sup>ワイリア</sup> の代行者がいれば、マーシア国王はトラガ国住民をすべて国民待遇で受け入れると

」

それは必死になる。

ジャックは思わず頷きそうになるが、いや待てよ、とギャリガンを見やった。

「先に入国した者の中にはいなかったのですか？」

「ギャリガンさまが、『水の夫神』<sup>ウォレス</sup> 代行者として適性を認められたのですが、『水の妻神』<sup>ワイリア</sup> 代行者が見つからず

」

「お兄さまが？」

シエニア伯爵は地を見つめて、「ギャリガンさまだけではなく、陛下にも適性があるとのことですよ」と呟く。

「お父さまにも？」

誰でもいいのか？

そう思ったが、さすがに口には出せない。

「ですが、前の代行者は二柱の代行者だとお聞きしています。それなのになぜ、お兄さまとお父さまに適性が？」

ティアアラの質問は兄ではなく、シエニア伯爵に向けられたものだった。

「さあ その辺りの事情は我々には

」

どうにかして、『水の妻神』<sup>ウォリア</sup> 代行者をトラガ国民から出したい。

それならば、元『光の女神』<sup>ソレリア</sup> 代行者と元『青い魔師』<sup>サイア</sup> 代行者なら他の者よりも適性があるはずだということか

背後にいたファアラがジャックの袖を掴んでくっついてくる。

どうした？　と思つて背後を見やると、ファアラが怯えるようにジャックの腕に縋り付いてくる。こんな怯えた彼女は初めて見る。

顔面は蒼白というよりも真っ白になっている。血の気が感じられない。ジャックは伸びてきていたギャリガンの手を避けるように、ファアラを背後に隠した。

「嫌がつているだろう」

冷たく言えば、ギャリガンは鼻で笑う。

「余と来い」

しつこく馬上から伸びてくる手を叩き落した。

「無礼な！」

今にも剣の柄に手をやりそうな雰囲気、ジャックは溜息を零す。

「躰がなつてないな」

「なにを！」

「嫌がつてる女の子を無理矢理連れ去ろうとしている男に、躰ができてるとは世間一般では言わないだろ？」

軽口を言えば、ギャリガンは顔を真っ赤にさせる。

乗せられやすい。

こんなに感情が表に出る男が皇太子だったとは　呆れてもの

も言えない。

尊大な態度は、端はたから見れば堂々としても見える。

自己中心的な態度は、風格に見える時もある。

そういう理由でこの皇太子が自由に生きているのであれば、トラガ国王にも期待は持てない。

溜息を飲み込んだ瞬間、落ち着いた声が場に響く。

「ティアラ姫、ファアラ姫、そしてジャクソン殿。お手数ですが、我々と共にマールシア首都ヤウエクへいらして頂けませんか？」

「マレディバル侯爵　」

ティアアラが瞳を瞬かせる。

後ろから現れた男にその場が固まる。

「侯爵　なせ」

シエニア伯爵が息を呑む。

「陛下が、姫君方の到着を今かと待ち望んでいらつしやいます。命じられたシエニア伯爵以外に、皇太子殿下が勝手にお出迎えに参じたようですが、そのためにファーラ姫がいらつしやらないようでは困ると仰せになられましたね」

穏やかな声だが、内容はギャリガンに対する当てこすりだ。

「姫君方、我々と共に来て頂きます。急ぎますので衣装の換えは一泊目の宿でお願いをします。ジャクソン殿は馬でよろしいですか？」

有無を言わせない口調にジャックはファーラを見やる。

「急ぐのでしたら、わたくしも馬で参ります」

短い返答にジャックはファーラを見ると、彼女はまるで仮面のよ  
うな硬い顔をしている。

その彼女が、見上げて一瞬縋るように瞳を揺らす。

「ジャック　一緒にいて」

小さな声にジャックは震えるファーラの肩を抱く。幼い子供が父親に縋りつくようにファーラはジャックに縋りついてきた。腕に額を押し付けてくる。

「わかった。君は俺が守る」

その言葉にファーラは顔を上げて、泣きそつなのを堪えるかのよ  
うに微笑んだ。

その笑顔にほっとする。

「マレディバル侯爵。ファーラ姫とティアアラ姫の付き人として三人を同行させてください。わたくしと、わたくしの部下は馬で参ります。部下は総勢六名となります」

嫌な視線がして、ジャックが顔を上げるとまるで蛇が獲物を狙っているかのような瞳とかち合う。

ギヤリガンの視線をジャックは気にもせず無視をする。

ああいう自尊心の高い人物に一番効果的な嫌がらせは、存在の無視だ。

小さな頃からちやほやされていた者は興味を向けられるのが日常で、無関心が一番堪える。

「ティアラ、なるべくファアラにべつたりくつついていてくれ。ジュリアとアルジーさんにも二人に着いてくれるように頼んでくる。後はユージェスさんだな」

「ジャック殿、私は住民たちの行き先を確認してから参りたいと思います」

異様な雰囲気気が気が付いたユージェスが隊列の後ろから駆け寄ってきた。その彼の言葉にジャックは顔を上げる。

ファアラとティアラのことだ住民たちのことが頭から抜けていた。

「じゃあ、デンホルムとチャドも残そう。ユージェスさん、二人をこき使ってかまいませんので　なるべく早く合流してください」

「わかっております」

小さな声で話し合っているとシェニア伯爵が「では、姫君方。馬車の準備ができております」と促してきた。

背後から出てきた感情の浮かばない侍女たちに引き連れられて、ファアラとティアラが歩き出す。

ファアラが不安げに振り返る。

その表情、蛇のような男の視線、侯爵伯爵と呼ばれる男たち。嫌な予感にジャックは先手を打つことにする。

「そんなに、心配しなくてもいいよ、奥さん」

ジャックはファアラの腕を引き寄せて、腕の中に抱き込んだ。

「え？」

驚くファアラの耳元にジャックは「合わせて」と囁く。

その囁きに頷いてファアラの両手が背中に回る。

細い体を抱き返して、そして顎を持ち上げる。

「!?!」

吃驚して瞳を真ん丸にしているファアラの顔が近づく。

ごめん、ファアラ。

心の中でそう謝罪しながら、ジャックは薄い薄紅色の唇につつと自分の唇を重ねた。

あとで、ティアアラに殴られても仕方がないな。

そう思いつつもいったん唇を離し、耳元に「目、閉じて」と囁いて、再び従順な彼女の唇に今度は先程よりも深く、唇を合わせた。

背後から聞こえる仲間の冷やかしの口笛は聞かなかったことにした。

29・幕間 少女の眩き(前書き)

無理矢理な描写があります。苦手な方はご注意ください。

## 29：幕間 少女の眩き

自我というものが生まれた頃から、わたくしは代行者という立場だった。

求められる行動、考え、振る舞い。それが自然で、当たり前のこととで、大地の声を聞き、宙そらの気配を知り、この国の生き方を代弁するのが日常のことだった。

それが変わったのは彼を迎えに行ってから。

当たり前だと、日常だと思っていたことが普通ではないと知り、彼は新しい道をいつも指し示してくれる。

わたくしは、代行者でしかなかった。

ファアラという女はただの抜け殻で、必要とされるのは代行者であるという現実だけだと思っていた。

ならば、国がなくなるのであれば自分も不必要になる。

そう思うのは自然なことと、いなくなった後に誰かが泣くとか嘆くとか考えたこともなかった。終わるのだと　　それだけが心を占めていた。

十五歳の明けの日。

祝宴で酔いの回った皇太子が部屋に入り込んできた。

酒臭い息でどうして自分を『青い魔師』<sup>サイア</sup>に選ばなかったのかを詰り、わたくしを本当の意味で妻にすれば望みが叶うかもしれないなどと息巻いて、寝台に突き飛ばされた。

その時の感情は恐怖しかなかった。

押し掛かれ、反抗する体を力づくで押さえ込まれ、悲鳴は引き攣り、服を肌蹴られ、臭い口が皮膚を辿る。

冷たい手のひらがまるで蛇のように体を這う。

今までで一番の苦行だった。

選んだのはわたくしではない。

わたくしのできないことを詰め寄られても困る。

第一、そのような自分を選ばないのがおかしいと考えられる思考能力だからこそ、代行者として選ばれなかったのだと自覚できないのか。

口内を這い回る虫のような感触に吐き気が込み上げる。

あまりの気持ち悪さに嘔み付くと、相手が唾を寝台に吐き出した。自分の口の中にも気色の悪い液体が溢れたが、虫が這い回るよりもいくらか耐えられる。

「お姉さま!!!」

ティアラとユージェスが扉を押し開けて入って来た時には下半身に手が伸びる寸前だった。羞恥よりも恐怖に苛まれたわたくしは、二人に抱き起こされると同時に吐き出して気を失ってしまった。

それ以後、ティアラはわたくしの行動に過敏になり、そして部屋は二階に移され、皇太子も離宮へ移った。

祭典以外では会うこともない生活が一年ほど続き、最後まで残り

彼は、まるで言うことを聞かずに抱かれなかったわたくしへ

の仕返しをするかのように船を壊し、食料や必要な物資をすべて奪って逃げていった。

『<sup>ソレア</sup>光の女神』の持てる力をすべて注ぎ込んで、上に感じる微かな気配から『<sup>スイサ</sup>地の大臣』を探す旅に出た。

出会った彼は大地の名に相応しい、穏やかな人だった。きちんと話を聞いてくれる人だった。

わたくしに『<sup>ソレア</sup>光の女神』を、求めない人だった。

ジャックは馬上で自分を心の中で罵倒していた。

（莫迦か、俺は！！！！）

一応、彼女のためだと思っではいる。

だが、あの場面ですることではないだろう。とも、思う。

不意打ちですることではない。

嫌な予感がした。あの場で自分とファアラの関係を元『光の女神』と元『地の大臣』のままにしていたら、きつと引き剥がされて会話すらできなくされていただろう。

その場で思い浮かぶ一番親密な関係が夫婦であり、恋人同士だった。

呆然としながらも合わせてくれたファアラが、回してくれた細い腕。

朱に染まった頬。

可愛かったけど。

（莫迦か、俺は！！！！）

再び思う。

その時、馬が小さく嘶いた。

まるで、しっかり手綱を握っている若造が！ というような嘶きに思わず我に返る。

「ありがと」

ジャックは名も知らぬ馬の首筋を叩いて礼を言う。

やったことは元には戻せない。

くちづけをする以前のように彼女を見れない。

否、見て欲しくない。

戦友とか居場所とか、そんな言葉で括り切ることできない。

彼女を女主人としてだけ扱うことなどできない。

一緒に戦いたい。

ただいまと言ったらお帰りと言って欲しい。

自分の全霊全身を掛けて守りたい。

大事にしたい。

(こういう気持ちって、端的に表すなら好意だ。ファアラが好きなんだ、俺)

その結論が出て、ジャックは口角を上げる。

きつと、彼女は俺のことをそんなふうには見ていない。

わかっているが、急ぐ気はない。

ひよんなことからだが、外堀は既に埋まっている。

彼女の前にある選択肢は多くはない。

無理矢理選ばすこともできるだろうが、そんなことはしたくないし、するつもりもない。

(まずは謝って、それから仕切り直した)

先行きはまるで見えないが、ジャックはそう結論付けるとやや遅れていた馬速を上げた。

夜遅くに街に着く。

一泊目の宿で湯浴みをし、衣装を着替えたファアラとティアラは仲の良い貴族の姉妹に見えた。ジュリアとアルジの二人も着替え

ていて、古参の女官のような威風堂々振りだ。

ジャックは、周囲の者にファアラの未来の夫と認識されたためか部屋にもすんなりと通してもらえた。

ただの部下という立場では、引き離されて会うこともままならなかっただろう。

「悪いけど、ファアラと二人にしてもらえるかな？」

ファアラをがっちりと守ろうとしている三人に断りを入れる。

いくら、後々のためとはいえ彼女の唇を強引に奪ったことに謝罪もしたいし、きちんと説明もしておきたい。そして想いを告げたい。三人は顔を見合わせると「お姉さまを泣かしたら承知しないから！！」と代表してティアラが脅してくる。その言葉に真摯に頷けば、肩を竦めて彼女たちは隣室に移動してくれた。

三人が移動するのをファアラは静かに見つめている。

ジャックと残されるのを嫌がる素振りはない。

そのことに安堵する。

彼女たちの部屋は、寝室が二つ、居間が一つという造りの客室だ。急遽借りたのだろう。王族が止まるにしては質素だ。だが、トラ

ガ国は既がない。

豪華過ぎず、質素過ぎずというこの範囲が妥当なところなのだろう。

その木目調で質素とはいえ落ち着く居間の長椅子に座り、立ったままのファアラに隣に座るように促す。

「怖いです」

座ると同時にファアラは俯いて言う。

きちんと揃えた両の手のひらはきつく握られていて白くなっている。

そして、小刻みに震えていた。

「皇太子のあの瞳で見つめられると、体が震えて動かなくなっ、気持ちが悪くなるんです」

ファアラが一所懸命に感情を説明しようとしてくれる。

震える体。

揺れる声。

泣きそうな瞳。

忌々しい過去のことを思い出して、辛いのだろう。

相当嫌われているな、あの莫迦皇太子。

だが、俺の本来の目的はそこじゃない。

「あのさ、俺とのことは？ 嫌じゃなかったか？」

隣で俯いていたファアラは、顔を上げるとふるふる力なく首を左右に振る。

「」

そのことに面白くない気分になり、黙り込む。

自分とのくちづけよりも、ギヤリガンとのやり取りのが不快なのか。あんな男のことが彼女の脳裏に焼きついて離れないなど、なんだか腹立たしい。

嫌な記憶とはいえ、それが今の彼女を占めている。

悔しい。

「じゃあ、上塗りしてやる」

「え？」

「あの莫迦皇太子がやったことを、俺が上塗りする」

断言すると共に、薄紅色の彼女の唇をやさしく塞ぐ。

やわらかい。

軽く触れただけで離れると、目の前のファアラは瞳を丸めていた。その様子が可愛くて、思わず頬にもくちづけける。

呆然としているファアラの袷あはせを割って、手のひらを素肌に滑らせる。

トラガ国の衣装は懐を割りやす過ぎる。後でジュリアさんかアルジーさんに頼んで、ファアラの衣装には結び紐を増やしてもらおう。滑り込ませた衣装の中もやわらかい。

すべらかで円やかなしっとりとした肌。右の手のひらにすっぽりと収まる乳房に興奮を覚える。

「え　　？　あの？」

戸惑いの言葉が彼女の口から零れる。

動きを止めて瞳を真っ直ぐに見つめる。

ふっと微笑んで「嫌か？」と　問い掛ければ、彼女は顔を真っ赤にさせるが拒絶の気配はない。そのことに嬉しくなる。

「ファーラ」

耳元で名前を呼んで、顔を上げた彼女の唇を再び覆う。やわらかな唇を食みながら親指で突起を撫で、やさしく揉みしだく。

開かれた唇を割って舌を差し込むと、さすがに体が強張った。それを感じて、引き寄せていた体を離して手のひらも服の中から抜く。肌蹴た衿を直して頬を撫でる。

まだ、ファーラは呆然としたまま瞳を見開いたままだ。

「謝らないからな」

「え？」

「それに、上塗りするなんて言い訳だ。俺　君のことが好きみたいだ」

大きく開かれた瞳を瞬かせて、ファーラは見上げてくる。

言葉の意味を理解していないようだ。

これはまずい。

「好きだよ、ファーラ」

みたいだなんていい加減な言い方じゃ駄目だ。

そう思っただけで再度、耳元に唇を寄せて囁く。

「君が好きだ。だから、今のは、俺にとっては役得」

「冗談めかせて言えば、ファーラはぼかんと口を開いたまま見つめてくる。」

「もう、俺の顔しか浮かばないだろう？」

確認をするように問えば、ファーラは意を決したかのように硬い表情のまま自分の衿を開いた。

真つ白な肌に視線が釘付けになる。

細く薄い体。けれどやわらかな膨らみは円やかで、両の丘の突起は小さく薄紅色の果実のようだ。ごくりと唾を飲み込む。

「まだ、あの顔が残っているんです 胸を無理矢理吸われて

真つ赤な顔をしてファアラは言葉を紡ぐ。

「わかった」

ゆっくりと、彼女の体を長椅子に倒す。白い乳房が揺れる様に体の中央が危ないことになっているが、理性を総動員してやさしい笑顔を維持する。

「ファアラ」

名前を呼んで、唇を軽く含む。

そして首筋、鎖骨、心の臓の上、乳房の間と、下に降り 右  
側の薄紅色の果実を口に含む。

「っん」

小さな吐息が腰に来る。

やばい。

可愛い。

綺麗だ。

このまま襲いたい。

そういう思いを懸命に飲み込む。

両の乳房を堪能してから顔を上げてもう一度、唇を合わせる。

「他は？」

なるべく余裕を漂わせて尋ねると、ファアラは首をふるふると左右に振った。

よかった。下半身には触れていないらしい。さすがにそこまで触れれば、理性を保てる自信はまったくもってない。

「あ　ありがとう、ございます」

礼を言われるのは変な気分だが、生真面目な彼女の礼にジャックは微笑を浮かべる。

「順番がおかしくなってるな。本当なら告白して承諾の返事をもらって、婚約して結婚してからこういうことになるのに」

「そうなんですか？」

「そうなんだよ」

真つ赤な顔のファアラを抱き起こして裕を直す。

頬にかかった髪の毛を撫でて耳元に除ける。

そのまま紅潮している頬を撫でる。旅の間もいろいろとみんなで協力して食べさせてきたから、ふっくらとしてきた頬は瑞々しくてずっと触っていたくなる。

「返事はゆっくり待つから」

額に唇を寄せて囁く。

「今のが嫌じゃなかったら　ファアラが、俺以外の男に今みたいなことをされたら嫌だと思っただったら、教えてくれ」

そのまま細い体を抱き寄せる。

拒否の気配はないが、ファアラがただ呆然としているということも考えられる。

腕の中にすっぽりと入る体を抱え込むようにする。

肉のあまり載っていない背中を撫でる。

「　はい」

素直な返事にジャックはわずかに肩を竦める。

「悪い。ファアラ、もうちょっと役得させてくれ」

「え？」

温かな体を抱き締めて、その肩に顔を埋める。

やさしいぬくもりに心が捕らえられる。

欲しい。

心も体も、全部が欲しい。

ファアラの片隅にでも別の男がいるのが許せない。それくらい、

好きだ。

好きという感情は嫉妬心や独占欲と紙一重だというが、それを初めて身を持って知った。

離したくない。

きつく抱き締めて、必死に本能と戦う。

「ジャック」

不意に名前を呼ばれる。気がつくのと、彼女の細い腕が背中に回された。

そのことに息を呑む。

まさか？

自分に都合の良い解釈をしそうになる。

「あ　あの、わたくし、わからないんです」

腕の中のファーストが身動きする。

「なにが？」

「その、好き　という気持ちか　」

懸命に彼女が感情を説明しようとしているのがわかる。

「うん」

だから、ゆっくりと促す。

「でも、ジャックにこういふふう抱きしめられるのは嫌じゃありません」

「うん」

「うん」

「くちづけも、皇太子殿下との時とは違って、嫌じゃありませんでした」

「うん。比較対照が莫迦皇太子なのが腑に落ちないけど、でもいいよ」

「だけど、わからないんです　この気持ちか、あなたが言う『

好き』という気持ちと一緒になのか　」

こんなふう抱き返してくれるのに、それでも生真面目に考えてくれるのがなんだか嬉しい。

悲鳴も上げないし、拒否も拒絶もしない。顔を赤くするけれど、

抵抗もしない。

体のが素直に受け入れてくれているのを感じるが、それを口にするのは頭で考えようとしてくれているファアラを止めてしまいそうで気が引ける。

「じゃあ、一緒に探せばいい」

「え？」

「そんなに難しく考えなくてもいいよ。もっとファアラは感覚で動けばいい。俺に触れられるのが嫌になったらそう言えばいい。俺は君に拒絶されたとしても、君を本当に守ってくれる男が現れない限り、ファアラを守ることは止めないから。安心してくれ」

「え」

「まだ、あの莫迦皇太子の顔が浮かぶか？」

悪戯心で尋ねれば、ファアラは顔を真っ赤にさせた。

耳まで真っ赤だ。

ふるふると顔を横に振る。

「綺麗に、上塗りされています。もう、ジャックの顔しか  
浮  
かばないです」

消え入りそうな声についつい笑いが零れる。

無理矢理くちづけたことを謝ろうと思っていたのに、もっと申し訳ないことをしてしまったような気がする。だが、これで彼女の中の記憶が上塗りされたのならかまわない。

「そっか　　これから本気で口説くから、覚悟しておけよ」

ジャックは冗談口調を心掛けながら、宣戦布告をした。

二日目の早朝、陽が昇る前に宿を出る。

だが、陽ではなく本当は虫なのだが

ジャックは眠い目を擦って、そして首を振る。

「あの、こいつの名前ってわかりますか？」

馬を引いてきた兵に尋ねると「いえ、ありません」とにべもない返事だ。

じゃあ、自分で勝手につけるか。と、思う。

馬上での暇潰しにはなるだろう。

遠目でファアラに近付こうとする皇太子に気が付くが、それをテイアラとアルジーが邪魔をし、ジュリアが馬車の中に連れて行く。その様子を見てほつと息を吐く。

そして、馬車に乗る瞬間の彼女と目が合う。

片手を挙げて微笑めばファアラは頬を染めて、そして微笑んで手を振り返してくれた。

おっしゃ！

心の中で拳を握る。

生真面目な彼女のことだ。手を振られたから振り返した。そういうところだろう。だが、嫌悪を抱く相手にはいくらなんでもしないはずだ。

ジャックは馬の首筋を優しく叩いて口角を上げた。

朝早くから夜遅くまで、馬車とそれを守る一団は速度を落とすことなく進める。途中、馬を何度か換えながら旅程は進む。見事な赤毛だから『ユフ』と名付けた馬は、途中の宿で別れることとなった。せつかく意思の疎通ができるようになったのに、残念だ。

次の馬は色付いた秋の小麦のような毛並みの馬だった。進むほど、大地の声が鮮明になる。

耳の中でラツパが吹き荒れているようだ。

なんという、祝福された大地なのだろう。

あらゆる植物が歌っている。

眩暈がしそうな程に。

「フアーラ、大丈夫か？」

休憩時間に、休む彼女たちの馬車に声をかける。

中から顔を出したフアーラとティアラは微苦笑を浮かべている。

「ええ。なんというか、頭の中でお祭り騒ぎをされているような違和感がありますか？」

「慣れるまで、数日はかかりそう。今まで、静か過ぎる大地の声に耳を傾けていたから、音量の調整が難しい感じだわ」

二人の例えに共感を覚える。

中州の国、トラガの大地の声が小さ過ぎたのだ。

それに合わせた感覚が、この大地の声たちを強く拾う。

「ジャツクは大丈夫ですか？」

フアーラが心配そうに見下ろしてくる。

「大丈夫だよ。まあ、お祭りしてる大通りの近くに感じるけど、陽気なだけで不快は感じない」

「ですが」

フアーラが言い淀む。

「どうした？」

促せば、彼女はふるふると首を振る。

そして困ったように微笑んだ。

「いえ、なんでもありません」

まるで、なにか抱え込んだような微苦笑。

それがなにもない態度か。

思わずむつとして、彼女の頬をやわらかく摘む。

「なんでもない態度じゃないだろう。ほら、言え」

「ふえっ!？」

いきなり頬を摘まれたファアラはおどおどと声をあげる。

「ええ? あ、あの、大地の奥底の水の流れというか、なんという

か、奥の奥の方が　　なんだか変な気がするんです」

「奥の奥?」

「で、でも気がするというだけなので、違つかもしれません」

ファアラは慌てて首を振る。

「ティアラは? 感じるか?」

尋ねればティアラは緩く首を左右に振る。

「　　いいえ。わかりません。なんとなく、微妙な揺れがあると

いえばあるような気はしますが、お姉さまが言ってくださらないけれ

ばわかりませんでした」

「そっか　　俺はまだ、そういう微妙な感覚がないんだよな」

ジャックはファアラの頬に添えた手はそのままに、もう片方の空

いた手を口元にやる。

長い間、巫女姫として育てられたファアラの感覚のが鋭いだろう。

これは覚えておくべきことかもしれない。

「あ、あの　　手を　　」

小さな抗議の声に顔を上げれば、ファアラが顔を真っ赤にしてい

る。俺はにつこりと笑って、彼女の頬をやさしく撫でてから手を離し

た。それと同時に出発の合図が鳴った。

ちよつとでも意識して欲しい。

まだ、彼女の中で好きとか恋とか愛とかいう言葉は染み込まない

だろう。

(まずは意識させるところからだよね)

頑張れ、俺！ と心の中で思っ、ジャックはファアラを振り返ってもう一度笑って見せた。

見上げる城門はとにかくでかい。

馬車から降りるファアラの手を取り、そのまま彼女の傍に控える。ファアラは面を覆う紗の布を優雅に翻して先に進む。ティアラも同じように。二人の姫君は凜として亡国の王女と巫女姫ということ忘れさせる。

その後ろの俺たちの後に、皇太子、そしてトラガ国の家臣たちが続く。

後ろから舌打ちや口汚い言葉が聞こえてくるが、聞こえない振りだ。

静まる城内を無言で歩を進める。

途中、検閲でもあるかと思っただ、そのまま先導する神官は無言で地下を目指す。

石畳は水で濡れ、ファアラやティアラの衣装の裾を濡らす。薄暗い通路。

まるで意思を持つかのように現れた淡い白金の光。

静かな色を湛えた光は徐々に数を増やし、ファアラとティアラの

周囲を纏わりつくように動く。

ファアラが静かに右手を上げる。

まるで、小鳥を自らの指に招くかのように人差し指を伸ばす。すると一粒の光がその指に留まる。

ファアラの瞳が和らぐ。

そして、光はまたふよふよと彼女の指から離れ、今度はティアラの周囲を回る。

ティアラが差し出した手のひらに光は留まらず、またふわりと浮かぶ。

「こちらです」

年老いた神官が指し示す円弧状の入り口を通り抜けると、そこには船が入りそうな程に大きな空洞があった。階段を一段下がった程度の浅さのため、船は停泊できないだろうが。

その大きな場所には陣が描かれている。文字と絵と呪い<sup>まじな</sup>だろうか。薄暗い中ではなにが描かれているかは判別できないが、なにか禍々しい雰囲気がある。

「お姉さま、私から行くわ」

ティアラが唇を噛み締めて歩を進める。

陣の中心まで進むと片膝をついて両の手のひらを胸の前で組み合わせた。

一滴、まるで落としたかのように水が持ち上がり、そのまま彼女の周囲を水が鳥籠のように取り囲む。

水の膜に包まれ、そして淡く光り、そして再び元に戻ったかのように静まる。

ティアラは瞑っていた瞳を明け、そして微苦笑を浮かべた。

「私は、お気に召さなかつたみたいですよわ」

小首を傾げて淋しく微笑む。

すると、彼女の周囲の水が引いた。

石畳が現れ、水のない道が導かれる。まるで、早く出て行けというかのよう。

コツコツと固い音をしてティアラはジャックたちの側に戻る。すると、水のない道はなくなり、また周囲は水に満たされた。

「次は、わたくしですね」

ファアラが周囲を見渡して微笑する。

ペールを振り払う。

すると、淡い光が彼女の周囲を取り囲んだ。

まるで小鳥が懐くかのように、ファアラの周囲をふわふわと漂う。

一歩、歩を進めるごとに水が踊る。

やさしい音色。

光の乱舞。

あたたかな空気。

禍々しい気配が薄れる。

ファアラが右の手のひらを差し出し、腕で半円を描く。

すると水の籠が出来、そして鳥籠のような形を描くと共に周囲に

水滴を散らして光と共に弾け飛ぶ。

まるで、ゆったりと舞うかのように水滴は光を反射させながら落

ちていく。

そして気が付くと、ファアラの髪の毛は 白金色になってい

た。

肩までの緩く弧を描く髪の毛が、水滴と光の乱舞に反応するかの

ようにふわりふわりと踊る。

「おお！」

歓声とどよめきが起こる。

「『水の妻神』には認めていただけたようです」

ファアラが疲れたように微笑む。

経験したからわかる。神と呼ばれる彼らが身に入るのは相当体力

を消耗する。

微笑みながら気丈にも立つファアラの周囲を、今度は青銀の光が

取り囲む。

目を見張っていると、その光はファアラにまるで反発したかのよ

うに霧散した。

眩い光が空洞に満ち、その場にいた全員目を眩ます。

絹を思い切り引つ張って引き千切ったかのような音が起き、そして、また暗闇に包まれる。

「あ  
」

ファアラが両膝を付く。

ジャックは彼女の側にまで近付いて、今にも崩れ落ちそうな体を支える。

「どうした？」

「『水の妻神』が、『水の夫神』を拒んだんです」

ファアラは目を伏せた。

「『水の妻神』が？」

「はい」

小さく頷く。

ジャックはファアラの膝裏に腕を差し込んで、そして抱き上げる。水に濡れた衣装のせいでいつもよりも重く感じるが、やはり軽い。ファアラはほつつと息を吐くとジャックの肩に頬を寄せる。

「『水の妻神』は私の婚約者を代行者として選びました。このまま『水の夫神』の代行者選びも続けますか？」

ジャックは神官に穏やかに問い掛ける。

今の時点で、この地下空洞まで来ているのは候補者は元皇太子だけ。素質があるといわれている元国王は来ていない。

ジャックは、霧散した光がまたいくつかの塊となつて周囲に現れるのに気がついた。

まるで苦しげに息を荒げるファアラを、いや、彼女の中の『水の妻神』を心配するかのような光。

その光のひとつがジャックの肩に止まる。

ジャックは心の中で語りかける。

(俺を選べ！)

語りかけるといふよりも命令に近い。

『水の妻神』はファアラを選んだ。

ファアラを選んだ以上、元皇太子や元国王を選べば、ファアラには触れられない。こんなふうにはファアラが身を任せる男は俺だけだから選べ、と。

光はふわりと浮き上がるとジャックの周囲をふよふよと漂い、そしてまた肩に止まった。

「ジャック、ごめんなさい」

ゆるりと目を開けてファアラが謝罪する。

その遠慮ばかりが先立つ態度にだいぶ慣れたけれど、やっぱり少し淋しい。

「ファアラ。俺の首に抱きつくようにできるか？」

やさしく言えばファアラは抵抗することなく細い腕を首に回してきた。

体勢を整えて薄い背中をやさしく撫でる。

「気分は？」

「悪くありませんが、どうしようもなく、眠い、です」

恥ずかしそうに言うのがなんだか可愛くて、笑みが零れる。

「落とさないから、寝ていいぞ」

冗談口調を心掛けて言えば「そんな心配は、していません」と耳元でやわらかい声が聞こえてきた。

「眠っていい」

囁けば、ファアラはとろんとした瞳を向けて、そして微笑んだ。

「ありがとうございます、ございます おやすみなさいませ」

小さな小さな言葉はジャックにしか届かないような大きさだったが、周囲が沈黙に満ち、そして空洞になっていることもありその場にいた全員に届いてた。

腕の中のぬくもりの重みが増した気がする。

どうやら、深い眠りに落ちたようだ。

青銀の光がひとつ、ふたつ、みつつと徐々に増え、二人の周りをいや、ファアラの周りを漂う。

「おやすみ、  
フアーラ」

青年の腕の中で深い眠りに落ちた新しい代行者を、マーシアの人たちは戸惑ったように取り囲んでいた。

一瞬、沈黙が満ち、そしてジャックが歩く水の音だけが響く。

その中

「 離せ」

引き攀った唸り声のような台詞が、前方から聞こえた。

誰かが走り出す音。

同時に、強引に腕が伸ばされるが、その元皇太子の腕を振り払ったのはジャックではなく水の鞭だった。蛙が潰れたような音を吐き出して、青銀の光を纏った元皇太子が倒れ込む。

水気を含んだ鈍い音が響き、その音がなくなるまで水の鞭は微動だにしなかった。

音が止む。

すると周囲の水は元の姿に戻った。

その様子に彼の周りを取り囲むように漂っていた青銀の光が彼から離れ、ジャックの側に近付いてくる。

ふわりふわりと光が舞う。

幻想的な光の乱舞に、その場にいた大勢が息を呑む。

ジャックを選ぶのか。と誰もがそう思った時、「娘を、渡してもらおうか」と穏やかな口調の中にも苛立ちを感じさせる声音が届く。

ジャックは無言のまま見上げた。

地上の光を漏らす入り口のため影になった男はゆっくりと階段を下りてくる。

石段を降りる音だけが今度は空洞内に響く。

「もう一度言わねばわからぬのか？ 娘を、渡せ」

その声に、ティアアラが顔を上げて「お父様！」と叫ぶ。

わんわんとティアアラの叫びが空洞に満ちた。

腕の中のファーストは懸命に一度閉じた瞳を開けようとするかのよう  
に瞼を引き攣らせているが、強烈な眠気には対抗できないらしい。  
身動きすらも弱々しい。

ジャックは顔を上げる。

見上げた先の元国王は浅黒い肌をした偉丈夫だ。荒々しい黒髪を  
後ろに撫でつけ、口髭が威厳を醸し出している。眼光の鋭い男は蔑  
むようにジャックを見下ろした。

「お断りします」

ゆったりと微笑んで見せた。

虚勢だつて大事だ。

トラガ王国元国王の、威厳に満ちた命令は、命令を聞き慣れた体  
には抵抗するにはきついものがあつたが、ここが正念場だ。

「『水の夫神』！ お主が選んだのはこの私だろう！？ 予こそが  
そなたの新しい代行者に相応しい！！」

空洞に低い声が響く。

まるで戦場で戦士を鼓舞するような声。

その声に周囲を飛び回っていた青銀の光が、元国王の周囲に寄る。  
肩に乗ったひとつを除いて。

ジャックは肩の光を見て、そして顔を上げた。

「残念ながら、『水の夫神』<sup>ウォレス</sup>は悩んでいるようですよ。貴方を選ぶ  
か、私を選ぶか」

きつい光が向けられる。

「引け」

「私は貴方に命令される謂れはない。ファーストを守るためなら剣を  
抜くことも厭いはしません」

「痴れ者が」

吐き捨てるかのように言つと、踵を返し、元国王は立ち去つてい  
った。

その後ろを追おうとして、ティアラは戸惑いを見せた。

振り返つて義姉であるファーストを見、そして父親が立ち去つた先

を見る。

浮かぶ表情は困惑。

「ティアラ、行けばいい」

やさしく言えば、ティアラは泣きそうな顔を浮かべた。

「久し振りに父親に会ったんだ。ファアラだって同じことを言うはずだ」

ジャックの言葉にティアラは唇を噛み締めて、そして眉を顰めた。

「ありがとう」

小さくそっぴい残して、ティアラは父親の後を追った。

元皇太子も悪態を吐きながらも父親の後を追う。

残されたジャックとファアラ、そしてジャックの仲間とアルジー、ソフィアは、困む神官と兵士の指示に従って代行者としての館ではなく、とりあえずで用意された王宮の客間に通されることとなった。

邪魔者がいないのを幸いに、自分は彼女の婚約者だというの言い募り、彼女に与えられた部屋の隣室をもぎ取ることに成功する。

本来なら応接室ですが

侍女頭の苦情の声は聞かなかったことにした。

その後、ファアラは一日中、目を覚まさなかった。

夢を見た。

白金色の髪をした、儂げな少女のような女性が泣いている。

(わたくしは、マシエリア姉さまや、グレメンディア姉さまの代わりなの?)

その問いに返答はない。

『水の妻神』?

ジャックは、まるで無垢な少女のような幼い印象の女性を見つめる。

その女性の白金色の髪の毛の中には、一束だけ薄闇色をしている。そこから目が離せない。

(そう。代わりなの。だから、わたくしは望まない。わたくしの言葉は伝えない。知らせない。たとえそれが、わたくしにとって、とても大切なことだったとしても)

真っ白な肌、白金色の瞳。

その中の一束の薄闇色。

(そう、あの方は 幸せになればいい )  
ふっと吐き出される息。

そして、視線が合う。

(ごめんなさいね。貴方の大切な人を巻き込んで。でも、わたくしには『彼女』が必要な)

しっかりと自分を見つめて少女のような女性、『水の妻神』が弱々しく謝る。

( 許して )

その泣きそうな声にジャックは不安を煽られた。

どうして、謝る

嫌な予感に、ジャックは手をきつく握り締めた。

『水の妻神』の微笑みは、誰かに似ている気がする。

「っ痛！」

寝ぼけ眼で聞こえた声。

あれ？ と思って瞳を開けると、目の前のファースはしっかりと瞳を開いていた。

情けないことに看病をしていたはずが、転寝をしてしまったらしい。

「悪い」

どうやら夢見が悪くて彼女の手をきつく握ってしまったようだ。慌てて離そうとするが、ファースの手が緩く握り返しているのに気がつくともつたいたいなくて離す気にならなかった。

「いいえ。おはよう、ございます？」  
なぜ疑問系。

そう思うが、窓掛け越しの明かりを見ただけでは朝か昼か判別がつかなかったのだろう。

「ええと、たぶん、まだおはよう。で、合ってると思う」「自信なさそうに言えば、ファースはふつと微笑んだ。

その微笑に、誰かの微笑が重なる。  
だが、思い出せない。

とても、とても大事なことだった気がするのに。

「あ、あの」

「どうかした？」

ベッドに寝たままのファースは頬を染めて見上げてくる。

いつもの態度なら起き上がりそうなものに珍しいと思ってい

ると、ファアラは顔を真っ赤にさせる。

「あ、あ、あの着替えたいのです　　が、ジュリアかアルジーさんを呼んで来て頂けませんか？」

寝巻き姿を見せたくないということか。

すでもうそれ以上を見てしまっているのだが、恥ずかしがる彼女をいじめても仕方がない。

「わかった」

と素直に頷く。

立ち上がっても繋いだままだった手を軽く握り返し、そして眉間にくちづける。

「ああ、遅くなったけど、目が覚めてよかった」

にっこりと微笑んで、そしておまけで唇にも軽く啄ばむ。

「……」

ファアラは声にならない声を飲み込んで、瞳を真ん丸にしている。返事は、まだもらってないけど　　とは思ったが、これも口説きの一種だと思って平然とした振りをする。

ぱくぱくと、空気の少ない池で飼われている魚のように口を動かすファアラを見て、ジャックは片目を瞑って「じゃあ、呼んで来ると部屋から出て行った。

今の態度はちよつと軽過ぎただろうか。

まったくもって遊んでなんかないのに、遊んでいた男って思われるのはかなり困るな、と続き部屋への扉を開けながら顎を撫でる。髭が伸びた。

ファアラが眠り込んでから、明け方の看病が俺の担当になった。

この城の女官や侍女に看病を頼むのはまだ心許ない。だから、三人で担当を決めて、なるべく明け方までの長い時間をジャックが担当することになった。

二人に無理をさせて倒れられたら困るし、昼間にいろいろな人物からの接触を排除してもらえる方がありがたい。

応接室の隣の控えの奥に侍女が待機する部屋がある。

その扉を叩いて返事を待つ。

出てきたアルジーにファアラが目を覚ましたことを伝えると、彼女は両の手を組み合わせて呟いた。

「神様！」

その感謝の声を聞いて、ジャックは思案する。

その、『神』とは誰のことだ？

と。

彼女たちが拜んできた『神』と呼ばれた存在たちは既にこの世にいない。

ならば、その神とは誰だ？

信じる方向はどこへ向かっている？

ジャックは息を吐き出すと首を振った。

考えても仕方がないことだ。

ファアラは無理をしないため、寝台の上で胃にやさしい食事を摂らされた。相変わらず過保護だが、でもこれくらいしないと彼女はすぐに無理をする。

その後、着替え終わると待つていたかのようにマーシア国王から謁見に来るようにとお達しがあった。

ファアラは身に纏った白に金糸の施されたドレスを優雅に翻して目覚めるまでジャックが座っていた椅子から立ち上がる。

マーシアとトラガでは衣装の形が違う。トラガの民族衣装は右手が懐に入りやすい形をしていたが、マーシアでは裕の上に貫頭衣を纏うのが通常のようなのだ。トラガの衣装と同じで体の線はあまり強調されない。

彼女が身につけているのは『水の妻神』<sup>ウイリア</sup> 代行者の巫女装束のため、裕の襟元はやわらかな布が用いられ、同じようなやわらかく軽い肩掛けもある。

衣装としての違いはそれくらいなのに、異国に居るとい印象が強い。

( どうしてだ？ トラガだって、俺にとっては異国なのに ジャックは首を傾げる。 )

「わたくしの騎士も同行させてよろしいですか？」

ファアラは伝達に来た騎士を見上げて、尋ねる。

彼女の何気ない物言いにジャックは息を呑む。

わたくしの騎士。

それが嬉しい。

単純だと思うが、彼女を守る人間だと自分が認識されているのが、

それだけでも嬉しくてたまらない。

「ええ。国王陛下も貴方の騎士たちと侍女、関連するすべての者を呼ぶようにと仰せです」

「ありがとうございます。あと、勝手な申し出ではありませんが、元トラガ国国王陛下と皇太子殿下が『水の夫神』<sup>ウオレス</sup>となった暁には、わたくしは代行者をご辞退申し上げます」

「え？」

騎士は目を見開く。

そして、周りにいたジュリアとアルジー、そしてジャックも瞳を見開く。

「『水の妻神』<sup>ウイリア</sup>もご承認くださっています」

「ちよっ　　しょ、少々お待ち頂けますか？」

騎士は大慌てで一礼をして走り去っていった。

ファアラの体が崩れる。

ジャックはその手を取って、先程まで座っていた椅子に導く。

大きな息を吐いて頬を撫でるファアラを見やって、ジャックは水差しから杯に注ぎ、一口含む。確認してから跪きファアラに差し出した。

「大丈夫か？」

差し出された杯を躊躇せずに飲むファアラを見つめてジャックは破顔する。

手を取っても当然のように許される。差し出した物を躊躇いなく口にする。言ったことを素直に信じてもらえる。

恋心以前の、信頼という気持ち彼女からは溢れている。

誰かを信じるというのは難しい。

それなのに、ファアラは疑う様子もなく自分を信じてくれる。

それも嬉しい。

「ありがとうございます。正直に言えば、あまり体は大丈夫ではありませんが、国王陛下との謁見は心しておりましたので、心は大丈夫です」

「さつき言つてたのは、本気？」

跪いたまま見上げれば、ファアラは微笑を浮かべた。

「本気です。体の中の『水の妻神』<sup>ウイリア</sup>ともお話をしたのですが、わたくしはあの二人が怖い。そして、あの二人はわたくしの話を聞きません。それでは困るのです。『水の夫神』<sup>ウオレス</sup>の意思ばかりを優先したため、この国は」

ファアラはそこまで言つて口を嚙む。

「この国は？」

首を傾げて問えば、ファアラはジャックを見やつて微笑を浮かべる。

「秘密、です。『水の妻神』<sup>ウイリア</sup>とわたくしの、女の秘密です」

まるで悪戯っ子のような、そんな笑顔を見せられては追求できない。

「それは、俺が『水の夫神』<sup>ウオレス</sup> 代行者になれば教えてくれる？」

ジャックの言葉に、ファアラはしばらく考えて、そして淋しげな微笑を浮かべた。

「わかりません。その時にならなければ」

ファアラは言葉を濁した。

しばらくして、先程の騎士とは違う、文官と思われる壮年の男性が部屋に訪れた。

恭しく一礼をする。

「国王陛下が、ファアラ様とジャック様にご面談されたいとのこと。但し、私人としての面会なので、なにとぞ構えることなくいらして頂きたいと仰せです」

ファアラは瞬きをして小首を傾げた。

「私人として？」

ジャックは椅子に座るファアラの背後に控えていたが、同じように瞠目する。

「はい。『水の夫神』<sup>ウォレス</sup>が決まるまで、貴女の身分は不確定ですから、謁見の間でお会いするのは遠慮した方がいいだろうと」

謁見の間で代行者として会えば、もしも『水の夫神』<sup>ウォレス</sup>が二人の内どちらか一人を選べば、ファアラは辞退することになる。その後、問題になるだろう。

「わかりました。お心遣い、感謝いたします」

ファアラが立ち上がる気配がしたので手を差し出す。

その差し出した手に、躊躇われることなく置かれる手。細い、そして白い手。

「ありがとうございます」

わざわざ礼を言うのがファアラらしい。

文官に先導されて案内されたのは温室で、硝子の間と呼ばれているそうだ。色とりどりの花が咲き誇っている。だが、その花は花木が多く、しかも実をつけるものが大半だ。花木の下に鉢で植えられた花々がまるで道を作るように置かれていた。

「まあ、綺麗ですね」

ファアラが見渡して微笑する。

穏やかな微笑みに安堵する。

「王妃様のお好みです」

「そうなんです」

ファアラは薄紅色の八重の花をつける枝を手に取り、目を細める。手折る気はないようで見つめた後に静かに枝から指を離した。

「この温室は気に入って頂けたかな？」

騎士に伴われて入ってきた人物は、背が高い。

淡い金の髪を短く切った端正な人物だった。華やかな容貌なのに、受ける印象は若木のように。

その後ろには、先程ファアラが手にした八重の薄紅色の花のような女性。

華やかというよりも愛らしい雰囲気の女性だ。

「マーシア国王、イグナーツ・イオニアス・イステル・マシエリアです。イグナーツと呼んで頂ければと思います。代行者候補殿」

イグナーツはファアラの前で跪き、そして手を取り接吻する。

そして立ち上がると後ろの女性に手を差し出して、彼女を前に出す。

「妻のユステイーナです」

「お初にお目文字仕ります。マーシア国王妃、ユステイーナ・ユリアーナ・グレメンディアです」

まるで恵みの季節に綻ぶ愛らしい花のような女性は、優雅にお辞儀をする。

「こちらこそ初めまして。ファアラ・ミリアファアラ・セントレル・グレースタ・トラガと申します。故トラガ国では『光の女神<sup>ソレラ</sup>』代行者を務めておりました　あの」

ファアラはお辞儀を返した後、小首を傾げた。

「まあ、お気付きですか？　今、五ヶ月目に入ったところですよ。やさしい手つきでお腹を撫でたユステイーナはにっこりと微笑む。

「おめでとうございます」

ファアラが目を見張って、そして破顔した。珍しい。ここまで満開の笑顔を見たのは彼女と出会ってから初めてだ。

「おめでとうございます。ジャクソン・ドウリー・ブレースタと申します。ファアラ姫の騎士を務めております」

ジャックは名乗ると膝を折り、マーシア国王妃の手を取り国王と同じように挨拶をする。

「挨拶も済んだことだし、堅苦しいことは抜きにして茶でも楽しもう。ユステイーナ、転ぶといけない。早く椅子に座りなさい」

イグナーツは甲斐甲斐しく妻の手を取り、硝子の間の中央に用意された腰掛に座らせる。

妻が座った傍に椅子を引き寄せて、国王が座る。

この温室に四人以外の人物は見える場所にはいない。四方の入り口は厳重に警備がされているが案内してきた文官も二人が中に入ると同時に引き返している。

無用心ではないか？

他国の王とはいえ、なんだか心配になる。

ジャックは帯剣をしたままだ。

もしもがあつたらどうするつもりだ。

「国王陛下。わざわざお時間を作っていただいたのは何故でしょうか？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4525n/>

---

いざたて戦人よ

2012年1月12日01時49分発行